

一党追放

藤咲晃

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

※小説家になろうでも連載中

かつて遙か彼方の空に住う神々の楽園崩壊は地上に未曾有の大災害を与え文明と生物は一掃された。

それから長い年月の果てに人類と魔物が誕生する。

時は開拓期240年。

前人未到の大地を開拓する者——冒険者達の手によって魔物を討伐しながら人類は徐々に生存圏を拡大していた。

そんな中、名も無き大陸で活躍する冒険者一党【竜の顎】に所属していたユキナは、と

あるクエスト対象を目前に一党のリーダーである兄から告げられる。

『魔力が使えない欠陥品を抱えるのはもううんざりだ。だからお前はクビだ』

解雇宣言にユキナは一党を追放され、港町アスガルに飛ばされてしまうのだった。

途方に暮れた末、再び冒険者として再出発する道を選んだ彼女は、なんと一ヶ月もの間誰とも一党を組めず路地裏で倒れるのだが……。

目次

プロローグ 少女は追放される

1

一章 クエストの先へ

行倒れ

6

その頃兄達は

14

質問に答えたのに……

23

依頼主の忠告

28

不安

32

魔物にとって冒険者は悪

36

レノの決断

45

二章 地下水路のスライム

あれから一ヶ月

50

蛇口からこんにちわ

56

命名！ 蛇口スライム事件

60

スライムの粘液にまみれて

66

ギルドの業務

74

三章 溢れる幽霊と過去の因縁

悪夢

80

溢れる幽霊

84

一騎討ち

92

絶望

103

静かな教会

110

過去の刺客

114

目覚めは病室

122

四章 海底に潜む謎の生物

歩み寄ろうと決意した日

128

話し合う二人

135

海原のクエスト

142

海底に棲まう化物

150

領主は頭を抱える

156

間章

受付嬢

159

五章 貴族の屋敷に招かれて

黒竜と竜の顎

163

冒険者宛ての招待状

168

平原を駆ける一角獣

174

憩いの公衆浴場

178

地下牢の中で冒険者たちは騒ぐ

182

パーティー準備に向けて

187

夜道の襲撃

195

幻の令嬢

203

最終章 さよなら

動く者と薬売りを襲った事件

211

動く冒険者一党

215

理解する者

218

不吉な予感

222

ユキナ・テュラリアの背中

229

オークの騎士団

234

悪魔とアダム

239

最終話

ユキナが選んだ答え

—

248

プロローグ～少女は追放される～

開拓期240年、春の季節。

新大陸北部の開拓に向けて冒険を繰り広げる冒険者一党【竜の顎りゅうのあぎと】は、とあるクエストを前に決断を迫られていた。

夕暮れが夜に染まる頃。

長い白髪に頭頂部にアホ毛を生やした少女——ユキナは赤い瞳で目前に広がる篝火をぼんやりと見つめては、空を見上げる。

夜の星空に浮かぶ月。そして昼夜間わず浮かぶ砕けた天体が映り込む。

夜空を見つめる彼女の背後から三人の足音が響く。

話し合いが有ると言ってテントに向かった仲間の三人が戻って来た。

ユキナが立ち上がり振り向くと。

三人の内一人、冒険者一党【竜の顎】リーダーでユキナの実兄——アスベル・テュリアが白髪とアホ毛を鬱陶しいげに掻き分け、赤い瞳でユキナを睨む。

いつもと様子が違う兄と仲間達の視線にユキナは小首を傾げた。

何も分からない。

そんな様子を見せるユキナにアスベルは忌々しげな視線を向け、ゆつくりと口を開く。

「お前はクビだ」

唐突の解雇通達にユキナは困惑と胸の痛みを隠せず、

「どう、して？」

自分でも動揺を隠せなかったのか、震えた声に驚きつつもアスベルたちから眼を逸らさない。

彼らの瞳はどれも冷淡で、ユキナは動揺と心の痛みからスカート裾を握り締めた。

「いい加減うんざりなんだよ。魔法が、いや魔力そのものを操作できない欠陥品を抱えるのは！」

欠陥品。

魔力操作欠落症を患う者に与えられる蔑称だ。

ユキナは生まれ付き魔力操作ができなかった。しかし魔力が操作できない事実事態に彼女自身興味がなかった。

魔力が使えずとも魔物は剣でも殺せる。

だから今まで兄達と冒険者としてやって来れたとユキナは自負していた。

何事にも関心が薄い自分に良くしてくれたリイテアとリド、そして兄。兄に誘われ冒険者となつて四年に渡る記憶が駆け巡る。

色濃く鮮明に呼び起こされる大切な記憶。大好きな仲間達と離れたく無い。

同時に無関心で前に出て剣を振るうしか脳が無く、ここ最近足を引つ張りている自身の行動が浮かぶ。

欠陥品と呼ばれても否定できない紛れもない事実、自分は遂に兄達から愛想を尽かされたのだ。

兄が不要と言うなら自分はもう不要な存在だ。だからユキナは、

「……分かった。……さよなら」

彼女の決断と行動は迅速だった。

僧侶のリイテアが何か言い出すよりも、魔剣士のリドが口を開くよりもユキナは行動に移す。

三人が何か告げる前に、ユキナはテントの自分の荷物を手早く纏め、夜の闇に向けて歩き出していた。

「……待て」

アスベルの声にユキナは足を止める。

「なに?」

向けられる赤い瞳。されども涼やかな眼差しにアスベルは若干狼狽えるも金袋を投げ渡した。

「二党を追放する。その上でお前が野垂れ死んだら僕達の名声に関わるからな。

ソイツは今回請けたクエストの前金、お前の取り分だ。……それとリイテア」

「はい。……今からお前を南に在る港町アスガルに飛ばす。そこで冒険者として一からやり直すも……」

リイテアは間を開け、何か言いかけた言葉を飲み込んだ。

「……いえ、別れるお前にとっては必要な助言でしたね」

懐から魔力の詰まった結晶を取り出し、リイテアは転移魔法を唱え始めた。

長く淡々と告げられる詠唱。そして徐々にユキナの足元に広がる魔法陣。

リイテアが詠唱を終えると同時、ユキナの視界は白く染まり——【竜の顎】の野営地からユキナはその姿を消した。

海のさざ波にユキナは眼を覚ます。

周囲を見渡すと、星明かりに照らされる海と港町アスガルを囲う魔障壁の外壁。そして港に停泊する船だった。

周囲には誰も居ない。代わりに春の風が潮の香りと魔物の遠吠えを乗せ吹く。

「これからどうしようっ……」

何もやりたい事が無い。

自分には故郷も無く血の繋がった家族も兄以外に居ない。帰るべき場所は一党の仲間達の所だったがそれも失った。

遠く離れた地にもう一つ帰るべき場所は有るが、きっと二人を酷く落胆させてしま
う。

一人になったユキナは、帰る選択肢を除き一先ず町に向けて歩き出した。

一章 クエストの先へ

行倒れ

空腹とは時に人から活力を奪い、やる気を削ぎ落とす。

冷たい石畳の路地でユキナは力無く倒れていた。

「……お腹、空いた」

【竜の顎】リゆうのあぎとを解雇されてから一月。

ユキナは冒険者として再出発する道を選んだのだが、そこで彼女は様々な問題に直面した。

- 一つ：クエストは誰かと一党を組まないと請けないこと。
 - 二つ：誰かと一党を組んだが、欠陥品のためすぐに解雇されること。
 - 三つ：ギルドが下す総合評価がF―判定だったこと。
 - 四つ：ユキナ自身があらゆることに無関心かつ頓着が無い。
- 結果、ユキナは一ヶ月間正式に一党を組めず、食事も疎かにしていたため力尽きて今に至る。

幸い【竜の顎】所属時に貯めたクエスト報酬と渡された前金が有ったため宿と当面の

生活に困ることは無い。問題なのは身体が動かせないことに有った。

「どうしよう」

空腹で動けず困るユキナは空を見上げた。

広がる青空と流れる雲。

港から風が運ぶ潮の香り。

そして相変わらず砕けた天体——【楽園】が空に寂しげに浮かぶ。いつか自分も雲や海のように流れたい。そんな事を考えていると。

「行倒れ、か？」

若い男の声がユキナの背後から聴こえる。

「お腹空いた」

「行倒れだな。ならお兄さんが奢ってあげよう。あー、動けるか？」

「無理」

淡々と答えるユキナに男のため息が聴こえる。

やがて男はユキナを軽々と持ち上げ、お互いに眼が合う。

そこで初めて互いの顔を知る。

「……これは」

「どうしたの？」

「いや、何でもない」

夜のような黒髪に金色の瞳をした男は、いい拾い物をしたと若干口元を吊り上げ、ユキナを担いだまま冒険者ギルドに向かった。

立ち去った男に通リ掛かりの住人達は、

「通報しておくか」

「大丈夫、もう守衛に通報したから」

「良い判断ね。ギルドの方にも連絡しておくわ」

それぞれ動き出し、程なくして通報を受けた守衛が駆け付けるのだった。

▽▽▽

テーブルに運ばれたラザニアをユキナは、フォークで取り一心不乱に食べていた。

ホワイトソースとチーズの濃厚な味わい、オーブンで焼かれたパスタのやや硬めの食感がユキナの空腹を満たしていく。

男から見たユキナは、小柄でウサギを彷彿とさせる白い髪と瞳の色。目鼻が整いあどけない顔立ちにかわいらしい少女の印象を受けた。

しかし男が気になるのは揺れ動くアホ毛だ。しかも無表情のユキナに対して男は困惑を隠せず、

「う、美味いか？」

「美味しいよ」

ならもつと表情豊かにリアクションが有っても良い筈だと男は内心で思う。

しかし、世の中には様々な事情や生まれ付き感情表現が上手くできない者も居る。だから目の前の少女もその類いなのだろう。

自己完結した男は、しっかりと食べたユキナの量に口元を吊り上げながら話を切り出す。

「俺はレノ・リーシュ。アンタは？」

レノにユキナは口に含んでいたラザニアを飲み込み、淡々と答えた。

「……ユキナ・テュラリア」

「テュラリア？ どっかで聴いたような？」

何処かで聴き覚えの有る家名にレノは記憶を探ったが、すぐに思い出せない事から大した情報じゃないのだと捨て置く。

いま優先すべきは彼女に対する印象だ。

「……ふむふむ。クール系美少女ってところか」

彼が言っていることを理解できなかったユキナは小首を傾げた。同時にレノは見た、ユキナのアホ毛が連動するようにハテナを形作っていることに。

（アホ毛が感情に連動してるとでも言うのか!? いや、きつと感情表現が苦手だから魔

法で操ってるに違いない)

「それで一つ確認したい。ユキナは冒険者なのか？」

ユキナは空になった皿にフオークを置いてから。

「うん」

頷き応えた。

「そうかあ！ そうかあ！ 実は俺さあ、冒険者になったばかりでまだ誰とも組めて無くて困ってるんだけどさあ」

「良いよ」

「そこで食った分はきつちり……いまなんて？」

奢った分は色を乗せて働く形で返してもらおう。ついでに一党を組んで彼女とお近付きになりたいという思考のもと、レノは交渉を切り出したのだが、予想しなかった返答に思わずユキナに聞き返す。

「組んでも良いよ」

赤い瞳ながら涼やかな眼差しで答えるユキナに、レノは頭を掻いた。

ユキナにとつてレノは食事を奢ってくれた人。

それ以上の興味は無いが誘われたため応じたに過ぎない。

一緒にクエストに行つて一党の成立できればそれに越したことはないからだ。

「それじゃあ早速申請しに……」

レノが言い終える前に守衛が彼の肩を掴み、

「アスガル守衛隊だ。署で話しを聴かせてもらおうか？」

笑っている守衛にユキナは小首を傾げ、レノの顔が青ざめる。

「悪いことしたの？」

「ち、違うんだ！ 俺は決して何もしてないぞ！」

何が起こっているのか分からず問うユキナに弁明するレノ。

そんな様子を静かに見守る他冒険者一党とギルド職員。

彼らは互いに眼で合図を出し合い、同時に頷く。

面倒に巻き込まれたくない。傍観に徹しよう。それが彼らの導き出した解答だった。

「何が違うと言うんだ？ 言っておくけどな、お前さんが怪しげな笑みを浮かべてお嬢ちゃんを担いでる目撃証言だって得てる」

「!? 待ってくれ。本当に待ってくれ！ 行倒れの子が居て流石に無視もできず、持ち上げたら可愛い女の子だった。だから思わず役得に感じてにやけただけで……決してやましい気持ちなどこれっぽっちも、ちよつとしか無い！」

レノの弁明に守衛はため息を吐く。

「やましい気持ち、少しは有るんじゃないか。……まあお嬢ちゃんがこいつに何もされ

ていないって言うなら此処は見逃すけど？」

守衛は黙って静観していたユキナに視線を向けた。

助けを乞うように手を合わせるレノにユキナは……。

「……」飯奢って貰った」

「何か交渉されたりとか、脅されたりとかは？」

「？ 一党に誘われて承諾した」

ユキナの証言に守衛は納得した様子を見せ、レノの肩を放した。

「話しは分かった。住人の勘違いだったってことで話しはこれで終わりだな」

「お、おう。分かれば良いんだよ」

「お嬢ちゃん、何か有ればすぐにアスガル警備署を尋ねるんだぞ？」

守衛の言葉にユキナは頷き、彼は満足気な笑みを浮かべながらギルドから立ち去った。

「はあく。とんだ災難だった、まさか冒険者になって早々守衛の世話になりかけるなんて」

しかし落ち込んでばかりもいられない、とレノはすぐに立ち直る。

これから美少女と明るい冒険者生活が待っている。そう考えただけで彼の胸は心躍り、足取りも軽やかなものだった。

「じゃあ早速申請しに行こうぜ！」

笑顔で告げるレノにユキナは淡々と頷き返すだけだった。

その頃兄達は

一方その頃〔竜の顎〕は。

巨大な繊維の集合体——マザーウィルと死闘を繰り広げていた。

飛び交う魔法の火線と爆発。爆炎と雷鳴がマザーウィルの肉体を吹き飛ばす。

しかしマザーウィルは肉体が損壊した瞬間から元通りに肉体を複元させる。

声帯器官を持たないマザーウィルは、激しく全身を震わせ魔力を宿した鱗粉を周囲に撒き散らす。

「来るぞ！ 全員退避！」

アスベルの声に、リドとリティアが弾けるようにその場から離れ防御魔法を唱えた。

周囲を漂う鱗粉にマザーウィルが爆炎を放つ。

爆炎の火花が鱗粉に燃え移り連鎖的に弾け、炎の色が白に変わる瞬間、アスベル達の視界が白炎に染まる。

魔法とマザーウィルが持つ鱗粉を合わせた鱗粉爆発は、周囲に破壊を齎し大地を抉る。

広範囲にも及んだ爆発、その場に残されたのはマザーウィルの肉片と防御魔法に護ら

れた【竜の顎】のみ。

自らの魔法に巻き込まれたマザーウィルの残骸に、決してアスベル達は警戒を緩めなかった。

それはまだマザーウィルが生きてるからだ。

「肉片を回収する！」

アスベルは指示と同時に弾けるように駆け出した。

地面に転がるマザーウィルの肉片を特殊な鉱石で加工された容器に入れ、

「こっちからも回収完了しましたよ！」

「俺の方もだ！」

二人の作業完了にアスベルは転移魔法を唱え、一党はその場から退散する。

その場に残されたのは蠢き出す肉片。

肉片は徐々に一箇所に集まり元の姿に戻る。

獲物が去った様子にマザーウィルは、静かに触手を揺らすばかり。

一ヶ月前に請けたクエスト、北部の山脈への道を触手で塞ぐマザーウィルの討伐。

アスベル達は拠点にしていた北部の町アルドラのギルドに向かうや否や、受付にマ

ザーウィルの肉片を手渡す。

「あつ！ 遂にマザーウィルの討伐を成し遂げたのですね！ これです貴方達も伝説です

ね！」

受け取った肉片に喜びを露わにする受付嬢にアスベルは顔を顰めた。

「討伐は無理だった」

「えっ？　だつて肉片を持ち帰ったじゃないですか」

「マザーウィルは不死の存在だったのよ。だから討伐は不可能」

リティアの説明に受付嬢の顔が青ざめる。

今までマザーウィルに挑んで帰って来た一党は存在しない。

どんな強者も返り討ちにしてしまう危険な魔物。そう、ギルドも国家も認定していたが前提が覆った。

どんなに強者が挑もうが、殺せない存在を殺す術は無い。故に何も知らず挑んだ一党は、倒した筈のマザーウィルによって殺されてしまうのだ。

加えてマザーウィルはあらゆる物理攻撃が通じない。通用するのは魔法のみ。

「それじゃあ……北部、あの山脈の向こう側は未知の領域のままということですか？」

「そうなるかな。けど、研究機関にマザーウィルの肉片を提供すれば何か突破口を生み出してくれるかもしれない」

だからアスベル達は最初の接敵で討伐を断念。方針を切り替え肉片の回収に及んだ。

肉片を三つ回収するのに一ヶ月の時間を費やした。

マザーウィルが扱う魔法、攻撃範囲と活動範囲。生態系を調べ、今日やつと一ヶ月の努力が報われたのだ。

「分かりました。この件は支部長に任せる形になりますが、宜しいですね？ ああ！

恐らく後日マザーウィルの研究成果次第では国から恩賞が与えられると思いますが……」

「それで構わないよ。ああ、決してその箱を開けないように。開けるなら確実にマザーウィルを封じられる者達の側で頼むよ」

それだけ告げたアスベルは仲間を連れ宿部屋に戻った。

【竜の顎】が拠点にと確保していた部屋で、

「ふぐううう!!」

アスベルは床に崩れ落ち、大泣きしていた。

決してクエスト失敗からの悔しさでは無い。

彼が泣く理由は一つだけだった。

「また泣いてるよこいつは……そんなに後悔すんなら最初から決めなきや良かったろうに」

リドの呆れた眼差しに、アスベルは涙に塗れた顔を上げた。

「だつてよおお!! 寂しいんだよおお!!」

「確かに寂しいですよ。本当に……あ、涙が」

リティアは頬を伝う涙をハンカチで拭く。

「だからあの時言つたら？ 本当にそれで良いんだな、後悔はしねえんだよな？ つて」

「言われたけど……リドだつてあの決定には賛成だつたら」

「まあ、な。正直言つて、後悔してないと言えば嘘だ。……本当は俺も寂しいよ。けどなあ……」

リドはアスベルに眼を向け、言い淀んだ。

一ヶ月前、アスベル達はマザーウィルに挑む前に奴に付いて調べた。

奴に挑み散っていた冒険者達が遺した手掛かりを基に。

その中で発覚したのが、マザーウィルは魔法以外では傷付けられないという耐え難い事実だった。

そう、ユキナは魔法が使えない。

だからマザーウィル討伐に彼女を連れては、いずれユキナの身に危険が及ぶ。

無論、アスベル達もユキナの剣技がどれだけ優れているのかも理解していた。

アスベルとリドが十の魔物を殺す間、ユキナは淡々と十一の魔物を殺せる。

純粋な身体能力と最適な身体の動かし方だけで彼女は大抵の魔物は討伐できる。

しかしマザーウィルのような物理攻撃が一切効かない相手ではユキナはたちまち無

力だ。

そして彼女が仲間のために無茶をするのも、身を挺することも明白だった。だからこそその追放だった。

リドはそこまで思い返した上で、言い淀んだ言葉を紡ぐ。

「ありやあねえよ。あの子に欠陥品なんて罵声はよ」

「私も驚きましたよ？ 当初の予定では悪役を演じてまでユキナを一党から外すということでしたが……まさかあんな言葉を兄の貴方が使うなんて」

「ごめんよおお!! 最低な兄ちゃんです本当にごめんよおお!!」

二人の冷たい眼差しにアスベルは、ここには居ないユキナに涙を流しながら叫んだ。

もう一ヶ月前の話を今更蒸し返すのも阻まれたが、落ち着いた今だからこそ聞くべきだとリドは考えていた。

「で、何であんな言葉を？」

彼の質問にアスベルは涙を腕で拭い、

「悪役に徹するにはどうすればいいのか。ユキナは本当にいい子だから、ちよつとの事じゃあ離れないだろ？」

「確かにそうですね。あの子は、基本無関心ですから他人に欠陥品だと罵られようと気にもしませんからね」

「まあ、兄貴のお前に言われりやあ話しは別だろうけどな」

「そう。だから僕は心を鬼にして言ってしまったんだよ、最低な言葉を、兄である僕自身があの子に対して！」

アスベルが心を鬼にして演技に走ったのは二人にも理解できた。

確かにユキナは、ちよつとのことでは動じない。

彼女が動じるとすれば幽霊と遭遇した時か、大量の昆虫に襲われた時ぐらいだ。

しかしこうも思う。大好きな兄に裏切られ見捨てられたと彼女が感じたのではないか？

事実彼女は裏切られたと感じているだろうか、それとも捨てられた事実だけを受け入れたのか。

今更だ。リドは自身の考えを自嘲気味に嘲笑う。

追放という選択を選んだ時点でユキナが傷付くことは理解していた。だから今更手紙を送ろうものならそれは単なる自己満足と言いつに過ぎない。

発端はどうあれ結果が物を言う。なら「竜の顎」はいずれユキナを追放した対価を払わなければならない。

アスベルもリティアもそれが分かっているからこそ、手紙を送ろうとはしなかった。それに本来の目的も有る。

「……けど、もうユキナを連れ戻しても良いんじゃないだろうか?」

物思いに浸かるリドはアスベルの言葉に顔を顰める。

確かにユキナを危険から遠ざける目的も有ったが、実際それはオマケに過ぎない。

本来の目的が、自分達ではどうにもできない問題が有ったからこそ彼女を追放するに至ったのだが、果たしてアスベルは覚えているのだろうか?

そんな疑問にリドはコホン、と一つ咳払い。

「あー、本来の目的を忘れた訳じゃないよな?」

「……………もちろんだとも」

間を空け視線を泳がせるアスベルに、リドは深いため息を漏らす。

妹のことになるとコイツは果てしなくポンコツだ。

いや、アスベルだけに限らず自分もリティアもユキナに対しては甘く、つつい甘やかしてしまう。

だからだ。だからユキナを追放するという最低最悪の結末を選んだ。

「今のままじゃあユキナは何処かで躓く。そんな未来を危惧したお前が忘れてんじやねえよ」

「それに一ヶ月だぞ? もう誰かと一党を結成してるかもしれないねえんだ、上手くやれる場合俺達が壊す真似をするわけにはいかんだろ」

これ以上ユキナから奪つて何になる？　そう言った意味でリドはアスベルを咎めた。「そうだった。……僕達以外の冒険者と一党を組ませる事である子の世界を広げることが目的だった」

「ええ、長年共に居た私達ではあの子の成長の機会を奪うだけですからね」

結局のところ【竜の顎】がユキナを追放したのは、彼女を想つてことだった。

ユキナが欠陥を抱えようとも彼らにとつては、問題になり得ない。

それこそ世間が欠陥品を抱える一党と軽蔑しようが、それで落ちる名声ならアスベル達は、その程度で落ちる名声など不要と断じるだろう。

質問に答えたのに……

早速一党を組んだユキナとレノは、クエストを請け馬車に揺られていた。

「お二人さん、魔物が来たたら頼みまっせ?」

「大丈夫だつて! その変わりアンタは……」

「お二人さんをシユルク村まで乗せる。分かってますよ」

二人が請けたクエストとは、シユルク村の畑を荒らすゴ布林討伐だ。

レノはもう少し骨の有るクエストを熱望したが微笑む受付嬢の、

『新米が調子に乗るな』

一言に渋々用意されたクエストを請けたのだった。

そんなやり取りを思い出したレノは若干不貞腐れ気味に、隣に座るユキナに眼を向ける。

「しかしまあ、ゴ布林討伐なんかよりももう少し報酬の良いクエストの方が良かった

よな?」

ユキナに同意を求めるレノに、彼女は眼を向ける。

「クエストなら何でも良い」

「あー、つまりクエストは選ばないってことか」

レノの問い掛けにユキナは黙り、青空に眼を移す。

なんともやり辛い仲間だ。

可愛いが、物静かでクール。しかし赤い瞳から受ける印象は涼やかな眼差し。

それはまるで瞳の色とは違う相反する色が同居してるようだ。レノは感じていた。

ただ可愛らしい容姿とは違って眼を惹くのが、彼女の腰に携帯された剣だ。

それは長剣にしてはデカく大剣にしては小さな剣だった。

小柄で華奢な体格とは不釣り合いな剣に、しつかり扱えるのか一抹の不安が過ぎる。

「……なに？」

先から感じるレノの視線にユキナは小首を傾げる。

「い、いや、何でもない」

頬を赤くして顔を背ける彼に、再度小首を傾げた。

「……ちよいとお二人さん、早速仕事になるかもですね！」

業者の焦ったような声に二人は同時に前を振り向く。

馬車の前方に見える黒い狼の群れに、レノと行商人が弛唾を飲む。

それは黒狼と呼ばれる魔物で、雄を中心にした群れ獲物を狩る狼種だった。

俊足と灼熱の魔法を持ってして狩る平原の狩人として新米冒険者には脅威とされる

魔物としても有名だ。

まだ互いの連携も明確な実力も分からない新米冒険者一党が、統率の取れた動きに翻弄され喰い殺される。

故に新米冒険者のレノと彼が新米である事を知っている業者は汗を滲ませた。

馬車に刻々と迫る黒狼の群れ、馬車の進路を変えたとしても一度補足されたら最後、決して逃げる事は叶わない。

残された手段は戦う他に無い。

「馬車、停めて」

ユキナの鈴のような声が、緊迫する二人に届く。

既に剣の柄に手をかける彼女にレノは若干狼狽えた。

「まさか、挑むつもりか？」

「ん」

涼やかな瞳で頷く少女に、レノは頭を掻く。

彼女がやる気になっていると言うのに、自分が弱気になっていてはダメだ。

闘志を沸き立たせレノは立ち上がる。

「おっちゃん！ この子の言う通りに！」

「……仕方ない！ 俺も魔法で出来る限り援護しやすから、どうかお気を付けて！」

迫る群れを前に馬車が足を止め、ユキナが弾けるように馬車を飛び出す。地に脚が着く瞬間、彼女は大地を蹴り剣を引き抜くと同時。

ユキナは疾風の如く、群れに剣を振り抜く。

水平に走る刃が黒狼の首を斬り、血飛沫が舞うよりも早く次の獲物を斬る。

突如襲来した獲物に黒狼も炎の爪や火球を武器に立ち向かう。

振り抜かれる炎の爪、飛来する火球にユキナはまま向けず避ける。

そして少女は無心で淡々と作業を繰り返す。

決して足を一度も止めず、飛来する魔法を避けながら斬るといふ作業を。

馬車に残された二人は、血飛沫が舞い悲鳴染みた鳴き声、ついでに黒狼の頭部が舞う

光景に呆然としていた。

魔法による援護と格闘術を交えた立ち回りで黒狼を迎え撃つ。

レノが頭に描いた展開は、ユキナが真っ先に飛び出したことで消えた。

同時にレノと行商人は、勇ましく一人で群れを蹂躪するユキナの姿に胸がキュンとなった。

彼女が飛び出して一分も経たない頃。ユキナは剣にこびり付いた血を払い鞘に納める。

屍化した黒狼を背にゆっくりとした足取りで馬車に戻り、

「終わったよ」

アホ毛を揺らして座席に座った。

「お、おう。一体どうやったんだ？」

あくまでも参考程度に質問したレノに、ユキナのアホ毛が揺れる。

「シユツと行つてズババツよ」

擬音と手振りを交えて答える彼女に、

「そつかあ……つて、分かるかああああ!!」

レノは精一杯叫び、それに驚いたユキナの肩がビクリと跳ね、馬車がシユルク村に向けて走り出す。

依頼主の忠告

シユルク村は、開拓期230年に農村地としてシユルクという名の冒険者に開拓された土地だった。

当時まだ開拓地には村も無く、有ったのは拠点として港に建てられたアスガルのみ。

そこから西に向けて開拓が進み、今ではシユルク村はアスガルとイルミナを継なぐ中継地点としての役割も担うことに。

そんなシユルク村は現在、村から近い山の麓の洞窟に巢食うゴブリンに畑や牧場を荒らされ困っていた。

日々拡大する農作物と家畜の被害に村長は冒険者ギルドに依頼することで解決を目指したのだが……。

村長ハシマは落胆していた。

派遣された冒険者は二人の若者、それも一人は女の子で何とも頼りないように見えて仕方なかった。

ブラウスとスカートと言った冒険者に不釣り合いな軽装備、腰の剣と背中の荷物に眼が行くが、彼女の腰には雑囊の類はなかった。

何よりも華奢な体格で戦えるのかと不安が芽生える。

そしてハシマは少女から黒髪の少年に眼を移す。

気の緩んだ陽気な印象を受ける顔立ち、しかし緊張してるのか、表情は心無しか硬い。

少年の黒衣の装いに更にハシマは眉間の皺を深める。

武器の類い無し。そして腰の雑嚢に眼が行く。同時にハシマは成る程と理解する。

待つべき物を二人で役割分担しているのだと。

一人納得するハシマに少年はおずおずと手を挙げた。

「クエストの詳細を聴きたいんだが」

「……此処から山が見えるじゃろ？ あそこの麓にゴブリンがこさえた巣穴が有る。ク

エストはゴブリンの全滅か巣穴の破壊じゃ」

「……なるほど。一応確認するが具体的な被害は？」

レノの質問にハシマは農地に視線を向け、

「主だった被害は依頼書に記した通りじゃが、お主らが到着する前にまた家畜が数頭連

れ攫われたよ」

「襲撃の時間帯は？」

「朝、昼、晩、深夜の四回じゃ。連中は繁殖時期じゃからのう」

一日四度に渡る襲撃。

レノはゴブリンが大規模な群れを形成しているのではないかと睨んだ。推測の裏付けを取るため、彼はもう一度質問する。

「群れの規模は？」

「そうさのう。村の若い連中が魔法で討伐してはおるが、一度の襲撃に十匹、それを四度。交代制なのかは知らんが、これまでに村の集で討伐したゴブリンは二十五匹に及ぶのう」

村の防衛力だけでゴブリンを二十五匹蹴散らせる。

しかし必ず十匹で四度の襲撃となると巣穴には相当数の数が居るとレノは想定した。

しかもゴブリンの雌が一度に産む数は五から十と言われており、妊娠から出産までの期間も二日程度しかないという。

妊娠から出産期間が短いのは何もゴブリンに限った話ではない。

他の魔物も同様に出産期間が短く、決して雌を狩場に出さない。

聞き齧った程度の知識を踏まえ、レノはハシマに告げる。

「ゴブリンはしつかり討伐してやるから、アンタらは安心して暮らすと良いさ」

「……不安じゃのう。その類の言葉を使う冒険者は調子に乗って失敗しやすいからのう。先日だって若い冒険者が来たが、生きて帰って来る事は無かった」

ハシマの忠告とも取れる言葉にレノは頷き、一旦用意された宿屋で荷解きをしてから

山の麓に向かうのだった。

不安

山に続く道は開拓範囲から外れていたのか、人の手が及ばない獣道だった。

凹凸が激しく険しい道のりをユキナは、軽やかな足取りで進む。

「待って！ ちょっと待ってくれ！」

疲労を滲ませるレノの声にユキナは振り返る。

少し離れた距離で額に汗を滲ませる彼に、ユキナは小首を傾げる。

「速い、アンタのペースは速すぎるって！ もう少し歩調を合わせてくれ」

「日が暮れるよ」

「分かっているけどな。何事もペース配分つてのは大事だ、しかもこれから戦闘するのならなおさら」

一党のリーダーであるレノの言い分に一理ある。

それに今までも他の一党と足並みを揃えられず解雇されたことも有る。

失敗の経験を踏まえてユキナは頷く。

「分かった」

軽やかに地面を蹴り、ふわりと宙を跳んだユキナはレノの隣に着地した。

「随分と身体能力が高いみたいだな。……魔力で強化でもしてるのか？ 俺も戦闘中に身体強化は使うが、アンタほどは無理かもなあ」

魔力が使えないからこれは素。

頭に浮かんだ言葉をユキナは飲み込んだ。

言えばまたクエスト後に解雇される。そう受付嬢のルイにも言われたばかりだった。

ユキナは付き合いもそれなりに長いルイの助言に従い沈黙した。

「……これでもう少し愛想が良ければ最高なんだが」

レノが何を言いたいのかわからない。

ただ分かる事は、興味の無い言葉。それだけ。

ユキナはレノの歩調に合わせて歩き出した。

ゴブリンの巣穴を目指す道中、レノは積極的にユキナに話し掛けていた。

「ところで今までどんな感じにクエストを達成してたんだ？ 俺は【初心者導き】に従って動いたが」

新米冒険者がクエスト達成に迷わないように助言を書き記した手記を手にレノは彼女を見つめる。

そういえば、と彼女は思う。

今まで細かい手続き、依頼人との接触や達成後の報告も全て兄達がやっていた。

だからユキナは戦闘以外で自主的に自ら動いた事は無かった。

兄達と離れてから漸く気がつく。自分は今まで兄達に頼り切って甘えていたのだと。

レノの質問に中々答ええないユキナに彼は、

「ああ、なるほどー」

何か納得したように声を上げ、ユキナの肩が跳ねる。

ユキナが剣術以外無能という事を彼は分かってしまった。そんな予想にアホ毛が萎れる。

また追放される。そんな言葉がユキナの頭を駆け巡ると。

「最初は寄生型かと思ったが……黒狼の戦い振りを見るに、戦闘面を頼りにされてたんだらう？　んで、今まで組んでいた一党が細かい手続きなんかを役割分担してた。そんな所だろ」

何か別方向に勘違いしたレノに、ユキナは否定も肯定もせず無言を貫く。

そもそも寄生型というのも否定しきれない部分があるため何も言えない。

『都合の悪い質問はクールを装って無言！　それに限りますよ！』

ルイの助言に従ったユキナにレノは笑う。

「ま、さつきは俺も動揺してたからな。今度は当てにしてくれよ」

元々魔力が扱えないのだから、扱えるレノの方が戦力になる。

そう言った意味を含めてユキナは頷く。

「うん」

するとレノは任せろと言わんばかりに、自らの胸を叩いて見せた。

魔物にとって冒険者は悪

程なくして二人は洞窟に到着した。

中是不気味なほど静かで薄暗い。

入り口付近に散乱する家畜の骨、訪れたであろう冒険者の亡骸が無造作に放逐され、より一層不気味さを際立っていた。

しかし中は、剣を振るうには十分過ぎるほど広い。

そんな不気味な洞窟にユキナが真つ先に踏み込んだ。

「怖くねえのか？」

「……ん」

男前とも思える行動にレノは心強さを感じるが、彼女のアホ毛がわずかに震えているのを見逃さなかった。

ユキナも怖いのを我慢している、その姿がまた可愛らしい。そう思ったレノは、ユキナの隣に付いて歩く。

奥に進むに連れ、岩肌に覆われた通路に変化が訪れる。

岩肌から建材によって整備された通路へと差し変わった頃。

薄暗い通路の横手から、腰に布の腰巻をした緑色の小人が現れた。
ゴブリンだ。

列を作り鉄槍を携えたゴブリンの群れと二人は目が合う。
そしてゴブリンは鉄槍を突き出した。

ユキナはその場から弾けるように鉄槍を避け、剣で鉄槍ごとゴブリンを斬り裂く。
鉄槍を避けたレノが別の標的に魔法を唱える。

「炎よ燃え盛れ」

レノの掌から放たれる火炎が数匹のゴブリンを纏めて呑み込む。

火炎によってゴブリンの身体は焼かれていく。

そのままの勢いでレノは魔法に魔力を注ぎ込む。

このまま一気にゴブリンを焼き尽くす勢いで。

だが、レノが想定していた結果は訪れなかった。

ゴブリンを襲う筈だった火炎が、ゴブリンが作り出した魔力の壁の様なものに防がれたからだ。

ゴブリンの目前に展開されたソレにレノが驚く。

「ゴブリンが魔障壁って聴いたことが無いぞ!」

新米が知り得る知識の中にゴブリンが扱えるとされる魔法、その一覧に魔障壁の存在

は記されていなかったとレノは記憶を探る。

そもそも魔障壁は人類が魔物の脅威から生活圏を護るために編み出した叡智の結晶。

魔障壁の維持と範囲の影響で人口が少ない村には施されないが、主要都市や町には必ず魔障壁が展開されている。

そんな魔法をなぜゴブリンが使えるのか強い疑念が過ぎる。

戦闘の最中、思考が逸れたレノを他所にユキナが魔障壁に迫る。

身を護るために前方に展開された魔障壁は、丁度人が飛び越えるには十分なものであった。

魔障壁の直前でユキナは、地を蹴り壁を足場に跳ぶ。

ゴブリンが展開した魔障壁の頭上を飛び越えるが、そこには待つていたと言わんばかりに槍を突き立てるゴブリンの姿が有った。

「ユキナ!!」

串刺しになる彼女の姿を幻視したレノが叫ぶ。

だが、レノの心配は徒労に終わった。

ユキナは突き出された槍に対し、宙で身を翻すことで避けたからだ。

群れの中心に着地したユキナは身体を捻るように、力の限り剣を水平に放つ。

円を描く斬撃が数匹のゴブリンの首を落とす。

通路を飛び上がるゴブリンの首、それが落ちるよりも早くユキナは次の一手に出る。移動を加えながらゴブリンの群れを内側から斬り崩すように、刃が閃く。

次々と殺される同胞達に怒りを宿したゴブリン達が、同時に鉄槍に風を纏わせ槍術を繰り出す。

突きの連続と払い、同時に巻き起こる風の刃をユキナは一つ一つ見極め避ける。避けるついでにゴブリンを斬る。

展開された魔障壁の先で行われる斬殺撃にレノは息を吐く。

魔障壁の発動時間が終わると同時に、通路に現れたゴブリンの群れは無惨な肉片に変わり果てていた。

「まだ居る」

通路の奥から聞こえる足音にユキナが歩み出す。そんな彼女にレノは後を追う。

通路に出現するゴブリンをユキナが視界に捉えるや否や、即殺して行く光景にレノはゴブリンに心底同情した。

そして分かるのは、ユキナは間違いなく強い分類の冒険者ということだった。

そんな事を考えていると、通路の左右、ユキナの両側に現れた二匹のボブゴブリンが襲いかかる。

炎を纏った剛腕を振り抜く。

両側から繰り出された炎の拳をユキナが避けるが、飛来した火の粉が白い髪先をわずかに焦がす。

左側のボブゴブリンを斬り裂くユキナに対し、レノは地を弾け、右側のボブゴブリンの頭部に拳から衝破を放つ。

頭蓋骨が碎ける音と共にボブゴブリンが崩れた。

「……ありがとう」

涼やかな瞳で真っ直ぐと告げられた札にレノは笑う。

「おう。どんどん頼りにしてくれ」

屈託のないレノの笑みにユキナは剣を向け、

「まっ、なんか気に触ったかあっ!?!」

刺突がレノの頬を素通りした。

恐る恐る視線を剣先に向けると、頭部を刃によって貫かれたゴブリンだった。

「油断はダメ」

「わ、悪い」

淡々と告げられた言葉にレノは萎縮するが、失敗は成功で取り戻す。そう気を取り直して歩き出す。

しばらく通路を進みながら出迎えるゴブリンを討伐しながら移動した二人は、いよいよ巢穴の最奥に辿り着いた。

そこにはゴブリンの雌を護るように鉄槍と魔法を構えるゴブリンの姿があった。

彼らの背後には、隠されるように護られるゴブリンの子供達、産声をあげる赤子のゴブリンの姿まで。

脅威に怯えるゴブリンの子供と雌を護るように二人を威嚇するゴブリンに、

「……コイツはあ。まるで俺たちが悪役みたいじゃないか」

レノは小さく零した。

討伐対象に指定された以上、クエストを請けた冒険者は達成する責任が有る。

だからこそレノは迷わず、悪役上等と怪しげな笑みを浮かべた。

「ユキナも流石に疲れたろ？　ここは俺に任せてくれないか」

「……疲れてないよ」

「そこは、空気を読んで場を譲ってくれよ」

「うん？　分かった」

分かってるようで分かって無い様子ユキナに、レノはため息を一つ。

「要するに俺はまだ何にも見せてないだろ？　アンタとこれから一党としてやって行くには必要なことなんだよ」

レノのその言葉にユキナは漸く剣を鞘に納めた。

じつと涼やかな瞳で見守られる中、レノはゴブリンの群れに駆け出す。

ゴブリンには魔障壁が有る。それを踏まえた上でレノは魔法を唱える。

「雷よ落ちろー!」

ゴブリンは案の定前方に魔障壁を展開した。

だがレノが放った魔法はゴブリンの頭上に落ちる様に放った落雷だ。

落雷がゴブリンを穿つ。

雷が放電する音、皮膚が焼ける音と異臭が漂う。

すかさずレノは脚に魔力を込め、呼吸と共に地面を踏み抜く。

レノは脚に込めた魔力を地面に流すことで魔力を衝撃波に換え、衝撃波がゴブリンを

足元から襲う。

衝撃に投げ飛ばされるゴブリンの群れに、レノは掌を頭上にかざす。

「火球よ焼き尽くせ!」

炎を圧縮して作り出した火球がレノの掌に浮かぶ。

レノはそれを宙に浮かんだゴブリンに大きく振りかぶって投げた。

火球が一匹のゴブリンに衝突。その瞬間、球状に封じ込められていた熱が一気に解放

され爆発を生み出す。

爆炎に飲み込まれたゴブリンの死体が地面に降り注ぐ。

雌を護ったゴブリンも、子供を護る雌ももう居ない。

残されたゴブリンの子供達は、壁際で身体を震え上がらせた。

責めて産まれたばかりの兄弟は護りたい。そんな強い意志からゴブリンの子供達は赤子達に覆い被さる。

握った拳を振るのも躊躇われる光景にレノは一瞬眉を顰める。

ここでゴブリンを見逃せば、成長したゴブリンは次の驚異になり得る。

故にレノは拳を叩き込み、一匹残らず討伐する。

ゴブリンの返り血で赤く染まる拳にレノは一息吐く。

「ふう、これで全部か？」

レノは辺りを見渡す。

そこには既に生きているゴブリンは居なかった。

洞窟の入り口から最奥まで幾つか分かれ道が有ったことをレノは思い出す。

「そんじゃあ、戻りながら他に居ないか確認だな」

レノの提案にユキナは頷く。

「……ん、帰りは任せて」

通路に引き返すユキナにレノは気付いた。いや気付いてしまった。

黒狼の討伐とゴブリンの討伐。俊足の如く動きまわり、見惚れてしまう剣技を繰り出したユキナの魔力が一切減っていないことに。

レノは疑問から彼女の背中を注意深く観察した。それは巣穴からシユルク村に戻るまでの間ずっと。

レノの決断

夕方、ゴブリン討伐を完了したことを依頼主である村長ハシマに告げた二人は村人達の手厚い歓迎を受けのだった。

村人達のご好意で用意された食事にあり付き、歓迎も終わった頃。

二人は明日に備え宿屋で休むことに。

充てがわれた宿部屋でレノは、ユキナの背中を思い浮かべた。

ゴブリンの巣穴から村に帰るまで観察した結果、ユキナの魔力量は出会った当初から一切変動していなかった。

その事にレノは顔を顰める。

今日だけで戦闘を何度も繰り広げ、その度にユキナは俊足かつ的確な剣技で魔物を葬った。

通常、人類は戦闘の際に魔力を利用する。接近して剣を振るうより一発の魔法で魔物を多く討伐できるからだ。

ただ、魔法ばかりでは継続戦闘能力を欠くため、誰かしら近接戦闘も戦闘技術の一環として取り入れている。

消費した魔力は食事と睡眠を取ることで回復する。

それがレノの教わった戦闘と魔力における常識だった。

だから少なからず魔力を利用した戦闘では魔力は減る。

しかし、ユキナは如何だ？ 彼女は一切魔力が減っていないではないか。

そこからレノは一つ結論を導き出す。

「魔力が扱えないのか」

如何するべきかは明白だった。

レノの頭に浮かぶのはユキナだ。彼女の容姿、戦闘能力、そして魔力が扱えない弱さにレノの胸が高鳴る。

腰まで届く長い白髪。赤い瞳から向けられる涼やかな眼差し。小柄で華奢な体格は

一見可憐な少女という印象を受けるだろう。

しかし、一度剣を抜けば印象はがらりと変わる。

俊足から繰り出される剣技に、無表情ながら凛々しさを感じさせる。

ギャップの違いと眼が離せない可愛らしい顔立ち。

そう、自分は彼女に惚れてしまったのだ。

「やっぱ黒狼の時……いや、はじめて顔を見た時から一目惚れしたんだよなあ」

「それに誰にだって話せない事は有るよな。ましてや欠陥を抱えてますって言える訳が

ねえ」

世間の眼は欠陥品に対して薄情だ。

人類は魔力を神秘的な力、精神の源と定義している。

そのため欠陥品は魔力を扱えない脆弱な人間として差別されてしまいが世の常だ。

だからユキナは話したくとも話せなかったのだとレノは思う。

「……一目惚れ抜きにしても即戦力を手放すのは惜しい。それに楽しんで稼げるのはできない！」

早速彼女に伝えなければならぬと、居ても立っても居られないレノはユキナの宿部屋に向かった。

▽▽▽

早速備え付けのシャワーを利用したユキナはベッドに寝転んだ。

ぼんやりと天井を眺める。

後は寝るだけのひと時。

まだ就寝には早い時間帯、それでもユキナは寝ようかと瞳を瞑ると。

「ちよつと良いか？」

ノック音とレノの声に起き上がる。

何か用が有るのかと考えたユキナは、

「入って良いよ」

部屋のドアが開き、レノが部屋に踏み込む。

「もう寝るところだったか？」

「ん。でも話しが有るんでしょ」

ユキナは覚悟していた。レノが解雇通告を告げることを。

ゴブリンの巣穴からずっと観察する眼差しに彼女は気付いていた。

そもそも魔力の使用量を隠し通すことなど元々不可能な話だった。

だから彼は気付いた。自分が魔力が使えない欠陥品だと。

町に戻ったらまた振り出しに戻る。

そしてまた誰かと組む。その繰り返しなのだ。ユキナは覚悟を決めていた。

「まあ、な。流石に話しておかなきゃなんないと思ってな」

「……うん」

「一党結成はこのまま継続して事でよろしく」

予想しなかった言葉に、ユキナは驚く。

「何も、聞かないの？」

「誰にだって話したくない事は有るだろ。だから何も聞かないことにしたんだよ。それにアンタは充分に強いってことが分かったからさ」

彼はそれだけで充分だと言って、

「そんなじゃあ明日もよろしくな」

笑顔を浮かべて部屋を出ようと振り返った。

そんな彼にユキナは、

「……ありがとう」

小さく礼を告げた。そこに感情は乗ってはいないが、レノは片手を振り歩き出す。見えなくなつた彼の背中に、ユキナはベッドに横たわる。

レノについては出会つて一日で何も分からない。

唯一分かるのは喜怒哀楽が激しく、よく叫ぶ人ということだけ。

けれど一党を継続すると彼は告げた。なら自分はもう失敗しない様にやつて行く。

そこまで考えたユキナは、

「みんなみたいに優しい人なのかな？」

ポツリと呟き、そのまま眠りに就いたのだった。

そして翌日。ギルドに帰還した二人は正式に一党を結成し、アスガルに十一組目の一党が誕生することに……。

二章 地下水路のスライム

あれから一ヶ月

ユキナとレノが正式に一党を結成してから早くも一ヶ月が経過していた。

彼らはアスガルを拠点に日々クエストに励むのだったが……。

二匹の猫が互いに威嚇し合い爪に魔法を宿す。そして喧嘩を始める路地をユキナが通り過ぎる。

目当ての場所まで一目散、他に一切目もくれず彼女は向かう。

そうしてアスガル商業区の店を何軒も通り過ぎた彼女は、漸く目的の場所で足を止めた。

ユキナは冒険者御用達の鍛冶工房を訪れる。

早速親方と弟子達に馴染みの客になった彼女に、

「今日はどんな要件だ？　いつも修理ばかり頼んでねえでちったあ防具か魔法道具でも買って行きやがれ」

親方は無駄だと理解しつつも冗談を飛ばす。

冗談だと理解しながらユキナは愛想の無い表情で要件を伝える。

「劍の修理をお願い」

鞘から抜いた劍に親方と弟子も一様に顔を顰める。

ユキナが常連となってから毎度の事だが、彼女の劍を三日ほど前に修理したばかりだと言うのに劍は刃毀れが酷くあと一振りで折れてしまいそうな程に消耗が激しかった。

一体どんな戦い方で、一度にどれだけの魔物を斬っているのか。

通常武器は使用者の魔力で刃を覆うことで肉や骨の両断時に刃の消耗を抑えるのだが、ユキナにはそれが出来ない。

基礎戦闘に当たたる魔力操作による武具の魔力強化。それができない以上、劍の消耗は激しいままだろう。

魔力を扱えない彼女にわざわざ告げるのは酷だ。それこそ彼女本人が痛いほど理解しているのだから。

劍の消耗と芯を観察した親方は、作業日程とそれらにかかる費用を告げる。

「コイツの修理には一週間必要だ。何せ芯まで損傷してやがる……そこで諸々の費用を合わせると銀貨四枚になるが？」

ユキナは考える素振りも見せず金袋から銀貨を取り出す。

いつも彼女は金額に対して値切ろうとはしない。愛想は悪いが金払いの良い客。それが親方と弟子が抱くユキナの印象だった。

だから彼女がクエスト先で倒れないように、ほんの少しばかり融通してやっても罰は当たらないだろう。

密かに親方はそんな事を計画し、丁度いい素材が有ったと凶悪な笑みを浮かべるのだった。

▽▽▽

鍛冶工房に剣を預け、ギルドに到着したユキナは施設を一周見渡す。

アダムとイブの像が置かれた一階、酒場と併用されたフロアでクエストを終えた冒険者一党が互いの冒険譚を着に酒を呷る。

どこも楽しげに語らう中、一人だけぼつんと離れた席で干し肉を食う少年に歩き出す。

「……レノ」

「おっ、帰って来たか。剣の方は如何だった？」

「一週間掛かる」

親方に言われたことをそのまま告げると、レノは仕方ないと話しを切り出す。

「そうか。なら一週間は休暇にするか」

「……素手でも大丈夫だよ」

そう言ってユキナは、空に素早い拳を三撃同時に駆り出す。

剣が無ければ拳を使えば良い。

「……あー、俺の自信が砕かれそうだから休みな。それにここんところずっとクエスト漬けて俺も正直疲れてる」

「レノがそう言うなら」

「で、せっかくギルドに来たんだ。なんか食ってたら如何だ？」

「ん、お腹空いてないからいい」

宿屋に帰つても特にやる事が無いため、ユキナはレノの向かいに座った。

「……他に誰か誘わないの？」

何となく。本当に何も考えずに質問するとレノが呆れ気味にため息を吐く。

何故そんなため息を吐くのか訳が分からず、ユキナは首を傾げる。

「ユキナは、他にも仲間が必要だと思おうか？」

「ん。一つの一党は最大四人まで。多い方が楽しい」

「もしもの話だ。もしも一党の男が俺だけ、他が女だけだったら？」

「？ 一党のリーダーはレノ。方針と運用は好きにやればいい」

真顔で返された返事にレノは、テーブルに沈んだ。

「そこはもつとさあ！ 私だけを見て、とかなんか無いのかよ」

この人は一体何を言ってるんだろう？

ユキナはレノの言いたい事が何一つ理解できなかった。

なにを言いたいのかも、どう返すのが正解なのかも分からない。

ユキナが悩むとレノは気を取り直したのか顔を上げ、何処か恥ずかしげに視線を彷徨わせると。

「なあユキナって……好きなの異性とか居るのか？」

唐突に聴かれた質問に周囲が騒つく。

「野郎踏み込みやがった！」

「俺達も気にはなってたが、踏み込めなかった領域を!？」

「ユキナちゃんの好みのタイプ……気になるわね」

騒つく周囲にユキナは小首を傾げながら、

「居ないよ」

淡々と告げる。

異性にも同性にも意中の人は居ない。元よりユキナは、自分の恋愛そのものに興味は愚か関心が無い。

ましてやそんな資格など無い。

その意味を含めて居ないと答えたが、何故かレノは嬉しそうだった。

「そうかあそうかあ！」

そんな彼を他所にユキナの耳にとある話題が入る。

「聞いたか？ 先月の話になるが、あの【竜の顎】がマザーウィルつつう化け物の肉片を回収したって話し」

「ああ、聞いた。奴に挑んで生きて帰って来た者は居ない。文献の記録に名が遺された魔物を……よくもまあ無事に果たさせたよな」

「何でも今回はたった三人だけで達成したとか」

「三人？ あの一派は四人のフルメンバーって聞いていたが」

「詳しいことは知らねが……そういえば、最後の一人は欠陥持ちだって新聞に書かれたか」

「あの新聞会社は特定の一派に所属するメンバーを悪辣に書き下ろすからなあ」

ユキナがかつて所属していた【竜の顎】の噂に彼女は、勢い良く席を立ち上がる。

そして、

「その話、詳しく」

「おっ？ 無関心そうだが流石に冒険者として気になるか？」

笑う男性冒険者にユキナは、こくこくと頷いた。

レノはそんな彼女に意外な一面を見たとき驚きつつも、密かに【竜の顎】以上の冒険者に成り上がることを誓う。

蛇口からこんちわ

それは一週間後の朝のことだった。

洗面所の蛇口を捻るとゼリー状の生物が出たのは。

「水……？　水は？」

水道の蛇口からスライムが出て来た。目の前の奇妙な光景にユキナは困惑を隠せず三度瞬きを繰り返す。

するとスライムはゼリー状の身体を震わせ、洗面所から飛び上がる。

スライムの粘液は服の繊維を溶かし、捕食対象を二週間かけて消化すると言われているが、ユキナは拳を引き。

「せー！」

スライムの核に上り込むように拳を鋭く放つ！

寝巻きの裾が粘液によって溶けるが、変わりに彼女が放った拳がスライムの核を砕く。

核で形を形成していたスライムの身体がその場で蒸発する。

「……びっくり」

スライムを討伐した後、ユキナはほっと息を撫で下ろす。

しかし蛇口を捻るとスライムが出る。

もしかしたら次は出ないかもしれない。そう考えたユキナは、もう一度蛇口を捻る。

「……水」

蛇口から流れ出る水にユキナは安堵の息を吐く。

これで洗顔と歯磨きができる。

▽▽▽

今日は剣の修理が終わる日だ。

いつも通りの足取りで鍛冶工房を訪れたユキナに、

「来たか。お前さんの剣は無事修理が完了してる……ま、勝手ながらちつと改良させて

貰ったがな」

親方が懐深い笑みを浮かべた。

頼んだ覚えが無い。だからユキナは疑問から首を傾げ、

「改良？」

親方に聞き返した。

「おうさ。重量を変えず、強度の底上げに血を吸う特殊な貴金属を芯と剣身に打ち込んでいるが……見た方が速い」

手渡された剣を受け取ったユキナは、鞘から剣を引き抜く。

すると鋼製の剣身は紅い刃に変わり、その場で軽く二、三度振るう。

風を斬る音が以前よりも数段鋭い。

親方が言った通り重量の変化は無いが、以前よりも格段に斬れ味が上がっているのだと理解する。

「親方、ありがとう」

剣の改良にユキナのアホ毛が嬉しそうに揺れ動く。

喜んでいゝユキナに親方は豪快に笑う。

「ああ、さつき軽く言ったがソイツは刃に付着した鉄分……つまり血を吸込む性質を持つておるが、限界量を超えた血は刃から滲み出るぞ」

少し、いやかなり物騒で見方によつては怖い。

僅かな恐怖にユキナの手が震えた。

それでもこれから扱う武器には変わりが無い。何より親方の親切心を無碍にする気もない。

剣を鞘に収めたユキナは、ふと今朝の事が脳裏に過ぎる。

「……蛇口からスライムが出た」

「スライムだあ？ ……そういや、弟子四号がそんな事を言つてやがったな」

「ああ、蛇口からスライムが出たって話しですよね？ 港区の民家や宿屋を中心にそんな被害が出てるって話しでしたか」

「ん。奇妙」

「確かに蛇口からスライムなんざ奇妙この上ねえが、地下水路に棲み着いたか？」

アスガルの生活水は川水と海水から吸い上げ地下水路のパイプを通し、管理室の浄化魔法を経由して生活水として利用されて来た。

浄化魔法で弾かれた塩と毒素は別々にされ、塩は町の市場へ、毒素は病院や薬学研究室に運ばれている。

「親方、冗談はよしてくださいよ。地下水路には浄化魔法が完備されてるんですぜ？

デスコロット風邪のような被害を防ぐためにさ」

「おう。だが、スライムは水道のパイプを通ったんだろ？」

いくら魔法が使えないユキナでも理解できる。

スライムに浄化魔法が効かないか、何らかの理由で浄化魔法が作動していないと。

「ん。ギルドに行ってみる」

ユキナは言うや否や早速行動に移し、外を駆け出していた。

立ち去った彼女に親方たちは、忙しそうな少女だと息を吐く。

命名！ 蛇口スライム事件

丁度ユキナが冒険者ギルドに到着すると、既に依頼書を持ったレノが受付窓口に並んでいた。

ユキナは真つ先に駆け寄り、

「クエストはなに？」

「来て早々やる気だな。ま、緊急つてことで地下水路のスライム討伐だ。つつてもスライム討伐なんて新米のやることつて言われて押し付けられたんだけどな」

ユキナにとつて報酬に興味も意味もない。

そこに困っている人が依頼を出した。それだけの理由で充分だからだ。

思い出深い町ならなおさら。

密かに強い決意を固めるユキナに、レノが関心を寄せると。

「次の方〜！」

受付嬢の声にレノは依頼書を差し出す。

薄い水色の髪に美しい顔立ちの受付嬢——ルイが愛想笑いを浮かべ、

「突如起きた蛇口スライム事件の解決に向かわれるのは、ユキナちゃんと新米くんです

か」

そんな事を口にした。

「何だ? そのネーミング」

「起きた事をまんまに見ましたが……ああ、口にするとダサイですね」

「何でもいいけど、クエストはスライムの殲滅で良いんだな?」

ルイは頷き、

「理解してるとは思いますが、施設の損害は賠償金が伴うのでくれぐれも魔法の加減は気を付けてくださいね」

「分かってるよ。それにしてもスライムか……っ」

レノはユキナに視線を向け、一瞬頬を赤らめ息を呑んだ。

そんな彼にユキナは不思議そうに小首を傾げると、

「新米くん。スライムの粘液で服が溶かされたユキナちゃんを想像しましたね?」

ルイの言葉にユキナが視線を向けると、何故か彼女は鼻血を出していた。

それに釣られるようにレノも。

「……のぼせたの?」

「私のはぼせちゃいましたが、新米くんはえつちな事を想像したんですよ。ですから距離を取るのが正しい付き合いかたかと」

ルイの助言にユキナは即座にレノから距離を離す。

兄のアスベルとリティアにも教えられた事だ。不埒な妄想をする輩とは距離を離れた方が適切だと。

「ちよつと待つてくれええ!! 誤解だ! 俺だつてのぼせただけだつて」

レノは眼を泳がせながらそんな事を語る。

「おい、新米。受注手続きが終わったならさっさと退けるよ」

野次を飛ばす冒険者一党のリーダーに、レノはすぐごと前を譲る。

そして業務に勤しむルイに恨めがましい眼差しをぶつけ、

「さっさと片付けて報酬貰おうぜ」

「ん?」

何処か浮き足立つ足取り、何かを期待するような眼と緩んだ顔にユキナは小首を傾げた。

彼が何を考えようとも興味は無い。ユキナは急ぐレノの後を追いかけた。

▽▽▽

早速二人は地下水路に入り、地下水路管理室に足を運ぶ。

クエストを始める前に依頼主から直接話しを聴かなければならない。特に公共施設を管理する彼らに何の断りも無く施設に入り込むのは、幾ら冒険者といつても信用を損

なう行為だからだ。

しかし管理室には男性が一人。他の職員の様子は見当たらない。

ユキナは管理室の壁に施された魔法陣に眼を向け、一人の男性に近寄る。

「……クエストを請けた冒険者」

彼女の静かな声に男性は振り向く。

背丈の広い筋肉質な男性——バルヌはユキナに驚きつつもレノに顔を向けた。

「お前さんは何処かで? いや、社交界でなら忘れるはず無いんだけどなあ」

「えつと……アンタが依頼主か?」

「と、悪いな。見覚えの有る顔だったもんでな。俺はアスガル地下水路管理局所長のバ

ルヌ・ノーマンだ」

「バルヌか。俺はレノ、そこでこっちが仲間のユキナだ」

互いに自己紹介を終えた二人にユキナはじつとバルヌの顔を見つめていた。

ユキナもバルヌに見覚えが有ったが、それが何処でだったか記憶が定かではなかった。

見覚えはあるが思い出せないもどかしさに小首を傾げると。

「それじゃあ、君らにやって欲しいのは地下水路に居るスライムの残滅だ。幸い人に被害が出ちゃあいないが、いつスライムが夜間に蛇口から這い出て寝込みを襲うかもしれ

ん」

「つまり今日中に地下水路のスライム殲滅……それで規模はは？」

「分かん。何せ今朝俺たちが出勤した頃には地下水路にスライムが溢れていたからな。全くそんな前兆も侵入口も塞がれてんのに」

なら一体どうやってスライムが地下水路に入り込んだのか。

町の地下に在る広大な範囲。何処かに見落としが有るのか、それとも誰かがスライムを放ったのではないかとレノは考えた。

「それにしても浄化魔法の方は大丈夫なのか？」

町の生活水の要となる魔法が機能しているのか？ そう暗に尋ねるレノに彼はわざとらしく肩を竦める。

「単的に言えば浄化魔法に一切の問題もない。スライムは魔物だが生物だ。事故防止のために生物に浄化魔法は作用しないようになってる」

「……なら魔法に手を加えれば良いんじゃないのか？」

「生憎と浄化魔法も国家機密魔法だ。一介の施設管理者にそんな権限は無い、第一浄化魔法には何重にも防壁が張られて術式に手を加えることもできねえ」

二人はバルヌの説明に納得すると彼は壁のレバーを下げた。
すると施設の外から激しく水が流れる音が響く。

「今の音」

「討伐するなら下水道は邪魔だろ。あとは二人に任せる」

「ん。じゃあクエスト開始」

「……随分と淡々としてるが、大丈夫なのか?」

「これでも凄いいんだぜ? 魔物なんて一瞬でばらばらだ」

「そいつはまた……。何にせよ殲滅が完了したらここに戻って来てくれよ? 水路に水を戻すから」

言われて二人は頷き、クエストを開始するのだった。

スライムの粘液にまみれて

ひんやりとした風が吹く湿気に覆われた地下水路を二人は駆け回っていた。

スライム討伐のために下水は全て抜かれたのだが、

「多過ぎるだろっ!？」

「スライムだらけ」

地下水路の水路は大量のスライムに覆い尽くされ、一面スライムだらけとなっていた。
た。

飛び掛かるスライムをユキナが核ごと斬り払い、レノが水路のスライム溜まりに雷撃魔法を撃ち込む。

流体のスライムに迸る電流が連鎖を起こし、スライムが蒸発していく。

少なくとも地下水路に入ってからこの繰り返しだった。

スライムの殲滅で報酬金が銀貨十枚と銅貨五枚。

正直割に合わないクエストだ。

胸の中に沸々と不満が湧き上がる。

それでも溢れ出る不満を吐き出さないよう冗談に変えた。

「絶対報酬金を釣り上げてやるっ！」

「報酬は報酬だよ」

彼女が落ち着き払った声で返す。

ユキナは感情の起伏が非常に薄い。喜怒哀楽はアホ毛の動きで彼女が抱いている感情はある程度理解できるが、いまアホ毛は静を貫いている。

主に戦闘時のアホ毛の動き。つまり何事にも無関心という意味を持つ。

戦闘の時は大抵無関心だ。最初の頃は魔法の射線状に入るのでは無いか？ 冷や冷

やしたものだ、ユキナは決してレノの魔法射線状に入らない。

彼女は見極めているのだ。あれだけ高速で動きながら己と仲間の立ち位置を。

一ヶ月の間ユキナを観察して得た知識を頼りに、

「なら釣り上げは無理でも、良い冒険譚は持ち帰らないとなー」

「任せて」

何事にも無関心だが、意外とユキナは人の話しを聴くのが好きなようだ。

人の話しを静聴しアホ毛が感情を表す。そんな彼女にレノは確実に心惹かれていた。

長い白い髪が風の抵抗に浮かぶ背後姿が視界に映る。

レノは走りながら地下水路に張り巡らされたパイプに細心の注意を払い放ち、先行するユキナを追う。

魔法で爆ぜるスライムと斬り刻まれるスライムの残骸が地下水路に離散する。

「相変わらず剣捌きは凄えな」

「レノのひゅー、ドカーンもすごい」

ユキナは手振りりと身振りりで先程使用した爆破を表現した。

彼女の手振りりと身振りりは仕草も相まって愛らしい。

そんな感情を抱きつつ、レノとユキナは地下水路を隈なく進んで行く。

区画ごとにスライムを討伐して行く二人だが、最後の中央区に到着したが……。

「此処もまた多いなっ！」

中央区もまた大量のスライムに埋め尽くされていた。

そこに風が吹抜ける。

レノはすぐに風の正体を理解する。

ユキナがまた高速で移動した音だ。

さして刃が風を斬り裂く音が地下水路に響く。

レノはユキナの動きから眼を離さず、スライムに魔法を撃つ。

「弾けるー！」

爆破魔法がスライムを吹き飛ばし、スライムの群れに穴を作る。

そこにユキナが降り立ち、螺旋を描くように剣を水平に振り抜く。

遠心力と刃から生み出された剣圧がスライムを刻む。

ユキナを中心にスライムの残骸が離散する。

しかしまだスライムの数が多く、まばらに散らばっているのは体力が持たない。

そう判断したレノが指示を飛ばす。

「ユキナ！ 狭い通路に逃げ込むぞ！」

「ん！」

駆け出すレノにユキナが付いて走る。

そこにスライムの群れが追いかけて、レノとユキナは滑り込むように狭い通路に逃げ込んだ。

人が一人入れる通路をスライムの群れが入り込む。

しかし一度に群れの全てが入り切らず、通路とスライムに挟まれ身動きが取れなくなる個体も現れ始めたところで。

レノは掌に業火を宿す。

「とっておきだ！」

魔力を限界近く捻り出し、灼熱の熱線を繰り出す。

一直線に集まったスライムはレノの繰り出した熱線に呑み込まれ、液体を纏めて蒸発させるに至る。

大量の魔力を一度に使い切ったレノは肩で息を荒げ、

「ど、どうだ!」

「……レノ」

声に振り向くとじっと見つめるユキナに、レノは照れ臭いものを感じながら指先で鼻を撫でる。

レノはふと気がつく。ユキナの視線が上に向けられていることに。そしてアホ毛がぴんつと立っていた。

「……上」

「上って……なあああっ?!」

見上げるとそこには討ち漏らしたスライムがレノの頭上に迫っていた。

反応が遅れたレノは避けることも叶わず、頭上からスライムの粘液を被ってしまった。

その結果、スライムの粘液がレノの衣服を全て溶かし、少女の目前で男のあられもな姿が曝されてしまう。

「うわあああっ?! 見ないでくれえええ!!」

咄嗟に大事な部分を隠しながらレノはその場に蹲った。

レノの側でぶるん、と跳ねるスライムをユキナの剣が貫く。

「これで全部?」

「えっ? 俺よりもクエスト優先なの?」

「クエスト片付けないと地上に帰れない。……風邪引くよ」

「そりゃあ分かかってる! けど流石に全裸で動き回るのは色々ときつい! 主に俺の精神と羞恥心がっ!!」

確かに自分はユキナがこうなる事を若干望んでいたが、いざ自分が酷い目に遭って理解する。

スライムの粘液責めには、男も女も無いのだと。

「……立てる?」

「いや、立つとモロ見えになる」

「そう。じつとしてて」

そう言ったユキナの行動はあまりにも早かった。

故にレノが彼女に抱っこされるのも拒むことは無理だった。

あんまりな状況に放心するレノを他所にユキナは、地下水路を駆け出す。

(……ふっ。今日はやけに肌に風を強く感じるぜ。……誰かこの状況を止めてくれえええ!!)

レノは魂から叫ぶことも出来ず、羞恥心に自らの顔を覆い隠した。

羞恥心に悶絶するレノに関係なく彼女は進む。

念には念を、地下水路を二周回りスライムの全滅を確認したユキナは出口を目指し走る。

徐々に出口が近付く中、ユキナが不意に足を止め……。

「……どうして？」

強い戸惑いを浮かべたユキナの声が冷たい地下水路に響く。

「どうしてって。そりゃあ恥ずかしくもなければ顔を隠すさー」

「違う」

何が違うのか訳が分からないレノは、両手を退けて彼女が見つめる視線の先に眼を向けた。

そこには血の文字で、

『エデンに栄光を』

と壁に刻まれていた。

レノは訳の分からない単語に訝しむ。少なくともこんな文字は訪れた時点で無かった、なら誰が刻んだのか。

不意にレノのふくらはぎを持ち上げる彼女の指先が震える。

ふとユキナの顔を見上げると彼女は珍しく、酷く狼狽えていた。

「ど、どうした？」

「……何でも、ない」

壁の文字から顔を背けるようにユキナは走り出す。

それはまるで何かから逃げようような様子だった。

そして帰り際に二人はバルヌの下を立寄り、レノは彼に憐憫な眼差しを向けられることに。

ギルドの業務

アスガルを夜空が照らし、波打つ海面に月と「楽園」が映り込む。

スライム討伐を終え、着替えたレノとギルドに帰ったユキナは早速受付に足を運ぶ。

「おかえりなさいユキナちゃん、新米くん」

二人をルイは笑顔で出迎え、ユキナの機敏な変化に眼を細めた。

心ここに在らず。何かに怯えるような瞳。

ユキナからそう感じ取ったルイは笑みを崩さず、結論を伝えるよりも速く受付窓口の奥から影が現れた。

ゴリラのような大柄で強面の男性に、ユキナが駆け寄る。

「支部長」

「久しぶりだな」

丸太のように太く鍛えられた腕がユキナの頭に伸ばされ、武骨で大きな手が彼女の頭を撫でる。

気持ち良さそうに眼を細めるユキナ。

それがレノには意外に見え、同時に支部長に嫉妬の念が浮かぶ。

溢れ出る嫉妬に燃え上がるレノを尻目に、ルイは支部長に微笑む。

「ゴリラ支部長、居たんですか」

上司に対してわざと見た目通りの名を呼ぶ。

「ゴリラ言うな。ゴリス支部長だ」

「一字違いじゃないですか。それよりもお話しが有るのでしょう?」

ルイは業務用の笑顔を貼り付け要件に移った。

有能かつギルド最高戦力のルイにゴリスは注意しても無駄と諦め、ユキナの頭から手を離す。

「新米冒険者とユキナに今回の一件について詳細報告を求める」

そう言ってゴリスは二人に支部長室まで同行を求めた。

簡素で花の一つも飾られない寂しい支部長室。

部屋を中心に置かれたソファにルイとゴリスが座り、向かいにユキナとレノが座る。

普通ならただのスライム討伐の報告で冒険者を支部長に呼ぶ事は無い。

ここに呼ばれるのは、神聖国イーリスから功績を讃えられる場合。

ギルドの規約を逸脱した冒険者に処遇を通達する場合。

そして冒険者が受理したクエストに事件性が発覚した場合だ。

そもそも何の前兆も無くスライムが地下水路に大量発生するなど有り得ない。

地下水路管理局という水質に対し些細な変化も見逃さない彼らが前兆に気付かない訳がない。

だからこれは悪態目的の愉快犯。冒険者なら新米程度で簡単に対処可能な魔物を用いた犯行だとルイは推測した。

ルイがこの場に同席してたのは、答え合わせと提出する報告書のため。

そしてルイは酷く緊張した様子のレノに眼を向ける。

「俺が聴きたいのはスライム討伐の最中、何か痕跡らしき物を見なかったかどうかだ」
暖かくも落ち着き払ったゴリスの問い掛けに、レノはゆっくりと息を吸い込む。

やがて頭の中で状況を整理したのか、

「スライム大量発生の原因となる痕跡は何も見なかった」

簡素に答えた。

しかしルイはユキナの手が僅かに震えているのを見逃さなかった。
付き合いが長いゴリスも彼女の些細な変化に、

「ユキナは何を見た？」

静かに問い掛ける。

ユキナはゴリスとルイの眼を、涼やかな眼差しでしっかりと見つめながら答えた。

「壁に血文字」

そういえば、と思い出したようにレノがそこに書かれていた文字を口にす。

『『エデンに栄光を』なんて訳の分からねえ文字だったな』

何気なく口にされた文字。

しかしその言葉は、何も知らない者からすれば意味の無い文字で連想するのは空に浮かぶ砕けた天体とお伽噺だろう。

かつて神々の住いと言われた【楽園】は遙か昔に砕け、地表に降り注いだ。そして世界は滅亡したというお伽噺話し。

逆に意味を知る者にとっては忌まわしき過去であり、神聖国イーリスにとっても決して無視できない文字だ。

「……そうか。報告、苦勞」

ゴリスは二人にそれだけ伝えたと立ち上がった。

もうこれで今回の件は終わりだ。そう意思表示を行動で示した彼に、レノが立ち上がる。

「待つてよ。スライム討伐と壁の血文字に何の因果関係が有るって言うんだ？」

「……結論から言えば因果関係も事件性も無い」

ゴリスは最大限配慮した上でレノに自らの判断を伝えた。

国営によって運用されている冒険者ギルドの支部を預かる長に対し、新米のレノには

何も言う事ができない。

「なんか釈然としないが、行こうぜユキナ」

「ん」

要件も済んだとしてユキナとレノが離席し、支部長室から退散した。

後で報酬を渡さなければならぬ。残った業務に息を吐き思考を切り替える。

スライム大量発生と壁の血文字。そして時を遡り一ヶ月前から何者かが暗躍している痕跡がクエスト報告に寄せられていた。

ゴリスは彼に事件性は無いと伝えたが、それは紛れもない嘘だ。

その最たる例がゴブリンの魔障壁の使用だろう。

魔障壁を発動させるには魔法陣の構築式と術式を理解しなければならない。

町の防壁として使用される魔障壁の術式事態が国家機密だ。

そして地下水路に使用されている浄化魔法に対するスライム。

恐らく犯人は浄化魔法が生物に作用するのか調べるためにスライムを利用したのだろう。

それに蛇口からスライムが出た時点で犯人の目的は達成された。

浄化魔法は生物に反応しない。あとはポイズンスライムを流し込みでもすれば要人暗殺も可能となるだろう。

暗殺の可能性を考慮しながらルイは犯人について考えた。

「魔障壁を知っているながら浄化魔法に付いては知らない犯人ですか。それとも背後に調べたい者が居る？」

「……浄化魔法に関しちや、水質管理省にでも所属しなきや分かんねえだろう」

「エデンは国の中核に入り込んでいると言う事ですかね」

「そうだろうな。連中が壊滅して十年になるが、特級犯罪組織の相手は騎士に限る」

「……そうですね。早速騎士団の派遣要請をアスガル伯爵と協議しましょう」

二人は冒険者ギルドの職員として手を打つべく動き出すのだった。

それからアスガル領内に騎士が動く事になり、しばし冒険者は愚か住民に戸惑いと懸念を与えることに……。

三章 溢れる幽霊と過去の因縁

悪夢

鎖に繋がれた少女は必死に呼び掛ける少年に応じず、何も無い天井を見つめていた。何も考えられない、興味が湧かない。少年がかける言葉に感情も湧かない。

「頼むからお兄ちゃんを見てくれ！」

必死に呼び掛ける少年の声が薄暗い地下牢に響く。

少年は何とか少女を助け出そうと鉄格子を何度も揺らし、魔法を放つ。

しかし少年の努力を嘲笑うように無傷の鉄格子が少年と少女の牢を隔てる。

そして、数人の足音が響く。

三人の大人が少女の牢に足を止め、

「欠陥品は感情を失い、心が砕けたか。その点兄の方は優秀と言うべきか？」

「制御出来ない点では失敗作に変わりはない」

「……妹の方は幾分かマシというだけか。何にせよ、これから始める訓練次第か」

大人は周囲の牢に眼を向け嘲笑う。

兄妹と同じ様に牢に幽閉された子供たち。

しかし、彼らはもう生きては居なかった。

また魔物の餌が増えた。そう笑う大人に少女は眼を向けず、虚な眼差しで天井を見上げるばかり。

「さあ時間だ」

そう言つて牢は開かれ、少女は大人たちに連れて行かれた。

地下牢に残されたのは少女の名を叫ぶ兄と物言わぬ死体だけ。

暗がりには噁り泣く声が寂しげに響くばかり。

それから少女が兄の前に再び姿を見せたのは、二年後のことだった。

▽▽▽

蛇口スライム事件から一週間。

夢見が悪く目覚めたユキナは、額の汗を拭う。

そして彼女は自らの身体に視線を向ける。

汗に濡れたぶかぶかのシャツと下着が肌に吸い付き、開けていた窓の風に身体が冷える。

「……びしょびしょ」

忘れたい過去の夢を見た。

だから酷い寝汗を掻いた。

冷える身体にユキナはベッドから起き上がる。

「……シャワー」

気分転換も兼ねてまだ寝ぼけ気味の頭を起こすためにも、彼女は備え付けのシャワー室に向かった。

熱々のシャワーを浴びながら長い白髪を掻き分ける。

乳白色の肌に泡が伝い排水口に流れる。

徐々に鮮明になる思考。しかし残念ながらユキナの頭は活性化しようとも思考に変わりは無い。

嫌な過去は忘れるに限る。それがリティア達から教わった上手いやり方だ。

本当にそれでいいの？ 嫌な過去から逃げてばかりでいいのか。迷いを訴える小さな自分の姿が目前に浮かぶ。

「……逃げちゃダメ？」

随分と弱気な問いに小さな自分は頭を左右に振る。

それじゃあ兄達に捨てられたままだ。小さな自分の眼が訴える言葉にユキナは小さく息を吐く。

過去の悪夢は恐いがユキナにとって過去は、贖罪しなければならぬ罪だ。

ユキナは手を伸ばす。すると小さなユキナは笑みを浮かべながら消えた。

「……弱気じゃダメだよね」

もしも彼らがまた現れるなら戦う他にない。

ユキナは小さな決意を固めシャワーのノズルを回す。

それからシャワーを浴び終え、冒険者用の衣類に着替え髪を乾かしたユキナは、部屋を前に呆然と立ち尽くした。

部屋の中をふんわりと浮かぶ半透明な少年少女。

部屋に幽霊、窓に視線を向ければ外にも幽霊。何処を見渡せども幽霊。

夢の悪夢の次は現実の悪夢のような光景。

一体の幽霊がユキナの腹から半透明の頭を出す。

先ほど過去から逃げないと改めて決意したが、彼女にとつてこれは別問題だった。見たくもない光景にユキナの顔は青く染まり、アホ毛がぺたんと倒れる。

「……いやっー」

小さな悲鳴をあげたユキナは剣を手に取り、窓から飛び出した。

そして着地した彼女はそのままギルドに走る。

溢れる幽霊

住民は騒然としギルドは困惑に包まれていた。

幽霊が町中に溢れ返り、何処を見渡せども幽霊ばかり。

「……クエストはゴーストバスターってか？」

レノは目前に浮かぶ幽霊に魔力を込めた拳を振り抜く。

魔力が霊体の実体を捉え、拳が霊体を貫く。

甲高い悲鳴と共に消滅する幽霊に、レノはギルドを見渡す。

そこにユキナの姿は無かった。

「ユキナ、まだギルドに来て無いのか？」

不在の彼女に疑問を口にする和不意に肩を叩かれる。

「何だ、受付嬢かよ」

ユキナの悪戯。無いと思いつつ淡い期待感から振り返ると、そこには悪戯が成功したと笑うルイの姿が有った。

「ユキナちゃんじゃなくて残念？　ですけど……ユキナちゃんは既にギルドに来てます

よ」

既に来ているユキナ。

しかしギルドを何度も見渡そうと彼女の姿は無い。

ふと、ギルド内に置かれた木箱に眼が止まる。

それは壁際に置かれた人が一人入れる木箱。

レノは記憶を探る。

「普段、あんな場所に木箱なんか有ったか？」

「木箱は主に備品庫と食糧庫に置かれてますね」

笑みを崩さないルイに、レノは再度木箱を見つめる。

何処を見渡そうとも姿が見えないユキナ。しかし既にギルドには来ている。

そして普段置かれぬ場所に木箱。

レノはルイと木箱を何度も交互に視線を向け、

「……まさか？」

「かわいいですよ」

それは最早答えだった。

そしてレノの行動も極めて迅速で、木箱の蓋を開ける。

するとそこには膝を抱え、全身を震わせるユキナが居た。

完全に怯えている。それは誰の眼からも明らかだった。何よりアホ毛が倒れている

のが証拠だろう。

なぜこんな場所にとか色々聴きたいことが有ったが、レノは一先ず優先事項を尋ねた。

「恐いのか？ 幽霊」

問い掛けにユキナは静かに何度も頷く。

その仕草は怯える小動物のように見えて大変可愛らしいものだった。

「ダメなんだな、幽霊」

「斬れない。倒せない」

レノは頭を抑えた。

確かに霊体に有効な手段は魔力による精神攻撃だ。

魔力が使えないユキナは、現状霊体に対する有効な手段が無い。

それとも魔力を帯びた魔剣をユキナに与えるか。

レノは魔剣調達にかかる多額の費用を頭に浮かべ、すぐさまその案を却下した。

そもそも魔剣といっても種類が有る。

所持者の魔力を増幅させる物。剣身そのものに魔法が付与され、魔剣のそのものが魔力を保有している物。

中には周囲の魔力を奪う物まで有る。

いずれにせよユキナにとって当たり外れが有るのも大きい。

何よりもユキナの可愛らしい一面が減り、自分の立場も無くなる。

そう考えたレノがユキナに魔剣を与える選択肢を排除したのは必然とも言えた。

彼女が倒せない幽霊は自分が代わりに討伐してやればいい。

「悪いんだけど、ここはアンタに我慢して貰うぞ？ 俺にも日々の生活が掛かってるしよ」

「……が、がんばる」

怯えた声で眼を強く瞑り震える身体を抑えながら木箱から出た。

まだギルド内に幽霊は居り、ユキナは視界に幽霊を入れないよう努めた。

彼女の怯えた様子にルイが背後から声をかける。

「言い忘れてましたが今回の件は既に別の一党が請けましてね」

幽霊討伐は既に無いと語るルイにユキナの表情がほんの僅かに和らぐ。

ルイは受付嬢だ。彼女はどの一党がどのクエストを請負ったか把握していれば、ギルドに寄せられた依頼数も当然把握している。

そう、ユキナが木箱の中で怯えている間にルイは彼女が幽霊討伐を請けることが無いように手を回した。

レノは自身の推測に遠からずと言った手応えでルイに顔を向けた。

するとこちらを見てほくそ笑むルイに、

(や、やられたああ!! 職権乱用でユキナの好感度上げやがったああ!!)

レノは心の中で叫び、してやられたと悔しげに顔を歪めた。

「けどよ、こんだけ溢れてんなら頭数は必要なじゃねえの?」

「そこも」安心よ。アスガルの町に滞在中の全冒険者一党……11組み中5組みが既に協同で討伐に当たってます」

自分たちも参加したい。そう頼み込むつもりがルイはそれすら見越した上で進路を断つ。

これ以上はレノの私情を挟んだ単なる我儘でしかない。何せ町の幽霊討伐に討伐手段を持たないユキナを連れて行くと言ってるようなものだ。

それはルイに限らず、危険性を考えれば誰だつて難色を示すだろう。

特にユキナが魔力を使えないのはアスガルの冒険者には周知の事実だ。

誰しもがユキナの参加を足手纏い断言することは目に見えていた。

「分かったよ。それじゃあ別のクエストにするか……ユキナ、何が良い? この際だ多少遠出になつても構わないぞ」

「……良いの?」

「ああ。幽霊が平気でもこう多いと気が滅入るからさ」

「……選んで来るー」

どうやらユキナはこちらの意図を察したようだ。

町に幽霊が溢れるなら町から離れるようにクエストを請ければ良い。

レノは勝ち誇った表情でルイに顔を向けると、

「予定通りですね。現在張り出されてる依頼の中で遠出となると三日は掛かるものばかりですから」

最初からルイの掌で踊らされていた。

ユキナに対して単純な思考に陥りがちのレノをルイは注意深く観察し、彼がどんな行動に出るのか三手先まで読んだ上で幽霊発生時に計画を練った。

後は幽霊騒動が解決されれば今回の一件はそれで終わり。

レノは漸くルイの迷惑にも気付き、内心で彼女を賞賛した。

立場と使用できる権限、洞察力と観察眼。そして受付嬢としての経験にもレノは敗れたのだ。

元より勝負などしてはいなかったが、同じくユキナを気に掛ける身としてルイにも負けてはいられない。

しかし遠出となれば少なからず目的地到着まではユキナと寝食を共にする。

レノがユキナと距離を縮める好機でも有る。

邪念と煩惱がレノに渦巻く中、嬉しそうにアホ毛を揺らすユキナが戻つて来た。

「選んだよ」

そう言つてユキナは依頼書を見せる。

そこに書かれていたのは、山岳部に出現したオーガ討伐だった。

オーガと言えばアスガル領内に出現する魔物の中で上位に位置する存在だ。

そして山岳部には村を一つ經由して片道一日半。

「新米は出会つたら逃げろつて言われてるオーガを選んじまったのか？」

いずれは挑まなければならぬ新米にとっての難敵。決して恐くないわけではない。

正直言えばレノのは心の底から恐怖していた。

そんなレノに対してユキナは小首を傾げながら彼の両手を握り、

「？ レノは護るよ」

惚れてしまいそうな事を平然と言つてのけるユキナに、レノは一瞬ときめいた。そして

て叫んだ。

「逆うううう!! その台詞は普通男がするもんなんだよっ!」

「あらゝスライムに衣服を溶かされ、ユキナちゃんにお姫様抱っこならぬ王子様抱っこ

された者の台詞とは思えませんねえ」

「何で知つてんだよっ!?!」

「ふふっ……私は受付嬢ですから」

ドヤ顔で揶揄うルイをレノは鋭く睨む。だが、彼女は涼しげな顔で向けられる殺意をものともしない。

この女をどうしてやろうか。そんな事を考えていると不意に服の袖が引つ張られる。

「レノ、早く出発しよ」

周囲に幽霊が浮遊する場所から一刻も早く離れたい。ユキナはそう訴えていた。

彼は仕方ないと息を吐き、

「オーガ討伐なんだ。入念な準備が必要だろ？ 怖いと思うがそこは我慢してくれ」

「が、がまんする」

恐がる彼女の為にもレノはさっそく準備に取り掛かり、幽霊騒動で阿鼻叫喚となった町を発つのだった。

一騎討ち

二人はアスガルから一日がかりで北の小さなファルス村を經由し、オーガが凄むという山岳部を目指した。

人の手が入り込んだ山道を進み、オーガが目撃された山岳の山頂に向かう。

山道を進む中、ユキナは剣の柄に手を添え、レノに眼を向ける。

「オーガは硬いよ」

「らしいな。作戦も一応考えたんだが、多分アンタならオーガも一瞬なんだろうな」

レノの指摘をユキナは否定しなかった。

「何度も討伐したから」

「そっか。楽したい所だが、今回は俺が一人でやる」

レノの凜とした声にユキナは思わず足を止めた。

「……危ないよっ」

自分でも驚くほど震えた声が出ていた。

「なんだ、心配してくれてるのか」

心配。本当に自分はレノを心配してるのだろうか？

ユキナはレノの質問に眼を瞑る。

頭の中に彼がオーガに踏み潰される光景が浮かぶ。

仲間の死、昔見た広がる屍の山。そこに追加されるレノの屍。

心が騒めく。ユキナは眼を開け、真っ直ぐレノの金色の瞳を見つめる。

「うん、仲間死んで欲しくない」

「そう言われると弱いなあ。……けど、いずれは辿る道だろ？　ここは俺を信じてくれ」

それを言われるとユキナは頷く他になかった。

一党を信じるのもまた仲間としての勤めだからだ。

信頼関係を構築する上で必要なこと。

同時に万が一レノが危機的状況に陥るなら助けに入る。それで彼が無事なら一党か

ら追放を告げられようとも構わない。

それとは別にレノがなぜ一人でやろうとするのか興味が湧く。

「如何して一人で挑むの？」

「如何してってそりゃあ、まあ男には色々とあんだよ」

訳が分からなかったが、何となくレノが言いたい事は理解できる。

兄とリドもそうだった。ドラゴンの討伐を一人で挑むと言ってポロポロになりながら一人で討伐を果たした。

男の人はそういう生き物だと義母とリティアが教えてくれたことが有った。確かにそうかもしれない。なら今出来ることは彼を信じることに他にない。

「……じゃあレノを信じる」

「おつ、信じてくれ。なんなら惚れても良いんだぜ？」

信じるのは構わないが、惚れても良いという意味が理解できずユキナは小首を傾げた。すると彼は苦笑混じりに肩を竦め歩き出す。

レノが言った言葉はユキナの中で単なる冗談として片付けられ、彼女は彼の後に続いた。

▽
▽
▽

山岳部の山頂にソレは居た。

筋肉に覆われた赤い外皮。頭部の凛々しい角、凶悪な顔、首にぶら下げられた数珠。腰に巻かれた腰巻と瓢箪。紛れもないオーガの姿にレノは息を呑む。

ゴブリンや黒狼には無い威圧感と纏う死の恐怖がレノを襲う。

それでも彼は拳を握り、威圧と恐怖に呑み込まれないように丹田に力を入れる。そしてオーガに真正面から歩み構えを取る。

構えを取るレノにオーガは人間の挑戦者が現れたと口元を吊り上げ構えた。

「行くぞおおおっ!!」

レノは吼え、拳と脚に魔力を纏わせながら地を踏み抜く。

オーガの視界からレノの姿が消え、ユキナは視線を決して動かさずレノの行動を明確に捉える。

仲間の挙動一つ一つをオーガは観察し、僅かな挙動で誰がどの様に動くのか理解し対応、そして剛腕で踏み潰す。

そうやって経験を積んだ一党を打ち砕くのがオーガだ。

ユキナがいま出来ることは、レノの動きを眼で追わないこと。そしていざという時に動くことだ。

オーガの目前にレノが現れ、彼は雷を纏った拳を標的の頭部に叩き込む。

鈍い音が山頂に響く。

雷による破壊力と速度を合わせた拳がまともにオーガの頭部に入った。

オークやゴブリンなら頭蓋骨を粉碎する一撃。だがオーガは殴られたままにやりと笑う。

「やっぱりかよっ!」

まるで効いていない。

そう理解したレノはオーガから距離を離す。

そして詠唱から雷の槍を掌に作り出す。

「雷槍よ貫け！」

作り出した雷槍をオーガに向け真つ直ぐ投擲。

しかし雷槍はオーガの肉を貫く前に、掴み取られる。

オーガは掴んだ雷槍を握り潰し、足を上げながら腕を上げだす。

何か来る。

そう判断したレノは右に逸れるように走り出す。

一瞬、レノの隣を何が通り抜け、破壊音が耳に響く。

恐る恐る眼を向ければ、先程までレノが居た地面が粉碎されていた。

冷や汗が額から流れる。一瞬の判断で明確な死が訪れる。それどころか気付かない

まま殺されていた。

それでもレノはオーガに立ち向かう。

恐い、楽しんで稼ぎたい。全部ユキナに任せればそれで済む。

頭に本心と弱音が駆け巡る。それでもユキナは信じると言った。

だからレノは逃げてユキナに任せるつもりは毛頭ない。何よりも彼女と共に歩むな

らオーガ討伐は必要だからだ。

「はいっはごうだッ！」

掌に爆炎を纏わせ、オーガの胸に零距离で爆破させる。

立ち込める黒煙にレノは次の一手を打つ。

右掌に炎。左掌に雷を作り出し、二つの属性を重ね合わせる。

炎の爆発力と雷の破壊力を合わせた魔法をオーガに放つ。

爆炎と雷撃が動かないオーガに炸裂する。

魔法の直撃にレノは、反撃に備え一度距離を取り構え直す。

オーガを覆っていた黒煙が突如発生した風圧に掻き消され、確かな火傷を負ったオーガの姿が現れる。

オーガは腰の瓢箪を取り、中の酒を飲み出す。

「戦闘中に酒って、随分と余裕見せてくれんじゃねえか」

レノは精一杯の強がりと言うが、オーガの酒は魔力を帯びた酒だ。

オーガには酒を飲むことによつて放てる魔法が有る。

「レノ、そこから離れて」

「分かった！」

ユキナの助言にレノは走り出す。

するとオーガは動き回るレノを捉えながら、大きく息を吸い込んだ。

そしてオーガは口から酒臭い灼熱の息を吐き出す。

燃え盛る地面、広がる火の手がレノの退路を塞ぐ。

後方に控えていたユキナに視線を向ければ、彼女は既に灼熱の射程外に逃れていた。

レノは拳に魔力を込め地面に叩き込む。魔力の伴った衝撃が岩を隆起させ、今度は隆起した岩をオーガに蹴り飛ばす。

炎を掻き消しながら飛来する岩。

だが、岩の落下地点にオーガの姿は無い。

何処に行ったのか、とレノは周囲を見渡す。

すると背後に威圧と殺気が立ち込め、レノは本能に従ってその場から離れる。

瞬間、オーガの拳が大地を激しく揺らす。

地震に足を取られる中、レノの目前にオーガの拳が迫る。

腹部にオーガの拳が入り、レノの身体は空に打ち上げられた。

殴られた衝撃に口から血糊を吐き出したレノは、地上を見下ろした。

「レノっ」

地上には心配そうに見つめるユキナ。そして落下地点で拳を構えるオーガの姿がある。

（一発でこの威力っ！ あと一発食らったら内臓は愚か骨も砕けちゃうな！）

今にもオーガを仕留めんと劍の柄を握る彼女に、何もするな！ と強い意志を眼に宿す。

こちらの意志を汲み取ったユキナは劍から手を離す。そしてレノは打開策を打つべく思考を巡ら続ける。

オーガの身体は非常に硬い。

しかしユキナは硬いオーガを魔力も使わずに斬り刻めるだろう。

どんな方法かはレノには検討も付かないが、鋭い刃でオーガの首を斬れば勝機は有る。

幸い今は空に打ち上げられ、後は落下するばかり。

落下の勢いを利用し、全体重と持てる力でオーガの首を落とす。

一瞬でもタイミングを誤ればレノは今度こそ殺されるか、見極めたオーガが回避に移れば自分の身体は地面に衝突し身体はぐちゃぐちゃになるだろう。

(賭けか。ギャンブルは好きだが、命掛けは好きじゃねえんだよなあ。……けど、魔法があの外皮に弾かれる。なら賭けに乗るしか方法はないか)

身体が落下を始める頃、レノは決断を下す。

手刀を作り魔力を練り込む。

鋭い刃を掌の側面に作り出すように。

やがて手刀に鋭い刃が形成され、オーガはにやりと口元を吊り上げた。

真向勝負。あの弱き人間は一人で賭けに臨んだ。ならば応じなければならぬ。

オーガは受けて立つと拳を構える。

徐々にレノとオーガの距離が縮まる中、オーガの間合いに彼の身体が入る。

繰り出される剛拳が空気を歪めませ、レノに迫る。

「レノっ!」

ユキナの声を合図にレノは、身体を大きく捻った。

オーガの繰り出した剛拳を宙で避け、彼は剛拳を足場に跳ぶ。

そして首筋に手刀を斬り付けた。

オーガの外皮に食い込む魔力の刃に、

「うおおおおっ!!」

レノは氣迫と共に振り抜く。

迫る地面に、レノは受身を取ることで身体に掛かる衝撃を逃す。

そしてオーガに振り返ると、そこには首を失ってなお佇んだオーガの姿が有った。

「や、やったのか?」

本当に倒せたのか、確認を込めてユキナに振り向く。

「うん」

ユキナの頷きに、身体から一気に力が抜ける。

そのままレノは地面に座り込み、大きく息を吐き出す。

そして、今頃になって全身に激しい痛みが襲う。

「ぐうおっ!! めっちや痛ええ!」

それは無理もないとユキナは、レノの側にしやがみ込んだ。

そしてユキナは何処か嬉しそうに、

「おめでどう」

そんな言葉を告げた。

「お、おう。……それにしてもオーガは何で避けようとしなかったんだ? はっきり

言って俺を殺せる機会は有っただろ」

「……オーガは真向勝負が大好き」

だからオーガはレノの攻撃を全て受け止めた。

それは人間の自分から見ても漢らしいときえ思える。

「……立てる? 歩ける?」

「大丈夫だって。それよりも下山して休もうぜ」

そんな提案にユキナは頷いて立ち上がる。そして手を差し伸ばした。

差し出された小さな手。されども数え切れないほどの命を斬った手。そんな印象を

受けながらレノは、彼女の手を掴んだ。

こうしてオーガの討伐を果たした二人は、一晩休んでからアスガルの帰路に着くのであった。

絶望

オーガ討伐を果たした二人は意気揚々とアスガルに帰るのだが、ユキナは絶望した。三日前と変わらず町中に溢れる幽霊。

ルイは確かに三日で幽霊討伐は完了すると言っていた。しかし現実が違う。

「……………どうして?」

膝から崩れ、地に手を付けたユキナに門番が告げる。

「幽霊は何度も一掃されたんだが……………何者かが何処かに召喚陣でも刻んだのか、明朝には溢れるんだよ」

「それって、三日の間に一掃、明朝に振り出しに戻るってことか?」

「そうだ。アスガル伯爵の騎士達が調査に動いてるが……………」

「進展無し。となると俺達も手を貸した方がいいな」

ふわふわと町を漂う幽霊がユキナの身体を取り抜ける。

腹部から背中を通過した霊体にユキナは小さく悲鳴を零す。

「……………やっぱもう少し怯える彼女を見るのも」

「悪趣味な奴め。嫌われても知らんぞ」

「それは困るな。……って、ユキナはいつまでそうしてるつもりだ？」

二人の会話が耳に入らない。

幽霊が怖い。いつも怖い時は兄が側に居てくれた。

眼を瞑り晒そうとも溢れる恐怖の前に精神は限界を迎え、

「……お兄ちゃん助けて。何処に居るの？」

自分でも知らない内に兄に助けを求め捜していた。

もう兄から見放されたのに懲りずに助けを求めた。

それは「竜の顎」の名声低下に繋がる。

自分が原因で兄達に迷惑をかけることは嫌だ。

だから立ち上がって幽霊騒動を解決しなきゃならない。

ユキナは幽霊騒動解決のために立ち上がる。

「おっ、やる気だな。ってか兄貴が居たのか」

「うん、大好きな兄ちゃん」

「だ、大好きねえ。随分と想われてるんだな」

何故か悔しげに歯軋りするレノに、ユキナは訳が分からず小首を傾げる。

そして気がつく。レノと話していると恐怖が和らいでいることに。

なぜそれが恐怖を和らぐのかは依然として理解できないが、ユキナは行動を迅速に移

す。

「話しながらギルドに行く」

「……あつ……よし！ 会話は任せておけ」

こうして二人は、幽霊が溢れる町中で雑談を繰り広げながらギルドに駆け出す。

レノが幽霊を蹴散らしながらギルドに向かうと。

扉を蹴り開けたルイとかち合う。

銀の短刀を右手に構え、普段とは違い冷徹な表情を浮かべる彼女にレノは戦慄し眉唾

を飲んだ。

強者の風格を醸し出すルイにユキナは慣れた様子で声をかける。

「ルイが出るの？」

此方に視線を向けるなり一瞬驚いた表情を浮かべ、いつもの事務的な笑みを取り繕う。

取り繕わなくともありのままの姿で良いと思う。

「つ……ユキナちゃんでしたか。いえ、不審な気配を感じたので飛び出した所ですが……如何やら逃げたようです」

彼女の言う気配に心当たりがないユキナは辺りを見渡した。

ギルド周辺は幽霊が徘徊してるばかりで誰も居ない。

「……ゆ、幽霊しか居ないよ」

「ああ、まあそうですね。……それでお二人は報告ですよね？」

ルイの対応にレノは違うと笑みを浮かべた。

「報告も有るけどよ、やっぱ俺らも参加する」

「……霊体に対する有効打を持つのは新米くんお一人。ユキナちゃんを連れてどう動くつもりですか？ そもそも有効打の無い彼女に任せるほど我々は愚かではありませんが」

「あー。当初は幽霊討伐で終わる話しだったろ？ けど今は状況が変わった。不確かな情報だが、召喚陣を捜し出すぐらいには役に立つつもりだ」

レノの話しにルイは指先を顎に添え思案を浮かべた。

「確かに人手は一人でも多い方が良いでしょう。現在アスガル伯爵の騎士団も動いてますが、未だ召喚陣の発見には至ってません。そもそも召喚陣では無い可能性もあります」

「召喚陣以外にこんだけの幽霊を召喚する方法ってあんのか？」

召喚魔法を用意ない方法。

ユキナは懸命に過去の記憶を探る。

しばらく探ると【竜の顎】の一人として経験した体験の中にそれは有った。

北方の古い遺跡内部の深部で安置された宝珠から大量の魔物が呼び出された経験が

確かに有った。

「……遺物？」

「その可能性も捨て切れませんね。かつて【竜の顎】が回収した宝珠と同型の物が別の遺跡で見えられたという報告も多数有りますし」

「……それじゃあアンタが感じたつつう気配が怪しいな」

「誰かが保有し町中を移動している。あるいは何処かを拠点にしているのでしょうか。です。でお二人は不審人物の方を探してもらえませんか？ 既に地下水路や町中は冒険者と騎士団が探っているのです」

「分かった。……って、もしかすると人を相手にすることになるのか」

「……殺さず捕える」

「是非ともそうしてください。捕縛は重要な手掛かりになるので」

ルイはこちらの眼を見つめ、大丈夫か？ と言いたげな視線を訴えていた。もちろん不安は有る。だけど今は一人じゃない。

「大丈夫」

「そう、ですか。無茶はしないでくださいね」

「ん」

ユキナは短く答え歩き出す。

レノは彼女の後を追いながら、

「待てよ。まずは怪しくない施設から調べるぞ」

一つ提案した。

怪しくない施設。アスガルで怪しくない施設の方が多い。

逆に怪しい施設を探す方が難題だ。

「……？ 教会、ギルド、公衆浴場、アスガル警備署、領主のお屋敷」

一先ず思い付くだけ口にする、レノは笑みを浮かべた。

「ギルドは確実に除外して良い。アスガル伯爵つてのは成り上がり貴族だろ？ 確か冒

険者の功績で貴族の爵位を授かったって」

「うん。珍しくない話し」

「折角成り上がって事件を起こすのはリスクが多い。下手をすれば爵位撤回とかな。な

ら教会が怪しいと思うんだ」

「どうして？」

「誰でも気軽に訪れられる。人の出入りも時間帯問わずだろ」

それなら公衆浴場も怪しいとユキナは思う。

そんな考えを見透かしたのか、レノは自らの考えを口にした。

「公衆浴場も候補ちやあ候補だが、ギルドから近いのは何処だと思う？」

幾ら無関心でもそれぐらい分かる。別に不快ではないがアホ毛が逆立つように動く。なにせ通い慣れた町、何も知らないと思われるのは少しだけ心外だった。

「同じ中央区に在る教会——アダム教会」

「そうだ。……まあ当てが外れたら片っ端から調べれば良いだけだしな」

「それなら急ぐ……幽霊はもう見たくないから」

行き先が決まった二人は地を蹴り、町中を走り出す。

二人を観察する視線に気付かずに……。

静かな教会

アダム教団が運営するアダム教会の設立は、開拓期初頭まで遡る。

イーリス領内で発見された神々の存在を示す遺物と文献の発見が、様々な思惑から人々にアダム教団を組織させるに至った。

薄らとアスベルから教わった話しをユキナは浮かべ、教会の扉を開ける。

真つ先に眼に映り込むのは、アダムとイヴの石像と教壇。そしてオルガンだった。

あとは誰も居ない寂しげな空気が礼拝堂に漂うばかり。

ユキナは静かに足を踏み込む。

その背後を続くレノがポツリと零す。

「幽霊騒動の影響か、誰も居ないな」

静寂に包まれる礼拝堂遠見下ろすアダムとイヴに、ユキナは薄気味悪さを感じていた。

「不気味」

「……ユキナ、足元を見てみる」

言われて初めて気付く。

真新しい足跡が木造の床に残されていることに。

よほど急いでいたのか、足跡は走ったような歩幅で残されており、それは教会の廊下まで続いていた。

ユキナとレノは足跡を頼りに進む。

廊下に出て足跡に従って進むと、今度は教会の中庭に行き着く。

足跡は中庭の草を踏み付けた跡に変わり、やはりそれを辿る。

「痕跡は噴水の裏側に続いてるな」

痕跡通り噴水の裏側に回る。

するとそこには、地下室への入り口が無防備にも曝されていた。

「不用心だな」

「……うん」

ユキナは真つ先に入り口に飛び込んだ。

階段を蹴り、段差を飛び降りるように一気に降り立つ。

そして周囲に視線を巡らせる。

剣を振るうには十分な広さだ。

ユキナは剣を引き抜くと、

「……あらー、後先考えずに先行するんじゃない！」

コツンつと後頭部を叩かれる。

「……………ごめんなさい」

怒られたことにアホ毛が力無く垂れ下がる。

「次からは罫の有無を確認な。……………それはそうと、幽霊が居ねえな」

言われてまた気付く。

そういえば教会に入ってから一度も幽霊とは遭遇していない。

町中には大量に溢れているというのに、これは変だとユキナは首を傾げた。

「アダム教会が事件を引き起こした？ いや、教団の仕業に見せ掛けた犯行か？」

犯人が誰だろうと興味はない。

捕縛して宝珠を回収か砕けば事件は終わる。

同時にユキナの脳裏に、先日の血文字で刻まれた壁が浮かぶ。

ユキナは頭に浮かんだ言葉と記憶を祓うように首を左右に振った。

その隣に居たレノの顔に白い髪が当たる。

「うわっ……………良い匂い、って違う！ どうしたんだ突然？」

過去の忌々しい記憶は出来るだけ話したくない。

だからユキナは誤魔化すことにした。

「き、気分」

「そっかあ気分かあ。……まあ、言いたくないなら言わなくて良いけどよ、アレだ。辛い時はいつでも話して良いんだからな」

話せば気分が楽になる。彼はそう言って笑いかけた。

「うん、ありがとう」

結局自分は誰かに甘えてしまっている。

レノの気遣いと優しさにも【竜の顎】たちにも。

自分は誰かに寄生して生きているのだという思いが強まる。

それでもユキナは歩み出す。

寄生虫だろうと欠陥品だろうと過去に犯した罪は償わらなければいけない。

その為にもユキナは冒険者を辞めず立ち止まる訳にはいかなかった。

「……ユキナ?」

歩き出すユキナに不穏な気配を感じたレノは、思わず彼女を呼びかけた。

しかしユキナは彼の呼び掛けに応じず、淡々と先を進むばかり。

不信に思いながらレノは彼女を後を追う。

そして二人は何事も無く通路を抜け、広場に辿り着くのだった。

過去の刺客

地下室の広場に赤い刺青の男が佇んでいた。

ペンダントに嵌め込まれた宝珠を指先でなぞり、ユキナをしつかりと見て嗤った。

ユキナは男に見覚えが無かったが、醸し出す不快な雰囲気から剣を構える。

ペンダントに嵌め込まれた宝珠に刻まれた紋章に見覚えがある。確か魔力を送るだけで召喚を可能にする遺物だったと。

「待って待って！　もしかしたら司祭かもしれないだろ？　いや、刺青入ってる時点で聖職者って言われると疑うけどよ」

レノの疑問を無視して男は野太い声を発する。

「ああ、漸く会えた。まさか自ら此処に飛び込むとは予想外だったかな」

「……？　だれ？」

やはりユキナは男の声も何一つ覚えがない。

しかし男は酷くショックを受けたような眼差しで、

「お、覚えてないと申すか？　ほらこの顔を！　強面で刺青が入った顔など早々忘れる筈が！」

ユキナは記憶を探る。

しかし興味の無い人の顔は中々覚えられないし、関心も湧かない。

もしかしたら何処かで会って話してるかもしれない。そう考えたユキナは男に頭を下げた。

「……ごめんなさい」

「なっ!? いや、貴公は無関心だったな。ならば記憶してないのも道理か」

「アンタはユキナなのに？ もしかして自称元カレとかそういう痛い奴？」

「否！ 断じて否！ わたしとユキナは男女の仲に有らず！ 主人と道具の関係だ！」

「は？ 道具って……何を言い出すんだよ。それとも妄想が祟った危ない奴か？ ユキ

ナ、ああ言う手合いは近寄っちゃあダメだぞ」

レノは男に不快感を顕にした。

ユキナは男に関して何一つ覚えていないが、自分に対して道具と評する輩には覚えがある。

「……道具。エデン」

彼は紛れもなく敵だ。

結論を出したユキナは、地を蹴り得意の俊足を駆使して一瞬の内に男の懐に入り込む。

そのまま男のペンダントに狙いを定め剣を斬り上げた。

だが、狙いを悟った男は身を引き、紙一重で一閃を躲す。

剣先に斬られた青髪が地下広場に舞い散る。

初撃が避けられたユキナは剣を鞘に納め拳を構える。

男はそのままユキナから距離を取り、失望混じりの吐息を吐く。

「……なぜ急所を狙わない？ 貴公なら造作も無く殺せた筈だが」

「……もう人は殺さない」

ユキナの発した一言に男は嗤った。

「あははっ！ 人は殺さない？ 面白い冗談を吐くな。我らに命じられるまま殺戮を繰

り返した道具の分際がっ！ 白い死神として恐れられた貴公がっ！！」

怒りを顕に男は掌に大火球を作り出す。

それは一度放てば地下広場を業火で覆い尽くすほどの大火球だった。

「デカすぎだろ!!? そんなもん放つたらアンタも巻き込まれるぞ！」

「馬鹿が！ 自らの魔法に巻き込まれるのは三流以下だ！」

男は自身の前方に魔障壁を展開し、大火球を振り下ろさんと手を下す。

しかし大火球が放たれるよりも先に、鋭く甲高い音が地下広場に響く。

男の視界に一瞬、それは映った。銀の短剣が魔障壁を貫くのを。

そして地面に飛ぶ男の右腕、魔力供給を失い消える大火球に男と魔障壁に呆然とした。

地面に転がる右腕と壁に突き刺さる銀の短剣。短剣の刃先に対魔障壁の反抗魔法が仕込まれていた。

一体誰が？ 男は意識を手放してしまいそうな苦痛に耐えながら冷静に見渡す。

そして男は見た。少年の背後、通路の奥で此方を射抜く彼女の姿を。

魔力で右腕の痛覚を遮断しながら、

「……………?!? 奴が到着したか！」

男は吠えた。

だが、ユキナは男の無防備な腹部に膝蹴りを叩き込む。

膝を引き戻し裏拳で頬を殴る。

「はいっー」

男が地下広場の壁際に吹っ飛ぶ。

その様子をレノは黙って観ている他に無かった。

加勢するという選択肢も有るが彼は直感していた。

これはユキナの過去の因縁。だから彼女の手で決着を付けるべきだと。

だからレノは何も行動に移さず、ユキナを信じることを選んだ。

彼女がオーガの時、信頼してくれたように。起き上がる男にユキナはゆっくりと歩み寄る。

「待て！ 本当に覚えておらんのか!? アデユク・サリアスの名を！」

一瞬足を止めて記憶を探る。

やはり聴き覚えも興味もない名だった。

「うん」

「……無関心にも程があるおおお!!」

アデユクは怒り任せに身に秘める魔力を爆発させる。

そしてユキナの視界から消え、彼女の背後から短剣で突き刺した。

腰まで届く白髪にユキナの血が降りかかる。

刺された背中が焼けるように痛む。

「……………」

ひりつく傷口と身体を巡る寒気に彼女は毒を盛られたと理解する。

アデユクは左手で短剣を引抜きそれを投げ捨てた。

そしてユキナの細い身体を左腕で抱き締めたのだ。

「ダメエっ!? ユキナを離しやがれ！」

怒り心頭に叫び、拳を振りかざしながら駆けるレノを嘲笑うように、アデユクは彼と

通路で静観する彼女に勝ち誇った笑みを浮かべる。

レノと彼女は距離から間に合わない。二人が到達するよりも魔法が速い。

あとは転移魔法でユキナを連れ帰るだけの簡単な作業だ。アデユクは魔法の詠唱をしながら勝利宣言を叫ぶ。

「私の勝ちだ！ 彼女の回収こそ我らの目的！ ではさらばだあつ！」

しかし転移魔法が完成するよりも早く、ユキナの肘打ちがアデユクの腹を殴り付けた。

アデユクは殴られた痛みから思わずユキナを離してしまう。

拙い！ 焦りの色を浮かべるアデユクの視界に舞い込んだのは、宙を浮かび回し蹴りを放つユキナの姿だった。

頬に鋭い蹴りが突き刺さる刹那の一瞬、アデユクはしかと目にした。ユキナの純白の下着を。

そして頬に深く掘じ込むように突き出された蹴りの威力に負け、吹っ飛ぶ身体。

このまま壁にでも衝突するのだろうか。その時こそ勝機は有る。そんな確信を抱くアデユクの足を小さな手が掴む。

視線の先には無表情のユキナだ。

ユキナは掴んだアデユクの足を振りかざし、床に叩き付けた。

「ぐはあっ!？」

叩き付けられた衝撃にペンダントの鎖が切れ、床に転がる。

ユキナは転がったペンダントを宝珠ごと踏み潰し、地に沈むアデユクの前にしゃがんだ。

「これで幽霊は出ない？」

「……宝珠に気付いて……。貴公はなぜ私を剣で斬ろうとしなかった。殺さない誓いは理解したが、剣で斬り無力化もできたはず」

「……血を吸っちゃうから」

「はっ? まさか剣身に吸血石を……」

人を剣で突き刺せば、ユキナの剣はたちまち人体から血を吸い尽くすだろう。

それではアデユクが死ぬ。

だからユキナは格闘に切り替えた。

しかしいずれアデユクは右腕の切断によって出血多量で死ぬ。

アデユクの失った右腕を止血するために、自らのブラウスの袖を噛みちぎる。

ユキナの行動にレノとアデユクは驚愕した。

「なっ!?! 一体なにをっ」

狼狽えるアデユクを無視し、噛みちぎった袖で彼の右腕を縛った。

「これで……だ、じょう……う？」

視界が定まらない。

巡るしか周る視界にユキナは吐血し、吐気と寒気から倒れ込んだ。

薄れる意識の中、ユキナは思い出す。

(……毒抜き、忘れてた)

解毒が間に合わずに死ぬ。

それも良いかもしれない。

こんな事を考えているとみんなが知ったらきつと怒られる。そう思いながらユキナは眼を瞑った。

目覚めは病室

吹く穏やかな春風が頬を撫でる。

花の香りと消毒液の匂いにユキナはぼんやりと眼を開く。

見覚えの有る白い天井が視界に映り込んだ。

何度か世話になったことがあるアスガルの病院。

同時にユキナは息を吐く。

「……生きてる」

穏やかな呼吸、手足の感覚と身体に巻かれた包帯の感触。

「おや、目が覚めましたか」

非常に聴き覚えの有る声——ルイの声にユキナは顔を向けた。

視線の先には、腰に手を当て貼り付けた笑みを浮かべる彼女の姿。

「……言いたいことは分かっていますね？」

無茶をしたからルイは怒っている。

「(づ)めんなさい」

素直に謝るとルイは呆れた眼差しで息を吐く。

「ふう……貴女は昔からそうでしたね。それに、なぜアデユク程度の相手に遅れを取ったのですか？」

決して油断していた訳では無かった。

ただ剣を使えば加減が下手な自分はアデユクを殺してしまう。

あの時、アデユクが背後に回り込んだ瞬間。ユキナの思考は水平に剣を振り抜くという選択を選んでいった。

そして頭に浮かんだのは胴体を寸断されたアデユクの死体だ。だからユキナは二度目の剣を使うことを躊躇した。

「……無力化が好ましいから」

「あく確かに私はそう言いましたが……いえ、それは貴女が選択したことですね。ならば私ごとやかく言うのは違いますね」

召喚の宝珠を所持していたアデユクがその後どうなったのか知らない。

色々と話しを聞く為にユキナは、まず当たり障りのない質問から聞くことにした。

「お仕事は良いの？」

「ええ、友人の看病をするぐらいの自由は効く職場ですから」

面と向かって友人と言われたことが無かった。

ユキナを取り巻く関係性はいつだって仲間か家族か他人だけだったからだ。

ユキナはルイの眼を真つ直ぐと見つめながら、
「ありがとう」

礼を口にする、笑ってどういたしましてと返される。

「そういえば、どれぐらい経ったの？」

「ユキナちゃんが倒れて三日です」

三日も眠っていたのは随分久しぶりだ。

身体が鈍らないか心配にもなるが、今は休むことを考えなければ看病してくれた彼女に失礼だ。

最後にユキナは無力化した彼について尋ねることにした。

「……アデユクはどうなったの？」

「アイツは騎士団に引渡しましたよ。エデンの残党ですから情報を吐くまで拷問、尋問に掛けられるでしょう」

罪人に対する騎士団の拷問と尋問は、処刑宣告なようなものだった。

これまで数多の罪人が騎士団の拷問と尋問により、情報を全て吐き出された上で廃人ないし処刑されていた。

本来なら自分もそうなるべき存在なのだが……。

「そう、なんだ」

「……あつ！ そういえばそろそろ包帯を替えて解毒薬を服用する時間ですね！」

ルイはわざとらしく話題を逸らした。

いつも過去に関連した話題となるとルイは話しを逸らす。それが有難いと思う反面、いつまでも甘えられないとユキナは思う。

同時に苦い薬は苦手。これから味わうと思うと小さな息が漏れる。ふと動く気配に気付けばシャツに彼女の手がにじり寄っていた。

彼女の手から逃れるように距離を取る。

「自分でできるよ」

残念そうにするルイを他所に、ユキナは手早くシャツのボタンを外しシャツを脱ぐ。

そして下着姿だけになったユキナは包帯を外すと乳白色の肌が顔になる。

後髪を束ね持ち上げてからルイに背を向けた。

一人で背中の中の包帯を替えられない。だからユキナは彼女に頼んだ。

「包帯はお願ひしても良い？」

「お任せを！ と言いたいところですが、既に傷口は跡形も無く綺麗さっぱり塞がってますね。流石は優秀な治療師」

じゃあ包帯を替える意味は無い。そう思った矢先、病室のドアを開け放つ音が響く。

ちらりと視線を向ければ、そこには意気揚々とフルーツバスケットを持参したレノが

居た。

「ユキナ！ 見舞いにき……ぶはっ!？」

病室を訪れたレノは盛大に鼻血を噴き出し床に倒れ込んだ。

倒れた拍子にフルーツは鼻血に染まった床にぶち撒けられてしまう。

ユキナは手早く着替えを済ませ、気を失ったレノに近寄る。

そしてしゃがんでは頬を突く。

幸せそうな表情を浮かべ気を失ったレノに、ユキナは小首を傾げる。

「……レノ、そこで寝ると邪魔だよ」

軽蔑も何もない赤い瞳でレノを見つめ、何度も頬を突く。

それでも彼は一向に起きる様子を見せない。

「起きない」

「しばらく放置で良いでしょう。それよりも解毒薬を飲んでくださいよ？ まだ体内か

ら毒が抜け切っていないんですから」

「……うん」

ルイが差出す解毒薬を受け取る。

解毒薬の毒々しい液体にユキナは一瞬、飲む事を躊躇ったが覚悟を決め、一気に飲み

干す。

濃厚な苦味にユキナは表情一つ変えない。しかしアホ毛は枯れたように倒れた。

ユキナはベッドに歩み寄り、そのままベッドに倒れ込んだ。

「……苦い」

「倒れる程とはよく聴きますが、確かに色自体がもうヤバイですよね」

強い薬なのか、眠気を感じながらルイに勧める。

「飲んでみるといいよ」

「嫌です」

きつと背後でいつもの笑みを浮かべているのだろうとユキナは思いながら一言呟く。

「……理不尽」

「まあ、まだ回復しきってませんから部屋と新米くんの掃除は任せて休んでください」

「うん、ありがとう」

こうしてユキナは鼻血に染まった後始末をルイに任せ、休息を取るのだった。

立て続けにアスガルの襲った事件は犯人の捕縛によって解決したが、依然と影に潜む者たちが虎視眈々と隙を窺っているしまつ。

四章 海底に潜む謎の生物

歩み寄ろうと決意した日

石壁に覆われ、光を差さないが代わりに燭台のか細い火が道を照らす。

アスガル警備署の地下に用意された地下牢に二つの足音が響く。

地下牢をレノは守衛の案内に従って進んでいた。

「本当に話しを聞くのか？ 口を破ると思えないが、それに見るに耐えないぞ」

「ああ。どうしても聞いて置きたいことが有るんだ。つてか、拷問つてそんなに酷いのか？」

騎士団の拷問に付いては質問すると守衛は言葉を濁した。

口にすることも躊躇われる。守衛の態度からそう感じ取ったレノは話題を変えることにした。

「あー、そう言えば幽霊騒動も収まって領主はさぞお喜びになられたんじゃないか？」

「難しい顔して書面と睨めっこ中さ。ただ後日冒険者に対して褒美を取らせるとは言うていたな」

守衛の言葉にレノは思わず喜んだ。

冒険者には何かと金が入り用だ。それにユキナの治療費も嵩んだため金はいくら有っても困らない。

薬品の用意にだって金はかかる。

そこまで考えたレノは自身の不甲斐無さに腹が立つ。

一ヶ月だ。一ヶ月もユキナと一党を結成しておきながらレノは一度も薬品を買え揃えなかった。

自分自信が魔力による自己治療ができる。それも有るが、ユキナは一ヶ月のクエストで一度も被弾しなかった。

だから薬品は不要なんだと甘えていた事実には腹が立つて仕方なかった。

レノは腹の中で煮え立つ不甲斐無さを抑え、敢えて軽口を叩く。

「へえ。さぞかし豪勢な褒美なんだろうなあ」

「噂じゃあ今回事件を解決に導いた一党を屋敷に招待するとか」

呑気に語る守衛にレノは思わず足を止めた。

そして振り返る守衛に彼は告げる。

「………礼儀作法が分からないんだが？」

「噂だからな？ あんまり期待しない方がいいぞ」

そう言つて歩き出す守衛にレノも歩みを再開させた。



目的の牢に到着したレノは、牢の奥に居る人物に思わず目を背けた。

同時に守衛が言っていた言葉の意味を理解する。

これは見ていて気分がどうこうの話しじゃない。

騎士に捕縛されたアデユクは四肢を失い、魔封じの鎖で十字架に磔にされていた。

騎士によって四肢を奪われた罪人。人伝の噂に聞く話よりも目の前に映る光景は、あまりにも残酷だった。

「何も……までやる必要は……」

罪人に対する行われた拷問と処置にレノは同情と憐みを口にした。

するとアデユクは薄らと口を動かして嗤うのだ。

「小僧、貴様に哀れまれる謂れはない」

「……けどよ、もう腕も無いんだぞ？ 誰にも触れる腕もよ。例えば好きな奴とか、さ」

「愛などどうの昔に棄てたが……」

何かを惜しむように口をまごつかせるアデユクに、

「何だ？ 話してみろよ」

話しは聞くと耳を傾ける。

「……ふむ。失って気付いたが、ユキナに触れられないというのは中々の苦痛だな」

「ユキナ、ね。……アンタは一体何者なんだ？」

ユキナの過去に付いて触れないと決めたが、アデユクに付いて知るといふ事は彼女の過去にも触れるということ。

だからレノは敢えてアデユクに正体を問うた。

逃げの一手と理解したのか彼は嗤う。

「小僧、知るのが恐いか？　だがそれは誤り。側に居て寄り添わない理解者とはまた孤独なのだ」

業腹だがこの男の言葉は正しい。

レノはユキナに対して詮索しない方向で彼女を受け入れた。

単に知らない方が知る楽しみも理解していく事で距離を縮められるかと考えたからだ。

ただ言われてやっと気付く、自分は彼女に付いて彼女の口から聞こうとはしなかった。

理解しようとしているようで自分勝手な歩み方。はたから見れば独りよがりの独善に過ぎない。

なら此処を出たら見舞いがてらユキナに歩み寄ってみよう。

一つ腹を括ったレノは冗談混じりに軽口を叩く。

「……聖職者みてえな事を言うんだな」

「ふん。私は邪教徒、あの子は被害者。後をどうするかは小僧次第だ」

神聖国イーリスが邪教徒と評する輩などそうはいない。

レノはアデユクの言葉と彼との戦闘の折にユキナが小さく呟いた単語に一つ結論を導き出した。

「邪教徒と被害者——エデンか」

十年前に邪教徒の集団が身寄りのない子供を攫い、悍ましい事件を起こした事はレノも知識としては知っていた。

目的は不明だが、エデンと名乗る組織は子供に実験を施したと。

アデユクの言葉が一つの真実だとするならユキナは、エデンの被害者。あるいはしばらくエデンの実験によって彼らと共に有ったのかもしれない。

それもレノにとっては単なる過去でしかないが、ユキナにとっては悪夢かもしれない（できごと）。

「ユキナにとってアンタらは今も明けない悪夢か？」

「……ああ、我々残党が居る限りはな」

まだアデユクの他にエデンの残党が居る。

アデユクはユキナを目的に事件を引き起こしたが、起こした事件はどちらかと言えば

悪態程度のものであった。

「スライムと幽霊を使ってアンタはどうするつもりだったんだよ？　ぶっちゃけ意味不明なんだが、それにアダム教団と何か関係があんのか？」

「ふむ、もう終わった計画だ。……スライムは支援者に頼まれたに過ぎんが、幽霊はユキナの嫌いなもの。あの子は欠陥品ゆえに他者から疎まれ易い。故に独りになった所を連れ攫う算段だったのだ。後者の問い掛けに関する答えは単純……アダム教団と我らは敵対関係に有り、ついでに連中を陥れるには都合が良かった」

「他にも同胞がゴブリンにいらん知恵を授けた事もあったが……」
アデユクの返答になるほどと頷く。

そしてレノは欠陥品という単語に眉を歪めた。それはユキナを観察して最初に識つた事情だ。

恋は盲目と言うが、レノにとって一目惚れしてしまった少女が例え欠陥品だろうと関係が無かった。

彼女は彼女に過ぎない。欠陥を抱えようともユキナに代わりはないからだ。

「アンタの敗因はユキナを気にかける奴が二人居たつてところだな」

「左様。あの女然り小僧然り、いつだってあの子は誰かに気に掛けられている。……孤独とは程遠い少女だ」

何かを懐かしむように語るアデユクにレノは敢えて話しを聴く事を辞めた。

「色々と話しは分かった。俺はこれからユキナの見舞いに行くが、アンタは彼女に何か伝えたいことが有るのか？」

「何も」

何も無いとアデユクは眼を閉じ、これ以上は語ることもないと態度で示す。

レノは小さくため息を吐き、踵を返した。

「そうかよ。……守衛のおっちゃん、面倒かけたな」

「かまわないさ。騎士殿からは事件の当事者には知る権利が有ると言われていたしな」

こうしてレノはユキナの見舞いに彼女の病院へ向かうのだが、そこで眼にした裸体のユキナにレノは意識を失うことに。

話し合う二人

幽霊騒動から速くも四日が経過し、アスガルは日常に戻りつつ有った。

怪我也癒え、毒も抜け切ったユキナは無事に退院を果たした。

退院後、程なくしてユキナはアデユクに面会した。

自分が捕らえたことによつて彼の身に何が起きるのかを正しく理解するため。そしてエデンの次の目論見に付いて。

しかしアデユクはユキナの問いに答える事は無かったが、

『貴公の居る所に過去の影有り、恐らく奴もその内姿を見せるだろう』

それだけ言い残してアデユクは、拷問による疲労のせいか眠りに付いた。

そして用事を済ませたユキナはレノが待つギルドに向かったのだが……。

▽
▽
▽

静寂が漂うギルドの酒場、日頃の喧騒が嘘のようにこの場にはレノとユキナの二人だけ。

対面に座り黙り込むレノにユキナは不安に駆られていた。

一度でも負傷した欠陥品は使えない。だからまた一党から追放されるのではないか

と。

「……追放？」

「へっ？ 何でユキナを追放しなきゃならないんだ？」

二人はお互いに首を傾げた。

ユキナは追放の話しかと思ひ話しを切り出したのだが、どうもレノは違うらしい。

なら依頼よりも大事な話とは何か。

赤い瞳でレノを見つめる。すると彼は意を決したのか、恥ずかしげに口を動かした。

「あのよ……俺はアンタの事を何も知らない。過去も今まで何処の一派に所属してたのかさえ。それに出自とかさ」

つまり彼は自分の事を知りたいから話しをしようとしている。

そう結論付けたユキナは、少しだけ考え込んだ。

まだ真つ白な彼に忌々しい過去の全部を話せない。

それにこうも思う。過去を知って仲間から同情の眼差しを向けられ哀れられるのは苦痛だと。

何よりも哀れまれる資格など無い。

「全部は話せないけど」

「それは、俺がまだ信頼足り得ないってことか？」

「そうじゃないけど……こういうのは段階を踏むのが大事？　って義母が言ってた」

「なるほど？　それじゃあ教えられる範囲で教えてくれ」

範囲を限定するなら教えられる。そう考えたユキナに、不意に不公平という言葉が過ぎる。

そういえば自分もレノに付いてまだ何も知らない。歩み寄ろうとしなかったからだ。

だから今まで失敗を重ねてきた。反省はするが中々実行に移せない現状に、ユキナは意を決する。

「ん。その代わりレノのことも教えて」

「お、おう。俺の事はなんでも教えるぞ」

ユキナは眼を閉じ、過去を振り返るようにぼつりと語り始めた。

兄にアスベル・テュラリアが居ること。

身寄りが居なかった二人はエデンで育てられたこと。

エデンの人体実験によって感情が湧かなくなり、何事にも無関心になったこと。

エデン壊滅後はテュラリア公爵家に養子として引き取られたことを。

酷く長く感じるような時間をかけてゆっくりとレノに話した。

彼はその都度エデンの行いに怒り、泣き、忙しなく表情を変えては静聴を続ける。

そして十一歳の頃に兄と冒険者になり、この地に来たのだと伝えると。

「……家族は優しいか？」

「うん。欠陥品でも受け入れてくれた優しい人たちだよ」

血に汚れた事実を誤魔化しながら伝えるユキナに、レノは察したような表情をしながら笑ってみせた。

「そっか。いい家族に恵まれて良かったじゃないか。それにテュラリア公爵家って事はユキナも一応貴族ってことか？」

社交会やテーブルマナーを初めとした教養は一通り学んだが、自分が貴族かと言われると分からない。

「……うーん？ その辺はよく分からない」

「ま、その辺は別に良いか」

「レノは貴族嫌いじゃないんだね」

「おう。そう言えばまだ話して無かったと思うが、俺の夢は冒険者として貴族に成り上がることだからな。そして悠々自適な生活を送る」

前々から楽しんで稼ぎたいと語っていた。

それに冒険者を目指す者の大半は貴族に成り上がる事を夢見てる者達が多い。

レノもその例に漏れないのだろう。

「じゃあ、前人未到の踏破と開拓村を發展させないと」

「だよなあ。その為には資金が必要なんだが、やっぱ一年は堅実にアスガルで名を売った方がいいか」

恐らく名も無き大陸の最南に位置するであろうアスガルを基点に何処へ向かうのか。

「何処の土地を開拓するかは決まってる？」

「北は【童の顎】が活動してるからなあ。それに俺の実力はその土地に踏み居るには足りない。なら西か東か」

行き先と今後の方針に悩むレノにユキナは何も言えなかった。

今までも行先を決めていたのは兄達だからだ。

こんな時、自主的に提案や助言ができれば一党としても上手くやっていける。

ただ、先の方針よりもユキナは彼の話しを聴きたいと思った。

自分の話しはある程度したが、彼はまだまだ多くを語ってはいない。

「方針は今後にね。今はレノのことが知りたい」

そう伝えるとレノの顔が赤くなった。

「お、おう。俺はイーリスのマルゼン領に在る小さな農村の孤児院出身だ」

「孤児院の生活は幸せだったの？」

「……当時の事を考えれば多分、恵まれたんだと思う」

懐かしむように語るレノに、ユキナの表情が僅かに柔らぐ。

何故かは明白だ。自分達の様な被害に遭つておらず、孤児院の生活を恵まれていたと語れる彼は幸せだったと感じたからだ。

「おつ。笑つた顔も可愛いな、もつと笑えれば良いのに」

言われてユキナは試しに口の両端を指先で上に引つ張る。

するとレノは口元を抑えて顔を背けてしまった。

きつと良くはなかったのだろう。

そしてアホ毛が萎れるのはきつと、自然に笑えない自分が不甲斐ないからだ。

「……笑えなくてもいいもん」

「あつ、もしかして気に触つたか?」

決してそんな事はないが、笑えない自分と笑つて欲しいと言うレノ。

彼の期待を裏切つてる事に申し訳なく思う。

「別に」

「あー、ならクエストに行くか?」

「ん」

頷くと依頼書を手を持ったルイがこちらに近寄り、

「丁度話しも終わつたようですね。……実はこんなクエストが来てるのですが如何でしょうか?」

そうやってルイが見せた依頼書は、アスガル海域の生態系調査だった。

海原のクエスト

風を受けた帆が船に推進力を与え、アスガル海域の水上を進む。

ユキナは潮風を肌で感じながら海面を注意深く観察していた。

船から離れた位置に見える大渦。それも一つや二つだけではなく列を作る様によくさん。

今回は報酬が良いとしてアスガル海域の生態系調査を請けたのだが、ユキナは大渦の動きを眼で追う。

「……………ぐるぐる」

アホ毛が左右に揺れ動き、隣からため息が聴こえる。

「ユキナ……俺は常々思うんだ」

ため息を吐いたかと思えば、レノが真剣な眼差しで語り出す。

彼が何を伝えたいのか分からないけどきつと大切な話し。そう考えたユキナは耳を傾けた。

「万が一海に落ちたら大変だろ？」

「スイー、バシヤバシヤって大丈夫だよ」

泳ぐ仕草を見せると、彼はそうじゃないと首を振る。

何が違うのかユキナは分かんず小首を傾げる。するとレノは拳を握り力説した。

「良いか！ 海と来れば水着だ！ 水着は衣服とは違って濡れてもいい装備だ。万が一海に落ちれば衣服なんかあつという間に水を吸って重くなるだろ。剣も有ればなおさらな」

レノの言葉に自身の装いに眼を向ける。

ブラウスとスカートで何の変哲も無い身軽な服装。

そしてレノと船員に視線を向ける。

彼らも同様に身軽な装いで誰一人として水着など着てはいない。

それにとり思う。レノは背中とはいえ露出された肌を見て鼻血を噴射させて気絶した事は記憶に新しい。だから彼の前で肌の露出は危険かもしれない。

そんな事を思いつつユキナは僅かに悩む。自分は口が上手い方ではない。むしろ下手な方だ。

レノの名譽を傷付けず、なおかつ水着を回避する方法として敢えて船員たちの装いを指摘した。

「誰も水着着てないよ？」

「彼らは海に於けるプロだ。万が一海に落ちたとしても魔法の衝撃で戻って来られる」

「……いざとなったら走るけど」

「走る？　一応聞くけど何処を？」

訝しむレノにユキナは手振りを交えて説明する。

「海面を……シユツと行つてシユババツて」

「……なあ、こればかりは聞かせてくれ。水面歩行つて冒険者にとつて普通なのか？」

「ん。ルイも支部長もできるよ。あと——」

指を折りながら水面歩行ができる人物を思い起こすと。

「分かつたからもう良い。……つてかあの受付嬢は何者なんだ？　あの時は強者特有の

風格を醸し出してたが」

ルイが何者なのか。水着から彼女の話題に移つた事に安堵の息が漏れる。

同時に自身を知るルイを思い浮かべた。

彼女は元王宮近衛兵でセドルス家の次女。

そして兄のアスベルと許嫁で自分にとつても大切な友人だ。

彼女の素性に付いて思い浮かべたユキナは、首を左右に振る。

「ルイから聴いた方がいい」

「まあ、流石に個人情報だしな。つてか、俺はいつまで新米呼びなんだ？」

オーガを単独討伐したレノは未だルイから新米呼びされていた。

ルイの対応にレノは少なくない不満を感じている。

それは理解できるが、自分から呼び方を変えるように提案したところでルイは変えな
いだろう。

何せ彼女は認めた者しか名を呼ばない。加えてアスガルのギルドの新米はレノ一人
だけ。

「新しく新米が入ったら名前前で呼んでくれるかも」

「だと良いけどな。なんか舐められてる気がするんだよ」

「うん」

「うんって……そこは否定しないのかよ!？」

実際にルイはレノを舐めている。単に実力と経験不足からだどユキナは考えたが、ル
イの考えを知っている訳ではない為、何とも言えないのが現状だ。

「二人とも話しをするのもいいが、しつかり観察頼むぜ?」

見兼ねた船員の言葉にユキナはレノから海面に視線を移す。

穏やかな海面、魔物も魚の姿も無い。

相変わらず大渦が奏でる音が響くが、海特有の生物の姿は未だ見えない。

「二人とも何か発見したか?」

一人の船員に声をかけられ、ユキナは左右に首を振る。

「海面には何も居なくて退屈なんだが？」

「普段なら魔物が魚を追い立て、カモメ共がそいつを狙うんだけどな。今日は奇妙なくらい静かだな」

船員の言葉にユキナとレノは海面に視線を落とした。

普段よりも不気味な程に静かな海。そういえば、とユキナは気が付く。

港を出港してから一度もカモメをはじめとした海鳥を見ていないと。

「……一度も海鳥見てない」

「何か新種でも現れたか？ いや、ここいらの海域の生態系が変わるとは考え難いが」

「それは何でだ？」

「イーリスの港町——ニルセンとアスガルを結ぶ航路はな大量の大渦の影響で一本道なんだ。しかも望遠鏡で覗くと分かるが、海は見渡す限りの大渦だらけだ」

船員の説明にレノは考え込んだ。

やがて一つ結論を導き出したのか、口を動かした。

「つまり本来この航路に生息する魔物や魚類以外は外部から侵入できないってことか。それじゃあ生態系に影響……って、魔物と魚類が全部大渦に呑み込まれたんじゃないのか？」

「いや、魚や海の魔物つてのは潮の流れに敏感だな。常に大渦に呑まれないように泳い

でんだ。少なくとも十年の観察ではそうだな」

少なくとも船上から見た海面では分からないことが多い。

そう判断したユキナはレノに一つ提案を試みる。

「……潜ってみる？」

「素潜りか。確かに海中を探るには打って付けだな。……てか水着は有るのか？」

「無い」

「なら魔法で空気の膜でも作って潜ってみるか」

「そんな事ができるの？」

「おう。防御魔法とか術の対象者を包み込むだろ？ あれと同じ用量でできるんだよ」

得意気に語るレノにユキナのアホ毛が左右に激しく揺れ動く。

空気の膜に包まれながら海中の探索。

泳ぐのとは違った光景が見られそうで期待に胸が膨らむ。

同時に一つ疑問が湧く。そんな魔法が使えるなら水着をすすめる理由は何だったのかと。

疑問を解消すべく口を開いたところで船員の言葉が遮った。

「……なんか得意げに語っているとこ悪いが、呼吸の指輪と水避けの指輪を装備すれば水中でも呼吸可能で服が濡れることも無いぞ」

「魔法道具なんて高くて持ってねえんだよ！」

「……空気の膜、ちよつと楽しみだった」

「ま、こんな時のために二人分の指輪は用意してある。貸してやるからちやんと返せよ？」

そう言つて船員は二人分の指輪をレノに手渡す。

水色の水晶が嵌め込まれた指輪と緑色の水晶が嵌め込まれた指輪がレノの掌で光を放つ。

「……扱いに魔力は必要？」

「指に付けるだけで水晶の魔法が、水晶に込められた魔力を勝手に使つて術を発動してくれる」

船員の優しい説明にユキナは密かに安心した。

もしも魔力が必要になれば自分にはどうすることもできないからだ。

最悪、衣服のまま海に潜る他になかった。

ユキナは早速レノから二つの指輪受け取り指に付ける。

すると水晶が魔法を放ち、不思議な感覚何ユキナを包み込んだ。

そして彼女は剣を片手に甲板から海に躊躇なく飛び込む。

「ちよつ!? ユキナなあアア!?!」

レノの驚愕の声を背中に、ユキナは早速海に潜り始めたのだった。

海底に棲まう化物

太陽の光が照らし、船の影が差す海中。

ユキナは辺りを見渡した。

磯岩と潮の流れが有るばかりで肝心の生物の姿形が見えない。

生物の死骸さえも見当たらない様子にユキナは小首を傾げる。

そして彼女は大きく水中で息を吸い込んだ。

水中で呼吸。なんとも不思議な感覚にユキナのアホ毛が楽しげに揺れる。

不思議な感覚といえれば水避けの指輪の効果もそうだ。

海中に居て衣服が濡れないが、しっかりと身体には水圧と水の抵抗を感じるなんとも不思議な感覚がユキナの全身を包む。

ユキナは試しに剣を引き抜く。

一振り、二振りと軽く振り回し、しっかりと水の抵抗と重みで剣速は愚か身体の鈍い動きに息が漏れる。

地上と違って俊足に動けない。ここは人にとって過酷な水中だと頭の中に認識を叩き込む。

そうしてる間にユキナの背後にレノが近寄る。

「こら！ 一人で勝手に突っ込むじゃない！」

少々ご立腹な様子だ。

「ごめん……でも周りに何も居ないよ」

「……変だな。普通魚一匹ぐらいは居るだろう？ そういえば今朝は普通に水揚げされ

てたんだよな」

「それなら魚は居るはず？」

しかし何度も周囲を見渡せども魚の姿は見えない。

「……深く潜ってみる」

「そうだな。……雷と炎は使えないか」

海中で雷魔法を使用しようものなら術者ごと感電してしまうだろう。

幾ら水避けの指輪を付けているとはいえ、危険な試みは避けたいところだ。

「うん。ビリビリで危険」

「自滅は笑えないからなあ。ま、今は生物の発見が最優先だな」

二人は早速海底に向かって潜り始める。

磯と海藻が波に揺れる様子を観察しながら海底に進む。

しばらく潜り、日の光が薄れた海底で二人は思わず動きを止めた。

海底の底に金色の光を放つ二つの瞳が見える。

そして口の様な穴から浮上する生物の骨にレノは眉を顰める。大小様々な生物の骨。しかし、鯨程の大ききの骸まで浮かぶ。

「……やべえかもな」

「ん」

嫌な汗が二人の額から流れる。

そして二人は同時に下を見た。

よく見れば口の様な穴には、鋭く鋭利な牙が生え並んでいた。

金色の光を発する瞳は爬虫類特有の縦線が入った瞳だ。

明らかに魔物の類いだ。それも巨大なサイズの魔物が海底に居る。

魔物はユキナとレノを凝視すると巨大な腕の様な物を伸ばす。

人の様な5本の指先と鋭利な爪が二人の足元まで迫る。

ユキナとレノは同時に上昇するように泳ぎ始めた。

追い掛ける2本の腕の様な物が迫る。

「海に人の腕の様なもんを持つ魔物なんて聞いたことねえぞ!」

ユキナはこれまで三頭首の犬や竜とは遭遇したことが有るが、海底に潜む魔物とははじめてだった。

何よりも心の底から溢れる恐怖に、アレと戦おうなど戦意すら湧かない始末。

「……あんなのはじめて。怖い」

二人は迫る腕から難を逃れ、海底に顔を向けた。

すると魔物は両腕を動かしていた。

それはまるで人が水中で海面に向けて浮き上がるように。

海底から浮かび上がる魔物の姿に二人は驚愕のあまり動きを止めてしまう。

そして同時に海底に潜む魔物の全容が視界に映り込んだ。

人と同じ体格と骨格。違いがあるとすればそれは巨大で何もかもが遥かに太い。

更に身体の全身を鋭い棘が覆っていた。

「……なにこれ？」

「巨人か？」

訳の分からない魔物に、二人は船を直指して泳ぐ。

幸い巨体なせいか、魔物の動きは酷く鈍重だ。

これなら逃げ切れる。そうユキナが考えた瞬間。

二人の間を光の柱が駆け抜けた。

恐る恐る魔物に目を向ければ、口元から煙りを吐き出している姿が映り込む。

何らかの魔法を攻撃手段として放ったが、幸いな事にはずれた。

巨大な魔物が与える衝撃と恐怖がユキナとレノの心の底から溢れる。

故に二人は全力で船に向かって泳いだ。

そして錨を足場に船に乗り込むや否や。

「急いで船を出してくれ！」

レノの叫びに船員たちが訝しむ。

「……大きい魔物がピカッ！　って何かを放った」

「ピカッ！　まさか海中から突然発生した光の柱か？」

「うん」

ユキナが頷くと。海面が激しく揺れ出す。

船体の右側面の海面から伸ばされた腕に船長が叫ぶ。

「錨を上げ帆を張れえええ!!」

焦りと恐怖を滲ませた船長の指示に、船員は大慌てで動き出す。

総出で錨を引き上げ帆を張り、帆に風属性の魔法を放つことで促進力を与える。

受けた風によつて海面を移動する船の後方を巨大な魔物の頭部が見つけていた。

「あんなの魔物知らないぞ!？」

「新種か!!」

「二人は詳しい話しを頼む」

浮き足立つ船員の声に二人はただ頷き、極度の疲労と精神的負担の影響で甲板に座り込むのだった。

二人は一先ず借りた指輪を返却し、見た物を全てを話した。

二人の話しに驚く船員、そして報告を聞き付けた生物調査学と冒険者ギルドは魔物に対して緊急クエストを発令。

こうしてアスガルの海域で発見された謎の巨大魔物に対し討伐隊を編成されたのだが、既に魔物の姿は何処にも無かったという。

奴は何処から来たのか、何処を寝床にしているのかさえ詳細は明らかにならず。

奴の目撃された地点の海底付近では奴が捕食したと思われる多種多様の骨が発見され、食い散らかされた礫岩も発見された事から選り好みしない食性ということだけが判明したのだった。

その暴食のような食性からグラトニーと命令されることとなった。

領主は頭を抱える

書類の山が積み重なった机を前にして男は深く肩を落とす。

体格に恵まれた赤茶髪の男——ラウム・アスガルはメイドが監視する眼差しに渋々と椅子に座る。

そして一枚目の書類を手に取り、内容に眉を深めた。

「今週の漁業収穫……海の魚がゼロとは、グラトニーの脅威は凄いな」

領主としてこれも頭の痛い話だった。

アスガル海域から魚と魔物が姿を消した影響により、領主として漁師に対する生活の補填をするのは当然ことだが、魚が戻るまでの間は生活の面倒を見なければならぬ。

補填の資金は私財から紛うため別段問題は無いが、アスガル領内の食糧事情を支える一翼が崩れた影響があまりにも大きい。

加えて討伐部隊を差し向けたが、グラトニーは姿を消してしまふ始末。

今後グラトニーの脅威に怯え続けるぐらいなら討伐戦力を充実させるべきだ。

しかし姿を消したグラトニーよりも目先の問題を解決することもラウムにとっては優先すべき事柄だった。

「……しばらくはイルミナ領から食糧を買付なければな。おい！」

ラウムは壁際に佇むメイドに声をかける。

「さっそく行商人に発注して参ります」

「話しが速くて助かる」

メイドは直ぐにドアノブに手をかけると。

「旦那様、くれぐれもサボらないように」

鋭い目付きで忠告してから退出した。

彼女は有能だが、真面目過ぎるとラウムは息を吐く。

何より公務をサボって町で遊び歩けないのは痛手だ。

「……いや、彼女が気を張り詰めるのはエデン絡みだったな」

彼女もエデンの犠牲者だ。だから必要以上に肩を張り張り詰めているのも理解が及ぶ。

しかしエデンの残党たるアデユクを捕らえて以降、残党に動きが無いのが不可解だった。

騎士団が残党のアジトを二つほど潰した影響ももちろん有る。

だが、冒険者時代から培われた経験が油断するなど警鐘を鳴らす。

「警戒はより厳重にした方が良さそうだ。それにゴリス支部長が本部に居るウチに戦力

増強を打診する必要が有るな」

スライム事件と幽霊騒動では完全にこちらが後手に回った結果となった。

連中の動きに対応する為には冒険者と騎士の連携も必要だ。

さて、如何したものかとラウムは思案する。

先ず考慮すべきはユキナの件だろう。

事件を解決しアデユクを捕らえたのもユキナとレノの二人。

特にユキナは欠陥品ゆえに嫌われ易い。そんな彼女の所属一党だけを屋敷に招待でもすれば要らない軋轢を生むかもしれない。

そもそも一党追放から出戻りのユキナに対するギルド本部の評価も厳しい中、幽霊騒動解決時に発生したクエストを請たのは他の一党に他ならない。

大掛かりなパーティー開催は懐に招かざる客を呼び込む恐れもある。

ふと一つ案が浮かぶ。それは単純明快で何も悩む必要もない答えだった。

「ふむ。最初は事件解決に導いた冒険者一党を屋敷に招く考えだったが、どうせなら冒険者全員にするか」

ラウムはユキナの素性と過去を知った上で、パーティーの計画を公務の傍ら練るのだった。

間章

受付嬢

はい、いらつしやいませ。クエスト依頼でしょうか？ それとも冒険者登録でしょうか？

えつ、そのどれでもないよ。

食事でしたら左手奥の酒場になりますよ。

それも違うと？ では御用件は何でしょうか？ ゴリス支部長なら生憎と不在でしてね。

えつ？ 新聞記者の方？ 私を取材しに来たと。

なるほど、美人と名高く理知的な私に取材ですか。

なに？ そこまでは言っていない。……軽い冗談ですよ。それで取材とは？ 守秘義

務も有りますので答えられる範囲でなら答えましょう。

ふむふむ、二ヶ月前に「竜の顎」を追放された冒険者に付いて是非とも受付嬢視点の取材が欲しいと。

なるほど。正直に言えば意外でしたね、えつ？ 北方のギルドじゃあ当然の結果と言

われてるんです？ まあ、そのような評価も無理無いは思いますが。

ああ、意外に感じたところについてですね。あの子の兄は非常に妹を溺愛してましてね。もう顔を合わせる度に妹自慢と勝ち誇った顔を向けて来ましたよ。

じゃあ何で追放されたのか？ さあ？ 何か想う所があったのでしょうか。妹のことを常に考えてますから、あの馬鹿とあの二人は。

えっ？ 巷では欠陥品だから追放された？ ……へえ。

おつと何を怯えてるんです？ こんな美人の笑顔を見て怯えるだなんて失礼ですよ、もう！

…：…まあ、確かにあの子は魔力が一切使えずギルドが定めた総合評価もF―判定です。

最低も最低ですが戦闘能力だけは一級品ですよ。あの子、実は結構凄いです。それらもう大抵の魔物なら瞬殺も瞬殺。

あれは四年前ですかね。あの子たちがまだ新米だった頃、あの子は単独で十頭のオーガを真正面から瞬殺したんですよ。

流石に大袈裟？ 実は当時ギルドでもあの子は冒険者としてやって行けるのか非常に疑問視されてたんですよ。

そこで急遽、どれだけ魔物に対する実力を発揮できるのかという試験が与えられまし

てね。

その時、担当官だったのが私とゴリラ——ゴリス支部長だったんですよ。

オーガはアスガル領内では上位の強さと謳われてますが、他の領内ではそこそこの程度。ですが剛体に覆われた筋肉は並の攻撃や魔法は寄せ付けません。

あの子は一体どうやって倒したと思います？　なに、想像もできない？

あの子が四年も生きてることが証拠の一つでも有りますが……あの子はオーガの脆い部分を見極め、的確に斬り刻んだんですよ。

魔力を一切操作できないあの子がですよ。他の冒険者に同じ事をやれと言えば、みんな首を左右に振るんです。

当時のことは支部長にも確認してみると良いですよ。彼は嘘も誇張もしませんから。

俄には信じられない？　まあ、あの子は自分の事を喧伝したり話すこともましてや力を自慢することも無いですからね。

謙虚？　いえあの子は他人の評価にも自分自身にも無関心なだけです。

それにクエストの受諾も依頼主との問答も全て「竜の顎」が引き受けてましたから。それにあの子の実力は彼らの前では霞ますから仕方ないのです。

じゃああの子はいまどうしてるの？　そりゃあ新米くんとクエストに行つてますよ。

欠陥品と一党を組む物好きが居る？ 貴女は先から随分と失礼な人ですね。まあ良いです。

確かに最初は、というか町に帰って来た一ヶ月は組んでは追放の繰り返しでしたね。組んだ一党はこう言うのです。魔物の斬殺劇に精神が磨り減る。彼女と合わせられる自信が無い。無関心で無表情で何を考えているのか分からない。

そして貴女のように欠陥品と罵って一党から追放するケースも多々有りますね。

あの子はアスガルに滞在中の全冒険者一党、十組みと一党を組んだ事になります。

えっ？ 傷だらけの経歴？ まあ、そうとも言えなくはないですね。

あ、そういうしてる内に帰って来ましたよ。って、あの子に取材しないんですかあつ

!?

あらあら、あんなに急いで。全く、過去に縛られた者は難儀ですね。いえ、それが悪いとは言いませんけど。

……暗い瞳にあの子はどう映ってるのでしょうかね？

第五章 貴族の屋敷に招かれて

黒竜と竜の顎

北方の大地に黒竜の咆哮が轟く。

マザーウィルが生息する山脈から近い位置に有った村は焼かれ、人々の死骸が黒竜の脚元に転がる。

焼かれた肉の芳ばしい匂い、燃え盛る木々の匂いが漂う中、三人の人の匂いが混じる。

黒竜は呻り、視線を向けた。

「……村人は全滅。この竜は一体どこから来たと思う？」

「山脈の向こう側じゃねえか？ それとももうちよい西か海を越えた先か」

「……お二人共、考察は後程にして今は竜退治が先決でしょ」

リテイアの咎めの言葉に、アスベルとリドが同時に弾けるように駆ける。

左右から同時に剣を構え立ち向かう二人に、リテイアが支援魔法を唱える。

向上する身体能力と筋力、そして防御陣が二人に展開された。

支援を受けたアスベルが黒竜の右側面から一振り、左側面からリドが魔法を付与した

大剣を力強く一振り。

同時に向けられた刃を黒竜は前脚の爪で掴む。

刃に鋭利な爪が食い込み、鋼鉄が悲鳴をあげる。

更に黒竜は翼を広げ顎を開く。

口内に魔力が集う。それは正に竜種が得意とするブレスの合図だ。

一度竜がブレスを放てば、射線上に有るものは全て不条理な破壊に飲まれる。

だが、黒竜に対してアスベルは鋭い笑みを浮かべる。

両前脚を防御行動に使い、魔力を溜めている黒竜は無防備だ。

「降り注ぐ氷槍はいかが？ おまけに爆雷もどうぞー！」

リティアの言葉を合図に二つの魔法が黒竜の背中と翼に降り注ぐ。

翼を貫く氷槍、背中に迸る爆雷に黒竜は溜めた魔力を拡散させてしまう。

そこにリドが追撃を入れる。

「魔法剣士は剣以外も得意なんだぜ？」

大剣を握った右手をそのままに、リドは魔力を込めた左拳で黒竜の顎を穿つ。

顎に走る重い一撃にいよいよ黒竜は体制を崩す。

そこにアスベルが止めの一撃を放たんと魔力を操作する。黒竜が掴んだ刃から魔力

が滲み、徐々に魔力が竜の顎を形造る。

「竜の顎に喰われろ！」

アスベルの詠唱に竜の顎が黒竜の首に喰らい付く。

鋼よりも遙かに強固な鱗を竜の顎が噛み砕き、そのまま黒竜の首を喰い千切る。空に舞う血飛沫が大地に降り注ぐ中、アスベルは深くため息を吐く。

ユキナが居ればあと二手は速められた、と。

そしてアスベルは不毛な大地となった村に視線を一周させる。

「もつと速く気付いていれば」

黒竜は討伐したが、村人を誰一人助けるとは叶わなかった。

「……冒険者一党が出払ったタイミングで村の襲撃だからなあ」

「……そういえば、此処はユキナと訪れた最後の村でしたね」

一党として最後に彼女と訪れた思い出の土地。

いつまでも残っていると信じて疑わなかった村は、あつさりと滅んだ。

それは魔物が蔓延る以上、当たり前のことだった。

責めて村に魔障壁をと思うが、弱肉強食に於いて頂点に君臨する竜が相手では魔障壁も数刻と保たないだろう。

アスベルは思い出と不条理にやらせない想いに眉を寄せながら、空を見上げた。

ユキナがよく眺めていた砕けた天体——【楽園】に息が漏れる。

エデンの残党がアスガルで捕縛されたという話題は記憶に新しい。

組織は十年前に壊滅し、ユキナが解放されたのはその二年後。

だからこそアスベルは遠い地の彼女に想う。

忌わしい過去と罪の意識がユキナを蝕む。

エデンはまたユキナの前に姿を現すだろう。

しかしあの町には許嫁の彼女が……エデンさえも恐れる彼女が居る。一先ずユキナ
のことは彼女に任せていれば安心だろうとアスベルはため息を吐く。

責めて兄として自ら駆け付けたい所だが、追放した身として今更ユキナの前に姿を現すのも躊躇われる。

それに時期が悪い。梅雨から夏にかけて北部の魔物は活動を活性化させる。

今はアルドラに滞在する冒険者一党が魔物に対して備える時期だ。

「そろそろギルドに帰還するか。……ルイに手紙も送らなきゃなあ」

「ユキナに付いてだろ？ そろそろ愛想尽かされるんじゃないかねえか」

「許嫁の殿方が手紙を送ってきたと思えば、話題は妹の事ばかり。……まあお二人に限って仲が拗れることは無いでしょうけど、アスベルはもつと女心に理解をですな」

アスベルにとってリティアの小言は耳が痛む。

彼女との共通の話題がユキナだけでは、流星に拙いことも本人は重々理解してるからこそ彼女の言葉は酷く胸に刺さる。

「……善処はするよ。けど、食事に誘いたくても彼女はアスガルから動けないからね。いつか僕の方から行ければ良いんだけど、今はね」

「黒竜襲来、次は村の復興と住む住人の呼び込み。魔物の抑制と調査、俺達が現在手がけている村の開発つとやる事は多いよな」

アスベル達は今後のやるべき事に頭を悩ませながらギルドに帰るのだった。

冒険者宛ての招待状

グラトニー発見から速くも一ヶ月が経ち、梅雨のうんざりとした湿度がアスガルを包み込む。

陰鬱な空気を吹っ飛ばすべく冒険者は今日もギルドで酒を呷り、冒険譚に花を咲かせる。

そんな中、レノは干しイカにため息を吐く。

どうしたのかと、ラザニアを食べる手を止めたユキナは聞く。

「どうしたの？」

「いや、グラトニーが魚どころか魔物も食い荒らしただろ？　今は海の魚の干物は食べられるが、こいつもそろそろ在庫切れになるんだとさ」

先日発見されたグラトニーの影響は間違いなくアスガルの漁業に経済的打撃を与えていた。

まだ川魚が採れるとはいえ、近隣の村や他領から買付に来る行商人から得られる収益を考えれば損失は逃れられない。

今のアスガル海域には魚どころか魔物も居ない。原因は明白だ、全てグラトニーに食

われてしまったからだ。

少なくとも稚魚が成長し、産卵と繁殖を繰り返すまではしばらく海の幸を食べるのは難しいだろう。

「……食べ納め」

「当たり前に見える物がいざ食べられなくなると寂しいよな」

レノの言葉にユキナのアホ毛が萎れる。

シーフードパスタやシーフードを使ったラザニアにグラタンもしばらく食べられなくなる。それは彼女にとっても寂しいものが有った。

それでもユキナは食べる手を再開させ、ラザニアの濃厚なチーズとホワイトソースに舌鼓を打つ。その度にアホ毛が嬉しそうに左右に揺れ動く。

「……そういや、アンタはよくラザニアにホワイトソースを注文するが、トマト嫌いなのか?」

レノの疑問にユキナは食べる手を止める。

脳裏に蘇る記憶。

テュラリア公爵家に引き取られて間もない頃、遙か遠くの土地から訪れた旅の商人から義父のヒューバートがトマトを購入した事が有った。

何でもその旅の商人の故郷では煮込んだトマト料理が絶品との評判を聴いたからだ。

そしてレシピを教えられたビュールバートは、使用人に頼んでトマトスープを調理させた。

結果、出て来たのはピューター食器に盛られたトマトスープ。

それをユキナは兄と義父と義母と一緒に食べ、そして倒れた。

四人に襲い掛かる鉛中毒。それ以降ユキナはトマト嫌いになったのだ。

「……毒は好んで食べない」

「あー、古い文献にトマト料理にピューター食器を使うとトマトの酸味で鉛が露出されるとかで、鉛中毒を引き起こすらしいな」

そもそもレノの言うトマトに関する記録を記した文献は、比較的最近になって発見された物だ。

当時のユキナ達を知る術は無く、あの時もつと早く遺跡から文献が見付かればと兄と一緒に後悔したのも記憶に新しい。

「ん、後から知ったけど。それとは別に青臭と酸味が……」

好き嫌いはダメだと理解しながら、どうしてもトマト相手には食指が動かない。

「ま、好き嫌いは誰にだって有るよな」

「レノは嫌い物あるの？」

「エスカルゴとか虫料理は無理だ」

げんなりと肩を落とすレノに、ユキナは同意を示した。

「……分かる」

会話を交えながら食事を終えた二人は、早速クエストを選ぶべくボードに足を運ぶのだが、

「あつ！ お二人に招待状が届いてますよ」

そう言つて赤毛の受付嬢がレノに二人分の招待状を手渡した。

周りに眼を向ければ、ギルド職員一人一人が冒険者に招待状を配り歩いている事が分かる。

招待状の封蝋に描かれた家紋。それはユキナに見覚えの有るものだった。

「……アスガル伯爵の家紋」

「この船の家紋がか？」

「ん。アスガル伯爵は船旅でこの大陸を発見した冒険者だから」

「なるほど」

ユキナの説明に納得したレノは封を切った。

封の中から羊皮紙を取り出し、それを読み上げた。

『幽霊騒動の折、解決に多大な貢献を為さつた冒険者諸君。此度の褒美に關してまず、遅れた事を謝罪させて欲しい。』

謝罪と貴殿、貴女らを労うため我が屋敷のパーティーに是非とも招待したい。

日時は一週間後の夕方、是非ともドレスコードでの来場を』

レノはユキナに眼を向け、

「なあ！ 褒美のためにパーティーに招待するのは分かるが、ドレスコードってなんだ!?!」

「ん。パーティーの正装」

「……普通金の無い冒険者に求めるか?」

そういえば、とユキナは小首を傾げた。

テュラリア公爵家が冒険者を招いたパーティーでは、各々自由な服装で来場していた。

義父が格式と堅苦しいパーティーよりも近い位置で和気藹々と交流する方を好んでいた影響も有る。

しかしパーティーを取り仕切るアスガル伯爵が服装を指定してるからには、招かれた側は応じなければならない。

騒つく声が耳にちらほらと聞こえ始める。

「なに? 謝礼パーティーに大枚叩いて参加すんのか?」

「舐めてんのか! 俺達がそんな大金持つてるわけねえだろおっ!」

「そうだあ！　そうだあ！　普段酒と食事と娯楽と風俗で消える報酬だぞ！」
ドレスコードに戸惑う者、怒りを顕にする冒険者にユキナは、受付の奥から姿を現したルイに視線を向ける。

騒ぎ立てる彼らに呆れを隠さず彼女は声を張り上げた。

「みなさん、落ち着いてください！　ドレスコードはアスガル伯爵の使用人が無料で立てる手筈になっていますので！」

ルイの一声に騒ぎ立てた冒険者の動きが一瞬で止まった。

そして彼らは満面の笑顔を浮かべ、

「「なんだあ！　それを早く言えよ！」」

声を出して高らかに笑い出した。

そんな彼らの様子にレノがユキナに耳打ちする。

「いいか？　あれが手の平返しだ」

「ん。よく見る光景」

ユキナの一言に冒険者は気まずそうに視線を逸らすのだった。

かくして冒険者一同はアスガル伯爵主催のパーティーに招待されたのだ。

平原を駆ける一角獣

平原に降る小雨に打たれながらユキナとレノは、大地を駆ける。

二人の前方に一角獣が地面の水溜りを跳ねらせ、平原を疾走していた。

平原を疾走する一角獣にいち早く追い付いたユキナが剣を振り抜く。

一角獣の胴に斬撃が走り、血が刃に吸血される。

一角獣は斬られた痛みと鼻息を荒げ、全身の毛皮に雷を迸らせた。

「レノ、跳んで」

ユキナの静かな合図にレノは地を蹴って跳んだ。

やや遅れて一角獣から距離を取ったユキナも地を足場に宙に跳ぶ。

同時に一角獣が毛皮に帯電させた雷を解き放つ。

雨に濡れた大地と草、水溜りに走る放電が水分を蒸発させ水蒸気を生み出す。

視界が水蒸気に覆われる中、レノの火球が一角獣に飛ぶ。

獣の悲鳴と肉が焼かれる臭いが辺りに充満した。

「つとー、このまま一気にやるぞー」

地面に着地したレノが、地を弾けながら一角獣の首に拳を叩き込む。

骨が折れる音が平原に響く。

首の骨が折れようと一角獣は倒れず、今度は角の先端に魔力を集め、魔力の閃光を空に解き放った。

空から降り注ぐ閃光をユキナは駆けながら避ける。

閃光の着弾により平原に爆風が襲うが、既にユキナは一角獣との間合いを詰め終えていた。

空を斬り裂く一閃が一角獣の首筋に走る。

一角獣の首が平原に転がり、血飛沫が小雨に混ざりながら平原に降り注いだ。

剣に付着した血は、吸血によって剣身に染み込む。

剣が血を吸う光景にユキナは未だ馴れず、返り血を浴びたアホ毛が力無く揺れる。

「……馴れない」

「そりゃあなあ。俺だって馴れないさ……しかし、連携に改善点があるな」

「うん。レノの魔法攻撃と同時に斬ればよかった」

「あー、そこは俺もユキナを見失ったからなあ」

突然の水蒸気に視界を遮断された影響は、思いの外大きい。

幾ら直前に位置を把握していたところで、全方位の視界が覆われてしまえば方向感覚に支障が出る。

幸いレノが一角獣が視認できる位置に居たからこそ、魔法を叩き込む事ができた。

だが、ユキナは斬り付けた一角獣の近場に居たため、魔物の魔法範囲から流れるために距離を取っていた。

「距離を空け過ぎた。あと間合いを剣一本分詰めてたら速く終わってた」

ユキナは自身の反省点を挙げ、レノが肩を竦める。

「ま、俺もリーダーとしてもうちよい全体を見通さないとな」

今のままでは北方にも生息する魔物に対応できない。

幾らオーガを討伐できたところで、山岳を超えた先から魔物の生態系も著しく変わる。

西か東の開拓へ向かおうにも、先ずは山岳を越えなければならない。

そのため二人はこうして連携の基礎を見直していた。

小雨に打たれ続け、身体が冷えたユキナは小さくくしゃみ。

「おっと、流石に雨に濡れたままじゃあ風邪引くな」

そういえば、今日一日は各部屋のシャワーが使えないと注意書きが有ったことを思い出す。

「ん。今日は宿屋の保温魔法の点検日」

「……つまり公衆浴場に行くのか？」

「うん。広くてポカポカするから」

「……なら、俺も行くかな」

何故か視線を彷徨わせるレノにユキナは小首を傾げる。

如何して視線が彷徨うの？ そう聞こうとしたが、レノは急足で歩き出したため、ユ

キナは聞くことを辞めた。

彼の表情が怪しげな笑みを浮かべ鼻息を荒くしていたからだ。

憩いの公衆浴場

依頼主に一角獣の討伐報告を伝え、ギルドに戻り受付に完了報告を伝える。

報酬を山分けした二人は、さっそくそのままの足で公衆浴場に向かった。

レノと別れたユキナは番頭に銅貨二枚を払い、剣を預けてから脱衣所に入る。

ユキナが足を踏み入れると、クエストを終え汗を流しに来た女性冒険者たちが一斉に此方に視線を向けた。

脱ぎかけの者。今から脱ぎ始めようと上着に手を掛ける者。鎧の着脱に苦戦する者。彼女たちの動きはユキナが現れたことで止まった。

「ちっ」

「「こらこら、人の顔を見るなり舌打ちするんじゃない」

「ユキナもクエスト終わりに？」

舌打ちする目付きが恐い女性冒険者とそんな彼女を咎める冒険者。

そして質問する女性冒険者にユキナは頷く。

「うん」

他にも女性冒険者は居るが、ユキナを見た途端に彼女らの纏う空気は一変した。

それは戸惑いだった。

ふらりと現れ、相変わらず無表情を浮かべるユキナにどう反応していいか分からず戸惑う者。

そして嘲笑う者も少なからず居る。

困惑と侮蔑混じりの視線に当人は特に気にした様子も無く手早く衣類を脱ぐ。

そしてタオルを巻こうとしたその時だった。

「うそ……想像よりも肌が綺麗っ」

「いや、まだだ！ 胸の大きさはじゃああたしの方が遥かに圧勝だ！」

胸を主張する女性冒険者にユキナは目もくれずタオルを巻く。

そしてユキナはそのまま浴場に向かう。

さっそく備え付けのシャワーで丁寧に身体を洗い流し、長い髪をこれまた丁寧に念入りに洗い流す。

身体の汗と汚れを流したところでユキナは、長い白髪を団子に纏める。

楽しげに談笑する彼女たちから離れた位置に向かう。

自分が彼女達に近付いてはきつと不快な想いをさせる。単に同性同士の身体の触りが苦手というのも有るが。

十分距離を取った所で浴場に浸かろうと足をのぼすと偶然ソレが視界に入る。

木造の壁に開けられた小さな穴。丁度人の瞳ぐらいの穴に。

「……壁に穴が有る」

そういえば、壁の向こう側は丁度男湯だったとユキナは思い出す。

タオルを巻いてるため恥部は決して見れないが、他の女性はタオルを巻いて居ない者も居る。

しかも丁度穴の位置からは入浴中の女性、シャワー中の女性が一望できる。

紛れもない覗き穴だと理解したユキナは右手の二本の指を突き立てる。

そのまま彼女は右手を引き、

「てやー!」

穴に鋭く指を突き刺すと。

「ぐわあああ!?! めが、目がああアア!!」

誰かの泣き叫ぶ声に、女性達が一斉に壁の穴に気がつく。

「……えつ、まさか今の声って」

「うそっ!!? 覗き!!」

次第に騒つく女性冒険者はユキナを抱き寄せ、

「ユキナはこっちに!」

「いくら欠陥品でも覗きに遭うのは見過ごせねえ!」

男勝りな女性冒険者の言葉に他の冒険者が一斉に身体から魔力を滲ませる。

既に彼女たちは臨戦態勢で、壁越しからあわてふためく男達の声が響く。

「覗きはダメだけど……壁は壊しちゃダメ」

怒り心頭中の女性陣に眩くと、彼女らは同時に言った。

「「もちろん！」」

その後、怒り狂った女性冒険者たちの手により覗き犯はアスガル警備署に突き出されることに。

なお、捕まったのは大半が男性冒険者でその中にレノの姿も有ったという。

悪い事をして捕まるのは無理もない。ユキナはそう思いながら静かになつた浴場でゆつくりと身体を温めるのだった。

地下牢の中で冒険者たちは騒ぐ

普段殆ど人が居ない地下牢は冒険者たちの談笑で賑わっていた。

地下牢が賑わうなど前代未聞だが、聴こえるのは冒険譚ばかり。

そんな地下牢に収監されたレノは膝を抱え途方に暮れていた。

その場の雰囲気と煩惱と欲望に負け、レノは同志と行動に出た。

しかしそれがいけなかった。花園で寛ぐ女性を激怒させ今に至る。

冷静に考えればあの時の自分はどうかしていた。

煩惱を祓うべく眼を瞑ると乳白色の肌を石鹼で擦るユキナの姿が浮かぶ。

(失せる煩惱おお!!)

レノは閉じた眼を再び開け、

「なんで覗きやつちやんだろうだなあ、俺は」

後悔の念を吐き出すと、

「何言ってるんだ。男はそうやって大人の階段を駆け上がるものさ。それにオレたちは冒険者だぞ？」 前人未到を踏破する者が、花園を前にして撤退なんて有り得ない」

レノは隣で雄弁に語る冒険者に眼を向ける。

牢屋の中で我が物顔で優雅に寛ぐミント髪の冒険者——クライアンに冷めた眼差しを向けた。

「花園を犯した結果が名声とは程遠いもんを得たけどな」

「それも冒険の醍醐味ってヤツさ。だいたいお前もノリノリだったろに」

クライアンの言うことは紛れもない凶星だ。

レノはユキナの裸体をまた観たいという欲望に駆られ、犯行に及んだ。そして彼らと同じ末路を辿り現在に至る。

しかもレノの居る牢は、あろうことかアデユクの牢の向かい側に位置しているのだ。

真正面に視線を移せば、重犯罪組織の一人に呆れの眼差しを向けられる始末。

何か言ってやりたい気持ちが湧くが、それは単なる八当たり過ぎないためレノは口を固く閉ざす。

沈黙が流れる牢屋の中、クライアンが思い出したように呟く。

「……そういえば明日だった。ギルドに使用人が来るの」

明日ギルドにアスガル伯爵の使用人が来て正装を仕立てる。

そのためにレノとユキナは小雨が降る中、草原で一角獣の討伐を請負った筈だった。

しかし冒険者の大半が牢の中に居る。それでは仕立てもクソもないのではないかとレノは重いため息を吐く。

「なあ、覗きつてどんぐらいで釈放されるんだ？」

「半日だな。つまりオレたちは何食わぬ顔で夕飯にあり付ける訳だ」

呑気に語るクライアンにレノの脳裏に激昂した女性冒険者たちの顔が浮かぶ。

ゴミを見る眼差しと軽蔑。そして眼光から溢れる怒りの念に冷や汗が流れる。

「滅茶苦茶怒つてたが？」

「いつものことだ。ちよつと高めの料理にデザートでもご馳走すれば赦してくれるさ」

それで赦されると分かつていればレノは苦勞も悩みもしなかった。

問題はユキナだ。果たして彼女は高めの料理とデザートで赦してくれるのだろうか

？

「ユキナは赦してくれると思うか？」

先程まで嘘のような騒ぎ声が鎮まり、静観していたアデユクも眼を大きく見開くばかり。

レノとクライアンの中に沈黙が流れると、彼は無理矢理笑みを浮かべる。

「オレの視線に気が付き、覗き穴を遠慮なく突き刺す子だ。……やっぱ激おこかもしれない」

クライアンの表情は心なしか青ざめていた。

きつと彼女が繰り出す斬殺劇でも思い浮かべたのかもしれない。

レノがそう一人納得しながら、ようやく気付く。

「それ赦されねえじゃん！　もしかして俺は魔物共と同じ運命を!？」

「普段怒らない奴が怒ると手が付けられないって言うよね」

「何で他人事なんだよ！　いや、他人だったな」

しかし冷静に考える。

ユキナが怒った所がレノには未だ想像できなかつた。

あの時、守衛に連行される最中ユキナはしっかりとこちらを見ていた。

あの時のユキナの表情はいつも通り無表情。しかもアホ毛は微動だにせず。

「……あれ？　もしかして怒ってすら無いのか？」

「それは……異性。いや男として認識されてないんじゃないのかな」

クラインの放った言葉の槍がレノを貫く。

彼には思い当たる節が有った。

それはまだ記憶に新しいスライム事件の時だ。ユキナは全裸のレノを見ても動じず、

あろうことか王子様抱つこで地下水路を疾走する始末。

「いやまさか……そんなねえ？」

レノの疑問を答える者は誰一人おらず、彼にとつて悲痛な沈黙が釈放までの間流れる
（とこ）。

パーティー準備に向けて

翌日の朝、ギルドに向かったユキナは道すがら昨日の事を思い出す。

結局男性冒険者は半日で釈放され、同じ一党の女性冒険者に少し豪華な食事を奢ることとで覗きの罪を赦されていた。

そもそもユキナは普段宿部屋のシャワーで済ませているため知らなかったが、この町の公衆浴場はよく覗きの被害に遭うのだと。

石畳の道を進みギルドの建物が目前に迫る中、

「レノは昨日居なかった」

昨日同じく釈放されたレノの姿が見当たらなかった事に一株の不安が芽生える。

まだエデンの残党が全員確保された訳ではない。もしかしたらレノが狙われているかもしれない。

そんな不安が頭の中に過ぎる中、ユキナがギルドの扉を開けると。

「いらっしやいましたかユキナさま！」

威勢の良い声に驚き、更にギルド職員の服装をしたレノにまたアホ毛がぴんつと真つ直ぐ立つ。

なぜ彼は低姿勢で接客の真似事をしているのか分からない。
そもそも敬称付けで呼ばれる謂れは無い。

何があつてこんな事になつていいのかユキナは周りを見渡した。
すると微笑ましげに見えている冒険者と苦笑を浮かべるルイと目が合う。

何が起こつてるのか悩むユキナにレノは、

「はっ！　もしやさま付けではなくお嬢様とお呼びした方が!？」

低姿勢のまま呼び方を変えた方が良いのか提案され、ますますユキナは混乱した。
混乱したままユキナは、思い切つて尋ねる。

「……どうしたの？　なんだか変だよ」

「変でしようかユキナお嬢様!」

「うん、変」

「……もしや不快でしょうか？」

これまで呼ばれ方を気にしたことも無いがこれだけははつきりと理解できる。
何故かレノと仲間としての距離感が離れている。

「不快じゃないけど……距離を感じるからいや」

感じた事をそのまま伝えるとレノは申し訳なきそんな表情を浮かべた。

「悪かつたよ。いや、俺なりに昨日の件をどうやって詫びようか真剣に悩んだんだ」

彼は覗きの件を謝りたかつた。そう告げているのだと理解したユキナのアホ毛が左右に動く。

正直言つて自分の貧相な身体を見たところで喜ぶ者は居ない。

レノはそんな自分の身体で鼻血を噴射させるが、きつと彼もその場のノリで覗きに及んだことは、なんとなく理解していた。

「そんなに気にしてないから良いよ」

「つまり赦してくれるのか？」

「ん」

「はっ！ 気にしてないなら覗いても！」

また再犯すると言うレノにユキナのアホ毛が激しく逆立つ。

「怒るよ？」

淡々と無表情で告げると彼は青ざめながら後ろに退がった。

幾ら無関心で自身に頓着が無いとはいへ、確かな不快感を感じるのも事実だ。

「お、怒るところわっ……てかつアホ毛はそう動くのか」

レノがそんな事を呟くと背後から声が響く。

「すみません！ 冒険者の方々は既に集まっておいででしょうか！」

振り向くとそこには、沢山のトランクをそれぞれ抱えたアスガル伯爵のメイドと執

事が勢揃いしていた。

そんな彼らにルイが応対すべく駆け寄り、

「ええ、全冒険者は揃ってますよ」

笑顔で告げる。

そんな彼女に執事の一人が感心を示す。

「おや？ 時間も自由な冒険者が勢揃いとは……」

「はい、昨日のちよつとしたおはなしの後に言い含めておいたので」

ルイが強調した言葉に男性冒険者の身体が震え、ユキナのアホ毛も震える。

怒ったルイは幽霊以上に恐いからだ。

「そうですか。では早速我々も仕事に取り掛からせて頂きましょう」

「では、仕立てには二階の空き部屋をお使いください」

ルイの案内に使用人達が着いて歩き、彼らから少し遅れてユキナたちも二階に向かった。

▽▽▽

男女別に別れたユキナたちは、メイド達が長テーブルに並べるドレスを各々選ぶ事に。
女性冒険者たちが着々と自身に合う色合いのドレスと装飾品を選ぶ中、ユキナは赤い

ドレスだけを手に取る。

「では、あちらの試着……貴女は」

首筋辺りで切り揃えられた銀髪、真面目そうな印象を受ける眼差しメイドがユキナに困惑の色を浮かべていた。

ユキナは彼女に見覚えがはつきりと有った。

彼女はシスティア・パーシアル。彼女にとって自分は仇の一人だ。

故にユキナもシスティアを前に戸惑う。

そして戸惑いから覚悟を決める。

そんな二人の間に漂う不穏な気配を察知したルイが静かに近寄り、

「システィア。貴女は奉公に出ている身でしよう？」

システィアの耳元で囁く。

彼女は眉を僅かに寄せ、頷いて見せるとユキナの手を引きながら試着室に向かった。

試着室に押し込められる形で入ったユキナは、ドレスを両手に抱えたままシスティアを静かに見つめる。

自身のした事は謝罪を告げることさえ赦されない。

眉を寄せるシスティアにユキナは沈黙するしかなかった。

そんな時だ。システィアがため息を吐いたのは。

「理解はしてます。だけど納得はできない……貴女にも分かるでしょう?」

「……ん。ふくらはぎの短剣で殺されても何も言えない。私はそれだけの事をした」
「いつでも殺される覚悟がある?」

「うん。ベル・パールを殺害したのは私だから」

過去に自分が犯した罪の一つをシスティアにはつきりと告げる。

すると彼女は眉を深めるばかりでユキナの小さな手を掴む。

「……貴女は確かに兄を殺した罪人。それは紛れもない事実、故にわたしは貴女を決して赦す事はない。ですが、これでも何も知らない者共よりはあの事件の背後や貴女が何をされたのかは把握してつもり」

決して赦しはしないとつきり告げるシスティアにユキナは頷く。

赦されようとは微塵も考えてはいない。

むしろ彼女には自分を裁く権利が有る。

ユキナがそう考えていると、身体に違和感を感じた。

視線を落とすとシスティアの手によって脱がされたブラウスが視界に移る。

はだけられ頭になった白い下着、突然の事にユキナは困惑した。

「な、なにを?」

「なについて。一度試着してもらわないと丈を合わせられないでしょう」

そういえばパーティー用のドレスを仕立てる為に試着室に居るのを忘れていた。そうこうしている内にシスティアの手によって衣服を脱がされ、赤いドレスを着せられていた。

見事な早技にユキナから感嘆の息が漏れる。

「……赤いドレス、似合いますね」

「そうかな？」

「ええ。7年前にテュラリア公爵家主催の社交界で貴女はいい意味でも悪い意味でも有名ですからね」

悪い意味でなら理解が及ぶ。

数々の貴族の御子息、御令嬢、果てには領主を殺害した自分がテュラリア公爵に養子として引き取られ、社交界の場に現れれば当然こう思うはずだ。

何故家族の仇が？ テュラリア公爵は何を考えるのかと。

その意味でユキナは大多数の貴族に恨みを持たれている。

それは当然のことだ。しかし良い意味で有名というのは、一体何のことかと首を傾げた。

だがシスティアはユキナの疑問に答える事はせず、作業を続けるばかり。

しばし沈黙が流れ、長い時のように感じた沈黙はシスティアが作業を終えた頃に漸く

終わりを迎えた。

こうして無事仕立てが終わり、あとはパーティー当日を迎えるばかりに……。

夜道の襲撃

満月と【楽園】が町を照らす頃、アスガル伯爵主催のパーティーも終わりを迎え各々の帰路に付く。

ユキナはレノたちと別れ一人宿屋を目指す。

夜風が髪を撫で、ふと左手に持ったトランクケースに目が行く。

「……気前がいい」

この中にはパーティーで着たワンピースドレスが入っている。

というのも帰り際にパーティーの記念品という名目でアスガル伯爵に冒険者全員がプレゼントされたものだった。

そして各々冒険者は彼から銀貨いっぱい、の金袋を褒美として受け取った。

報酬金が安いアスガルでは金袋いっぱい、の銀貨と成ればしばらく生活に困らないほどの額だ。

特に金銭面で苦労していた冒険者は喜び、満足そうに帰って行った。

「……レノも嬉しそうだった」

彼は手渡された金袋に最初は非常に戸惑っていたが、それが正当な褒美と知るや顔が

破顔し喜びに打ち震えていたのは記憶に真新しい。

仲間が嬉しいと自分の心とアホ毛も弾む。ユキナにとって仲間や親しい者の幸せこそが何よりも心に響く。

しかし自分の事になると途端に心は何も感じなくなる。

それでも自分は生きている。例え欠陥品であり感情が乏しくとも人は生きられる。

それで生が実感できるのかは人それぞれだが、ユキナは髪を撫でる夜風に息を吐く。静かな夜。住民が寝静まった静寂と吹く風に八年前の記憶が不意に呼び起こされる。

返り血に染まった衣服と血塗れの絨毯。そこに斃れているのはエデンの標的に認定された者達。

彼らがなぜ貴族を狙ったのかはユキナにも分からない。

無関心だったからというのも有るが、彼らには必要以上の会話をする事は無かった。

しかし何者かから資金を受け取っているのはユキナも度々眼にした事が有る。

それが誰だったのかも思い出せないが、酷く虚しそうな眼をしていたことだけは覚えてる。

「家族には全部話したけど……レノにも話すべき？」

依然としてそれが正しい判断なのか分からない。

何せ相手は悪辣で敵対者に容赦も慈悲も無いエデンだ。

まだ残党が潜んでいる中、必要以上にレノに教えるべきではない。それに最後にアスガル伯爵と交わした密約も。

物思いに吹けながら歩くユキナの背後に、不意に気配が漂う。

ユキナは背後に向けて容赦無くトランクケースを振り回した。

しかしトランクケースが空は背後の人物が身体を逸らした事により外れる。

「おっと。勘は衰えずか」

振り向くと金髪碧眼の優男が立っていた。

一見表情は穏やかに眼を細めているが、ユキナに向ける殺意は本物だ。

そしてアデユクと同じ顔の刺青に、

「エデンの残党」

ユキナは静かに身構える。

「アデユクが捕まったと聞いて遠方から遙々来てみれば、少しは背が伸びたんじゃないかな」

八年前のユキナの頭の位置に手を置いて見せる彼に、ユキナは地を踏み抜く。

武器は無いがそれは好都合。彼を無力化して騎士団に引き渡す。

あるいは無力化が無理なら時間稼ぎ程度なら。

ユキナは男の視界を揺さぶるべく高速で左右に動く。

男の視線がユキナをはつきりと捉える中、男の背後からユキナがトランクケースを振りかざす。

そのまま勢いよく振り下ろしたトランクケースを男は振り向かず片腕で受け止めた。

「……む」

「相変わらず素速い。瞬時に何往復もしてみせながら、それは高速が描いた残像。本命は背後から奇襲……魔力による補助も無しに凄いね」

捕まれたトランクケースが振り解けない。

あろうことがユキナの身体が一步も動く事さえ叶わなかった。

いつ何をされたのか理解が及ばないが、この男は間違いなく強い部類だと身を持って理解した。

「身体が……動かない」

「やれやれ闘争心は衰えず、か。……魔力が扱えないんじやあ君はその程度さ。現に囚われた影に君は何も抵抗できない。しかも高速移動に君の身体は負担に耐えられない、あと二回もやれば君の肺、心臓、血管は破れて死んでしまうだろう」

けど、君の体にかかる負担と反動は相当なものだろう？ 現に君の肺、血管、心臓は悲鳴をあげている。あと二回も同じ動きをすれば君は死ぬ」

男の忠告にユキナのアホ毛がはてなを形作る。

ユキナは高速移動における負担と危険性は重々理解していた。だから彼女は身体が保つぎりぎりの範囲で身体を酷使していた。

それをわざわざ指摘した上で忠告した理由が判らない。

分からないがユキナはそれでももがく。

「……むっ！」

ユキナは何とか身体を動かそうと力むがぴくりともしない。

ならば、と逆に全身脱力させてみるが逆にトランクケースの重みで手首を痛めるだけだった。

「このまま君を連れ帰って……いや、君と何処か遠くへ行くのも良いかもね。あの空に浮かぶ【楽園】のような場所にさ」

「……エデンの言いなりも一緒に行動するのも嫌っ！」

ユキナが珍しく感情を顕に叫ぶと男は興味深そうな眼差しを向け、そして優しげな笑みを浮かべた。

「そういえば僕と君が会ったのは本の数分だけだったね。じゃあ名乗るのが礼儀かな」

男はユキナの耳元に顔を近付け、そっと囁く。

そしてユキナは瞳が揺れ動く。

彼は確かにこう名乗った——アダムと。

アダムがユキナの柔かなで桃色の唇に顔を近付けた時だった。背後から金属音が響き渡ったのは。

「確かに名乗ったよ。っと、五月蠅い連中がそろそろと」

アダムが嫌そうに顔を顰めると、静止していた身体が動く。

同時に風切り音にユキナはいち早く身を屈めた。

すると頭上を爆雷を纏った斧槍が回転しながら頭上を通り過ぎる。

斧槍がアダムの首に迫る中、ユキナの襟首を何者かが掴み寄せた。

すると斧槍が纏っていた爆雷がアダムの首に到達する前に一気に弾け、豪雷と爆音が破壊を振り撒く。

「無事ですかユキナさま？」

「あつ……」

懐かしい声にユキナのアホ毛が嬉しそうに跳ねた。

「油断するな、エル」

「了解してますよ隊長」

やや間伸びした返答を強面で大柄の騎士に返すと、金髪を揺らしたエルがユキナに微笑んだ。

エルはユキナから手を離すと、背丈の倍を誇る大剣を片手に振り抜く。

「バカだね。ユキナごと躊躇いもなく仕掛けてれば殺せたかもしれないのに」

アダムは騎士の面々に告げると、彼の身体が霧に包まれるように消えて行く。

「どうやらアダムは去ったのだと理解したのは、彼が姿を眩ましてから数分後のことだった。」

そして騎士団が現場に駆け付け、アダムが遺した魔力の痕跡を調べ始めた。

そんな中、エルはユキナに微笑む。

「四年振り〜？ 少し背が伸びたんじゃない」

「あんまり変わらなない。エルは如何してこの町に？」

彼女はテュラリア家に仕える騎士の一人だ。

同時に義母が隊長を務める騎士団に所属していたはずが、何故アスガルに居るのか理
解が及ばない。

「実はエデン残党の暗躍をゴリス支部長経由でギルド本部から齎されてね。そこで
アスガル伯爵の要請も有り、各貴族は騎士を派遣する事になったの」

「それでエルが」

「ナタルさまはユキナさまの事を心配してましたからね。そりやあもう自分が行くと
言つて聴かないぐらいには〜」

彼女の話を、ユキナは甲冑を纏った義母が鼻息荒く出向こうとしている場を使用人と

騎士達が止めている光景が眼に浮かんだ。

「元氣そうで安心」

「そりやあもう元氣つてもんじゃありませんよ！ 先日山脈を一つ切断したばかりですよ」

義母の所業にエルが深いため息を吐く。

義母は修練と評して山脈を一つや二つ両断するのは別に今に始まったことではない。

少なくともユキナが引き取られた頃には既にテュラリア領の山脈は三つに両断された後だった。

懐かしむユキナを他所に隊長がエルの首筋を持ち上げ、

「貴様も調査に参加せんか！ すまないなユキナ嬢、こいつと積もる話しも有るだろうが任務中のため後回しにして欲しい」

「ん。お仕事申ならしやうがないよ」

そう告げるとエルは隊長に借りた猫のように連れて行かれ、ユキナは静かにその場を後にするのだった。

色々な事が一度に起こったユキナは着たままの状態でベッドに崩れ、静かな眠りに着く。

幻の令嬢

雨上がりの夕暮れ。パーティー当日を迎えた冒険者たちはアスガル伯爵の屋敷を訪れていた。

成り上がり貴族の一人とはいえ、廊下に飾られた調度品の数々。特に冒険者たちの眼を惹いたのが、アスガルの発展を描いた絵画だった。

冒険者として成功した者はアスガル伯爵の様に貴族になれる。

それが冒険者たちの共通の夢だった。

そして玄関先で己の夢を再確認した冒険者は使用人の案内に従い屋敷の中を進む。

男女別に分かれ、彼らは正装に着替える。

それから大広間のパーティー会場。複数の長テーブルに並べられた料理が食欲を唆る匂いを放つ中、先んじて到着した男性冒険者たちは各々の仲間を待っていた。

料理の匂い、使用人何トレイに乗せたワインとグラスの数々。今か今かと待つと遂に扉が開けられる。

開けられた扉から姿を見せた女性冒険者の正装に誰かが感嘆の声を漏らした。

「おお」

それぞれ選んだドレス姿の女性冒険者たちが男性を魅了していく。そんな中、ユキナは口を開けたまま呆然しているレノに小首を傾げた。

「どうしたの？」

「……へえ？ あつ、いや……なんつつうか、見違えたな！」

「ん。みんな綺麗」

「ユキナもそのドレス似合ってるぞ。つてか、普段より凄え可愛く見える」

頬を赤く染めながら素直な感想を告げるレノに、ユキナは赤いドレスに視線を移す。

髪もいつも通り、他の冒険者たちの様に装飾品を付け化粧した訳でもない。

そんな自分と比べてこの日の為にお洒落してきた彼女らの方が圧倒的だと内心で思う。

「ドレスに着替えただけ」

「……違うんだ。赤いドレスがアンタの白を綺麗に映すんだよ」

この場合どう返事をすればいいのか。ユキナは視線を彷徨わせ迷いながらレノに告げる。

「……ありがとう」

「お、おう！」

ユキナは改めて照れるレノに視線を向ける。

普段の彼は黒装束だが、灰色のスリーピーススーツを見事なまでに着こなしていた。長身で背が高く足も細い彼に妙にスーツが似合う。

同時にレノが普段と違う新鮮に、さっき彼が言っていた言葉に納得がいく。

「新鮮。レノもスーツが似合うね」

「そ、そうか。実はスーツなんて着たことねえから落ち着かないんだけどな」

「ん。冒険者として名が売れると機会は増えるよ」

「そうなる立場馴れた方が良いのか」

レノが一人納得した所でユキナは周囲を見渡す。

彼が自分を褒めた様に他の冒険者たちも仲間の正装を褒め、そんな彼らに恥じらう女性陣の様子にユキナのアホ毛が嬉しそうに揺れる。

そしてパーティー会場で其々の冒険者一党が仲間を褒め合い場が和み始めた頃。

パーティー会場の奥で静かに会場の様子を眺めていたアスガル伯爵が声を上げる。

「全員が揃った所でパーティーをはじめよう！ 遠慮は要らん！ 存分に食って飲んで！」

主催者の堅苦しい挨拶も無く、唐突に告げられる開催の言葉に冒険者たちがワツと喝采の声を上げた。

最初に主催者であるアスガル伯爵にあいさつをしよう。

打算も何も無く、ただ招待された側の礼儀としてユキナが歩き始める。するとレノが小さな疑問を投げかけた。

「なあ、見たところ椅子が無いんだが？」

「ん。立食式は立ち食い、長テーブルを右から順に食べられる量を皿に取り分けるのがマナー」

それを聴いて安心したのかレノが安堵の息を吐くと、彼はさっそく冒険者が並ぶ列の下に向かった。

彼を見送ってからユキナは静かな足取りで赤ワインを片手に、冒険者の楽しい様子を見てを肴に呷るアスガル伯爵の下を訪れる。

そして左足を前に出し、丁寧な言葉遣いを心がけながらドレスの裾を掴み一礼。

「……ラウム・アスガルさま。この度はパーティーに招待して頂きありがとうございます」

丁寧なあいさつにアスガル伯爵が一瞬驚く。

「ほう。テュラリア嬢に公的なあいさつが出来たとは……」

養子として引き取られ、社交界パーティーに出席するに辺り兄共々叩き込まれたマナーにユキナのアホ毛が左右に揺れる。

「……お義父様とお義母様の教育の賜物ですわ」

「そうか。貴女はあれから家族に手紙は？」

ユキナは最後にいつ家族に手紙を送ったのか記憶を探る。

そう、あれはレノと新しい一党を結成した頃だった。

イーリス北部を領土に持つテュラリア夫妻に宛てた手紙はそれ以降一度も送っていない。

「二ヶ月前に一度きり」

「それでは公爵閣下はさぞ心配してるのでないか？ 特に連中の動きはギルドを経由して伝わってるはず」

「……そう、ですね。夏が訪れる前には送ろうと思います」

「それがいい。……しかしあの噂は本当だったとはな」

アスガル伯爵が噂の真相に一人納得がいく様子で破顔した。

どんな噂に納得したのか気になったユキナのアホ毛がはてなを形作る。

それに気付いたアスガル伯爵は苦笑を浮かべ、

「失礼。何せ貴女の噂でしたからね」

「よくない噂……ううん、事実しか心当たりがない」

「良い噂、いや良い事実も有るものさ。……社交界に参加した貴族の御子息を魅了した事実がね」

それは本当に自分に対して向けられた事なのか。

怒みや憎悪なら理解できるが、それ以外の感情が理解し難い。

「魅了は何かの間違えでは？」

「いや紛れもない事実だとも。確かに貴女に恐怖する者が大半だろう。しかし貴女に恋をした者も少なくとも居ることだけは覚えておくといい」

微笑むアスガルに釈然としないながらもユキナは、

「……善処はします」

そう答える他になかった。

「何にせよ幻の令嬢を呼べたことは、個人的にも記念になりそうだ」

「……それはよかったです？」

アスガル伯爵は穏やかな眼差しを向けワインを呷る。

「さてと。貴女とゆつくりワインを飲みたいところだが、どうやらわたしもそこそこ人気が有るらしい」

彼の言葉に振り向くと、そこにはアスガル伯爵と話しがしたい冒険者たちが集っていた。

無理もない。彼は冒険者として成功した者。だからこそ冒険譚を聴きたいと願う者も今後の参考にと考える者も居るのは当然のこと。

ユキナはアスガル伯爵に一礼してから静かにその場から立ち去る。その際、少しだけ親しくなった男勝りな女冒険者——カルラに呼び止められた。

「おまえは聞かないのか？」

「ん。他に話したい人が居るから」

ユキナは近場で待機する使用人から、葡萄酒の入ったワイングラスを二つ受け取り皿に少量の料理を盛ってから、料理を頬張るレノの下に向かう。

そして彼にユキナはグラスを差出す。

「飲まない？」

「へえ、アンタが誘うなんて珍しいな。俺はてっきり飲めないもんじゃないと」

「麦酒は飲めないけどワインは大丈夫」

彼と乾杯したユキナは葡萄酒の匂い嗅ぎ、香りを楽しんでから一口葡萄酒を飲んで見せる。

平気だとアホ毛が強気に主張すると彼は笑みを浮かべ、それに倣い葡萄酒を呷った。

「結構甘いんだな。……酒が飲めるのも意外だったが、ワインは気になってたんだが、ワインの飲み方を知らなくてさ、助かったよ」

「ん。レノは気にせず飲むかと思った」

「そんなことは無いぞ？俺だって場の雰囲気は大事にするんだ」

普段ギルドの酒場なら間違いなく冒険者は酔った勢いで喧騒を奏でる。

しかし今日はパーティーということも有り、緊張しているのか冒険者たちは大人しい方だった。

特に酒を飲む勢いは普段と比べて弱いのも有るのだとユキナは思う。

そんな事を感じながらユキナはビールを口に運ぶ。

デミグラスソースの味わいと柔かなビールの食感に舌鼓を打つ。

「ん。美味しい」

「ほんと美味しいよなあ」

当たり障りのない会話にユキナはアホ毛を揺らしながら葡萄酒を呷る。

二人は談笑を続け、いつの間にか他の冒険者たちも混ざるようになり会場が賑わうのだった。

最終章 さよなら

動く者と薬売りを襲った事件

燭台に照らされた洞窟の中で三つの影が動く。

そこに静かな足音が反響し、一様に影が振り向いた。

「……独断が過ぎるのでは？ アダム」

腕に刺青を入れた老人が皺枯れた声で静かに咎める。

そんな彼にアダムはわざとらしく肩を竦め、

「君達が用意した彼女を見に行っただけだよ」

光を宿さない瞳で返した。

「あの失敗作の回収も急務ですが、嗅ぎ回る狂犬の注意もありませんよう」

「確かにね。彼らと遭遇したのは僕の過失だ。けど、君達は君達で僕に内密に動いてる

ようだけど……一体今度は何を企んでるんだい？」

アダムの指摘に三人の顔が僅かに強張る。

彼に内密で進めていた件が何処からか漏れた。そう理解した時には既にアダムの瞳

が心の内を見透かす。

「……ゴブリンなんかには魔障壁を仕込んだと思つたらそんな事を。くだらない、君達は僕を産み出してからもずっと愚かだね」

吐き捨てるアダムに今度は老人が開き治り、したり顔で宣う。

「しかし我らが居なければ、永くはないでしょう?」

「……そうだね。僕と君達は運命共同体、全く腹黒い連中だ」

アダムが呆れ返つた表情で呟くと、背後から突如爆音が鳴り響く。

同時に複数の金属音が響き、アダムは薄ら寒い笑みを浮かべる。

それに対して三人は怒りの表情を浮かべ、

「着けられたのか!」

「チツ、ここで連中とやり合ふのは下策!」

「また拠点捜しか……はあ、落ち着いた場所が欲しいなあ」

三人は口々に漏らすとたちまち転移魔法を唱え、何処かに消えて行く。

そんな彼らを見届けたアダムは、訪れた騎士団の面々に眼を細めながら、彼もまたその姿を消した。

後に残つたのは、誰かが拠点にしていた生活痕と悔しげに顔を歪める騎士達の姿だけだった。

▽
▽
▽

騎士の追撃が徒勞に終わった頃。

晴れ渡り、強い日差しが差し込む湖の畔で金髪の親子が薬草を摘み額に流れる汗を拭う。

ふと茂みが動き、それに気付いた少女は注意深く眼を凝らす。

魔物か動物か、それともクエスト中の冒険者か行商人か。

「お母さん、何か居る」

警告に母親が娘を庇うように背に隠す。そして母親が魔力を全身に巡らせる。

すると突如茂みから影が飛び出し、甲高い鳴き声と共に影が母親を弾き飛ばした。

何が起こったのか脳の理解が遅れた少女は呆然と甲高い鳴き声を鳴らす獣を見つめる。

そして、地面に薬草を散乱させ頭から血を流す母親が漸く視界に入った頃、理解が追いついた少女が叫ぶ。

「お母さんっ!! しっかりして!」

駆け寄り母親を抱き寄せる。

弱々しい吐息。しかし少女の手を母親が握り返し、

「……だ、大丈夫よ。それよりも……早く逃げなさい」

少女の背後から鼻息と蹄の音が響く。

「で、できないよ!! お母さんを置いて逃げるなんて、できない!」

少女が涙混じりに叫び、母親を抱き寄せた時だった。

背後の獣が少女の頭上を飛び越え、茂みの向こうに走って行ったのは。

「……白馬の一角獣？」

少女は立ち去った白馬の一角獣を頭に入れながら、その後母親と薬草の入った籠を抱え村に帰るのだが……。

道中で大量のオークが砦を築く光景を目撃することに。

動く冒険者一党

梅雨が明け初夏が訪れた頃。冒険者ギルドは騒ついていた。

彼らは一様に慎重な面構えでルイに尋ねる。

「ファルス村付近の湖に未確認の魔物が発見されたつて本当か？」

「あの辺りの魔物は、大抵調査されたと思つてたが、先日の北方の黒竜といひどうなつてんだ？」

彼らの戸惑いにも似た質問にルイは普段の表情を崩さず、毅然とした態度で答えた。

「まだ魔物の生態系に関して不明瞭な部分が多いですからね。それに目撃された魔物は白馬の一角獣だそうで此方も文献や過去の目撃、遭遇、討伐経歴を洗つてるところです」
続けてルイは先日アスベルたちが討伐した黒竜に付いて眉を歪める。

「今の時期北方は魔物の活動が活発化してる頃ですが、黒竜が何処からか現れたのか実は未だ不明なんですよ。その生息地域も含めて調査したいところですが、生憎と彼らは忙しく」

やれやれと肩を竦めるルイに、ユキナは「竜の顎」たちの顔が浮かび不安が増す。

兄達なら大丈夫と内心で言い聞かせるが、やはりエデンの残党が動いている状況で杞

憂が生まれてしまうのは無理もない事だった。

「じゃあその白馬の一角獣調査を俺達がやるってことか？」

「ま、簡単に言えばそうなりますね。新種か希少種、いずれにせよ報告次第では高額報酬を得るチャンスです！」

ルイのその言葉に冒険者はわっと歓声を上げ、一党が互いに牽制し合う。

そんな中で我は先にとクライアンが手を挙げ、

「やっぱ、ここは総合評価がDの俺たち一党が行くべきだろ」

自身が率いる一党とその仲間達に対するギルドの評価を主張する。

それに反発するように紫色のローブを着こなしたマシユが声を張った。

「それなら私らの一党は調査系をそこそこ熟してるわ。もちろん周辺に群生する薬草からその魔物がどんな食性かも調べてみせましょう！」

二組の一党の主張にレノをはじめとしたリーダー格が齒痒そうに顔を顰める。

そんな中、ルイは手を叩き注目を集めた。

「では調査の方はクライアンの一党とマシユの一党、二組にお願いしましょう」

ルイの言葉にクライアンとマシユが互いに眼を合わせ、

「報酬は半々でいいな？」

「それで文句は無いわ。でも不埒な真似をしたら削ぐから」

マシユの忠告にクライアンが顔を引き攣らせると、二人はさっそくクエストの受諾に向かうのだった。

そんな彼らを静かに見送ったユキナは、レノに視線を向ける。

「他のクエストに行く？」

「そうだなあ、今すぐ評価を上げるつてのは流石に無理だからな。ここは地道に活動するか」

こうしてユキナとレノはクエストボードに向かい、ファルス村近隣に出没したオーク討伐を請負った。

そこでクライアンとマシユの提案でファルス村の道中まで共に向かうことに……。

理解する者

揺れる馬車に乗り、ユキナはアホ毛を揺らしながら空を眺めていた。

冒険者一党が三組みも相乗りし、少々手狭な空間で馬車が揺れる度にレノの膝がユキナの胸部に当たると。

「わ、悪いな」

頬を赤らめ。しかしだらしなく鼻の下を伸ばしたレノにマシユの仲間の一人——燃えるような赤髪のエルデリカが鋭く睨む。

「鼻の下を伸ばしてるじゃないよ変態」

マシユが率いる一党は全員女性で全員がレノを睨んでいた。

「わ、わざとじゃないんだよ。だいたい馬車に十人も乗るってのは結構厳しいんだよ！」
手狭で窮屈な馬車の中、揺れれば事故も起こると理解していたユキナは特に気にした素振りも見せず窓から空に浮かぶ「楽園」を見上げるばかり。

そんなユキナに気が触ったのかエルデリカが、今度はユキナを睨む。

「おい欠陥女、あんたも何か言っちゃたらどうだい？」

エルデリカの罵声にレノが睨み返し、マシユが怒鳴り声を張り上げた。

「エルデリカ！」

強く怒鳴られたエルデリカはぼつの悪そうな表情を浮かべ、不貞腐れるようにユキナから顔を晒す。

するとマシユは申し訳無さそうな表情で、

「ごめんなさいね。ウチのエルデリカが失礼な態度を」

「別にいい」

無表情で涼やかな瞳で返すユキナに、マシユは一瞬困惑を浮かべるがすぐに態度を改め微笑む。

さっきのやり取りで悪くなった空気の中、クライアンが陽気に懐かしむように語り出した。

「マシユのメンバーはどうにも気が強いなあ。……そういえばユキナとこうして馬車に乗り合わせるのは久しぶりじゃないか？」

「ん。三ヶ月振り」

レノと組むよりも以前にユキナは二人の一派に一日だけ所属していたことがあった。

特に親しくなった記憶も思い出もないが、世話になった一派相手にユキナは小さく相槌を打って見せる。

ユキナの隣でレノが、

「……つまり俺と組む前の話しか。今更ユキナを誘ってもダメだからな？」
はつきりと二人に忠告する。

そんな彼にクライアンは肩を竦め、マシユが優しいな笑みを浮かべた。

「そりゃあ一度は追放したんだから誘わないさ。けどオレは兎も角マシユはどうか
なあ」

「もうウチは四人よ。それにエルデリカとシオンは……ああ思い出しただけで吐気
がっ」

ユキナが生み出した魔物の斬殺劇を思い出したマシユは気持ち悪そうに口元を抑え、
同様に思い出してしまったのかエルデリカとシオンが顔面蒼白で吐気を堪えていた。

そんな三人にユキナのアホ毛が申し訳なさそうに萎み、

「その節はごめんなさい」

彼女等に小さく頭を下げた。

そんなユキナに一人、栗色の髪に琥珀色で大きな瞳でユキナを見つめる少女——ポリ
シユカが尋ねる。

「そういえば、あなたが素早く魔物を討伐できるってエルデリカから聞いたけど……魔
力も使わずに一体どうやって？」

ポリシユカの純粋な質問にユキナを除いた面々が苦笑を浮かべる中、当人はアホ毛を

揺らしながら身振りと手振りを交えながら答える。

「シユツと行つてズババツ」

彼女の感覚頼りの説明にレノは、それじゃあ誰も理解できないだろと言いたげな眼差しを向けると。

「なるほど！ 脚に無駄な力を入れず踏込みのタイミングで呼吸術を合わせつつ速度で足りない筋力を補うのね！」

理解して眼を輝かせるポリシユカに誰しもが啞然とする中、ユキナだけは何度も頷き嬉しそうにアホ毛を揺らすのだった。

不吉な予感

鉱物資源や森と湖に群生する薬草の確保のため森を切り拓き、建設それたファルス村に不穏な気配が漂う。

そんな村に日が暮れ始めた頃、ユキナ達が到着する。

二人はさつそくクライアン達と別れ、宿屋です荷物を置いてからオーク討伐の依頼主の下に向かった。

その道中、一月程前に訪れた頃とは違う光景にユキナは小首を傾げた。

そう広くは無い村だが、出歩いている村人の数が以前よりも遥かに少ない。

そう感じたユキナは北の山岳から流れる川に目を向ける。

毎年この時期は村の子供たちが川遊びに興じている頃だ。

「……人が少ない」

「夕方だからじゃないのか？ それか白馬の一角獣やオークを警戒して立て籠っていると」

馬車が村の門を通り過ぎる際に、門番らしき人物が見当たらなかったことにユキナのアホ毛がはてなを形作る。

「……門番も一緒に？」

「……そういえば見なかったな」

物静かな村に森の木々が風で騒めく。

何か嫌な予感がするとユキナとレノは急ぐように依頼主の自宅を尋ねた。

木製のドアを四度ノックし、声をかけて漸く女性が玄関から姿を見せる。

短く切り揃えた茶髪の年若い女性。しかし彼女の顔色は青白く、寒気を感じるのか夏場には不釣り合いなカーディガンを羽織っていた。

「ああ、冒険者の方ですか」

「ビュートって村長の自宅は此処で間違いないか？」

「ええ。ですが主人は生憎と寝ていまして」

「……病気？ 貴女も具合が悪そう」

「ちよつと村で風邪が流行してしましてね。……えつと、オーク討伐の件でしたら全滅をお願い致します。それと詳細は薬売りのコレットを尋ねてください」

彼女はそう伝えると玄関を閉じてしまった。

そして玄関越しから、

「ゲホ！ ゲホっ！ つ……」

咳込む音が聴こえる。

「村が静かなのは風邪が原因か」

「酷そうだった」

ぼつりと呟くとレノの手が頭に浮かれ、

「俺達がしてやれる事はクエストを達成して安心させてやることぐらいだな。ついでに森の薬草を集めたって罰ば当たらないだろ」

そんな提案にユキナのアホ毛が真つ直ぐと立つ。

そうと決まれば薬売りのコレットから話しを聴き、ついでにどんな薬草が好ましいのか尋ねよう。

こうして二人は薬売りのコレットを尋ねるのだが……。

この時は未だレノもユキナ自身もただのオーク討伐が、最後になる事をこの時二人は想像もしていなかった。

▽
▽
▽

金髪に琥珀色の瞳の少女——コレットを尋ねた二人は、自宅に招かれ客間に通されていた。

「すみません、何も無い家で」

申し訳なさそうに紅茶を差し出す彼女にレノは笑って返す。

「いいって。俺達はオークに付いて詳細を聴きに来ただけだからさ」

気取らないレノの口調にコレットは小さく微笑む。

そんな中ユキナは一言、いただきますと声をかけてから淹れたての紅茶にひと口付ける。

渋味を感じさせないほんのり甘く、ローズマリーの香りに心が落ち着く。

「おいしく」

「あ、ありがとう」

「もう日暮れだからな、討伐自体は明日の早朝になるかもだが……オークの目的はどの辺りで有ったんだ？」

さっそく本題に入るレノにコレットは小脇に抱えていた地図を拡げて見せた。

するとファルス村と湖の中間に円で囲まれた箇所が指を立てる。

「この地点に大量のオークが砦を建造してた……けどオーク詳しい規模までは、その気が動転していたもので」

オークが村からそう遠くない地点で砦を建造していた。

平和な村の暮らしが脅かされる明確な脅威。確かに脅威だが、ユキナは一つ疑問を尋ねる。

「どうしてオークに気付かなかったの？」

棘を感じさせない純粹な疑問から発せられた質問だと理解したコレットは眼を伏せ

語る。

「普段森に入るのは村の狩猟者と薬売りの私と母だけ。それでもほぼ毎週は薬草を摘みに森全域を歩くことも珍しくないの。けどあの日以前にオークと遭遇したことは無かったわ」

ほぼ毎週森に入り、今までオークと遭遇したことが無かった。

生息しているが遭遇しなかったのは、単に幸運だったからと言われればそれで説明も付く。

ただ、ユキナにはどうしても遺物が頭にチラついて離れない。

しかしあの遺物は砕いた。それともエデンの残党が他に保持している。

そう考えたユキナは、一度エデンの残党から思考を外しま集中べき事に眼を向けた。

「オークの砦。村人は風邪が流行中……貴女のお母さんも？」

「いえ、お母さんは白馬の一角獣に襲われまして今は療養中でベッドで安静に……」

「……なあ、それって白馬の一角獣を目撃したのも？」

「ああ、それも私とお母さん。さつき二組の冒険者一党が尋ねて来たけど、彼らは野営しながら調査するって」

それを聞いたレノは慌てた様子で椅子から立ち上がった。

「なら急いだ方が良いかもな」

別に彼らなら心配は無いと思う。

そもそもクライアン達は一党としての熟練度も規模も自分達よりも遥かに上だ。

そんな彼らがゴブリンと同程度のオークに遅れを取ることは考えられず、

「……マシユ達なら心配無いと思うけど」

「クライアン達の心配はしてねえよ。俺が心配してるのはあいつらにオークがついでに全滅させられないかどうかだ」

レノの言うことに漸くユキナのアホ毛が真つ直ぐ立つ。

「そつちの心配……なら夜襲する？」

「そうだな。なあコレット……最後に確認なんだが、オークの砦は完成してるのか？」

「……発見したのがつい三日前、それから村長がクエストを発注してから二日。そして今日二人が到着する今朝頃には砦は既に」

想像以上にオークの建造速度が早かった。

こればかりは仕方ないとレノがため息を吐く。

「……森じゃあ資源は豊富だからな。というかこの村も大変だな、風邪が流行した時期に白馬の一角獣とオークなんて」

「実は風邪が流行り出したのも白馬の一角獣とオークの発見と同時期でして」

不運に見舞われたと言えば説明が付く。

ただ、やっぱりユキナはそれが偶然だとはとても思えなかった。

これにエデンが関わっていればきつと良くないことが起こる。

同時にあの時交わした密約が早くも果たす時が来る。

そんな予感を前にユキナはさっそく動き出す。

「……レノいそご。あつ、紅茶ご馳走様でした」

レノを急がせ、コレットにしつかりと礼を告げてからユキナはひと足早く彼女の自宅から外へ向かった。

そして森の方向を眺め、空が闇に覆われる頃に二人は森に入ることだった。

ユキナ・テュラリアの背中

松明に火を付けず夜の森を月明かりを頼りにユキナとレノは進む。

梟の鳴き声が木の葉の音と共に響く中、

「流石に整備されてるから歩き易いな。これで明かりがあれば最高なんだが」

「……奇襲に明かりは厳禁、足音も立てないように」

そう言ったユキナはエデンによつて体得した技術を駆使し闇夜には溶け込むように静かに進んで行く。

レノと一定の距離を保ちながら、彼が付いて来れる範疇で逸れないように。

(エデンの道具。ユキナのああいふ技量を見るとアデユクの言葉が刺さる)

彼女も以前アデユクと面会したらしい事は、彼女の退院間もなくにそれとなくルイから伝えられた。

どんな話しをしたのかをレノは聞かず、そして先日アスガル伯爵の主催のパーティ。その別れ際にアスガル伯爵とユキナが何かを話している所を偶然目撃した。

人気の少ない噴水の近く、月夜に照らされた長い白髪がいつも以上に綺麗に見えたあの晩。

そして解散後、程なくして聴こえた爆音に慌てて他の冒険者と駆け付けた時には既に終わった頃だった。

ユキナは襲撃犯に付いて騎士団には伝えたが、頑なにレノを含めた冒険者に語ろうとはしない。

またルイとゴリス支部長も知っているらしい様子はレノでも容易に察することができた。

ユキナの後を追うレノは心の何処で疎外感を感じながら拳を強く握る。

(まだ俺が頼りないから、だから相談の一つもしてくれないんだな)

クエストや冒険に付いては相談してくれるが、ユキナは決してエデンに関する事だけはあまり話そうとはしない。

不意にもしかしたら先日 of 覗きの一件で若干信用を失ったのではないのかと頭に過ぎる。

それも有るかも知れない。

そう思った矢先。不自然に森の中を照らす火の灯りにユキナが足を止め、木の影に身を潜める。

レノはそれに倣い、彼女が見ている方向がしっかりと視認できる位置で身を潜めた。

視線の先にはオークがこさえた松明と木製の壁、門に立つ二頭のオークが映る。

壁の囲い。その向こう側に見える木製の砦にレノは息を呑む。

同時に様々な疑問が湧くが今は目前のことに集中すべきだ。

レノはゆっくりと足音を消しながらユキナの側に近寄り、

「見張りのオークが2か。爆炎で派手にやるか？」

彼女にだけ聴こえる声量で話す。

するとユキナのアホ毛がレノの考えを否定するように動く。

「木造は燃え易いからダメ。……ここは任せて」

そう言うや否やユキナは剣を音を立てずに引抜き、レノの視界から一瞬で消えた。

彼女の向かう先が分かっていたレノが砦の門に視線を向けると、既に首を失った二頭

のオークが音を立てずに崩れた。

レノはアデユクが白い死神とユキナを呼んでいた言葉の意味を漸く理解した瞬間

だった。

音も認識さえもさせず、たった一振りでオークを絶命させる。

彼女からしてみればゴブリンに毛が生えた程度の魔物。

だが、存在を悟られず物音一つも立てずに討伐出来るかと言われれば恐らく熟練の冒

険者でも厳しいだろう。

仮に物音を立てずに討伐が可能な魔法を使えば可能だが、熟練者ほど弱い魔物に魔

力を消費することを拒む。

ユキナの魔力が使えないなりの戦い方と技術。きっとそれだけじゃないんだな。とレノは察しながら戯けた調子で彼女の下に歩む。

「それで何処から入り込む？ それとも中で大立ち回りを演じるか？」

「……一周してみよ」

ユキナの提案を受入れ砦を囲む壁を一周。

門番のオーク以外に見張りらしい魔物がおらず、どうにも杜撰な印象を受ける。

そして一周した所で入口が正面の門しか見当たらず、ユキナが壁に手で触れた。

「滑らか」

レノも壁に手を触れると、手触りが滑らかで細かく木材の荒面をヤスリか何かで丁寧に削ったのだと思うほどオークの砦を囲む外壁は丁寧な作りだった。

「壁をよじ登る案は使えないか」

「うん、爪先を引つ掛けることもできないじゃむり」

外壁からの侵入を諦めた二人は再び門に戻る。

そしてレノがゆつくりと門に右手をかけ、

「開けるぞ」

「準備良いよ」

戦闘体制に入ったユキナに合わせ、レノは魔力の光を左掌に球体状に作り出す。

静かに門を開けその光の球を放り投げると内部から眩い光が包む。

そしてオークの騒ぐ様な鳴き声を合図に門からユキナが飛び出る。

それに続くようにレノが入り込み、視界を奪われたオークを確実に一頭、一頭と息の根を止めて行く。

門の先、砦の中庭に居たオークを全て討伐した頃。

警鐘の音が暗闇の森に騒がしく響くのだった。

オークの騎士団

ユキナとレノの目前に迫るオークの群れ、いや彼らはさっそく群れなどという生易しいものでは無かった。

騎士の真似事か。オークの一头一头が鉄鎧に盾、鉄剣や鉄槍、果ては弓兵まで備えた一つの部隊だ。

「オークにこんな知能が有ったのか？」

レノの疑問ももつともだが、ユキナはオークが盾を媒介に魔障壁を展開した様子を見て確信を抱く。

オークはエデンによって戦闘訓練を施されこの地に転送されたのだと。

一体どうやって魔物に魔障壁や戦闘訓練を施したかまではユキナに理解が及ばない。

「エデン絡み」

「……何を企んでんだ？ もう壊滅してんなら大人しくしておけばいいのによ」

オークの盾兵が隊列を成し徐々に距離を詰める中、ユキナは剣を構え直す。

すると砦の入口で大剣を突き立てたオークが魔物の言語で指示を飛ばす。

盾兵の後方から指示を受けた弓兵による魔法の矢が二人の頭上に降り注ぐ。

咄嗟に左右に別れ魔法の矢を避けるが、盾兵が二人を囲む様に距離を詰める。

「……退路断ち、包囲、殲滅」

オークがやろうとしている事は、盾兵が獲物を追い立て弓兵が牽制を加え、更に剣と槍で確実に討伐するという動きだった。

おまけに盾兵は盾を媒介に魔障壁が展開されているためレノの魔法による一撃突破は不可能。

しかし元々大規模の媒介を必要とする魔障壁だ。ゴブリン同様に魔障壁が護れるのは前方のみ。

ならばとユキナは、頭の中でテュラリア騎士団で受けた訓練を思い出す。

「レノ、盾兵の後方に魔法を」

「おう。一発かますか!」

レノは左手に魔法の弓を作り、右手に雷の矢を作り出す。

そして魔力の弦に雷の矢をつがえ、斜上に矢を引き絞る。

更にレノがもう一つ詠唱を加えると彼の腕の筋肉が膨れ、

「食らえっ!!」

一発の矢を放つ。

強化された筋肉により限界まで引き絞られた雷の矢は、オークの盾兵を飛び越え部隊

の中心部に飛来する。

そして一頭のオークを穿つや否や雷が爆ぜた。

中心部に生じた雷が部隊全土に走り、背後から襲い来る雷に盾兵のオーク共が衝撃に負け隊列を乱す。

そこに白髪が月明かりに照らされながら舞う。

体制を崩した盾兵の盾を足場にユキナが弓兵部隊の前方に着地。

するとユキナは水平に剣を振り抜き、一振りですべての弓兵を斬り捨てた。

同時に地を弾ける様に駆け、弓兵部隊を斬り崩しながらオークの隊長の下に駆ける。

槍兵のオークが隊長を護るべく転身すると、レノが魔力を込めた拳を放つ。

拳による連打が槍兵の背中を腹まで貫き、血が留めなく土を穢す。

ユキナの背後をレノが護る。そしてオークの隊長と距離を詰める中、オークが重々し

い大剣を持ち上げた。

大剣の刃を炎が燃やし、それを振り下ろさんとオークの隊長がユキナに狙いを定める。

「……！」

足に筋力を込め、ガラ空きの首筋に狙いを定めたユキナは一気に弾けた。

大剣の炎の明かりに照らされた一閃が、あっさりと隊長の首を刎ねる。

首筋から夥しい量の血が噴水の如く噴き出しながら、オークの隊長はその場に崩れ去った。

「そつちは終わったか？」

レノの声に背後に視線を向ける。そこには既に拳を血に染め、亡骸の山を作り上げた彼の姿が有った。

「うん。速かったね」

「オーガの戦闘でコツを掴んだからな」

笑って答える彼にユキナのアホ毛が揺れる。

元々オーガを討伐できるレノが相手では通常のオークは無力に等しい。

しかし今回は異質なオークだった。騎士の真似事に武装した魔物を相手に負傷も無く討伐を果たした彼は間違いなく成長している。

「もうルイもレノの事を新米くんって呼べないかも」

「そうかあ？ たかがオークを討伐した程度で調子に乗らないでくださいって言われそうだが」

ルイがレノに微笑みながらそんな事を言う光景が想像できたユキナは小さく微笑んだ。

「……言うかも」

「アンタの笑顔をずっと見ていたい気分だが、まだ中が残ってるからなあ」
「うん。夜明けまでには終わらせて寝たい」

小さく欠伸を噛み殺したユキナは砦の扉に手を触れ、ゆつくりと重々しい扉を開く。

悪魔とアダム

砦内部は不気味な程に静寂に包まれ、辺りを見渡せどもオークの姿が無い。

不気味さに隠れて奇妙な気配を感じ取った二人は、慎重に砦内部をしらみ潰しに調べ
るのだが……何処にもオークの姿は無かった。

そして程なくして砦の最上階に到着した二人を待っていたのは、赤い皮膚に蝙蝠の翼
を生やした存在だった。

「っ!？」

「おいおい、何だつてんだよ!」

全身に鳥肌が立つ。そしてそれはユキナを銀色の双眼で視認すると嗤った。

「よもや契約者が欲していた小娘が現れるとは偶然か? それとも必然か」

巧みに人語を操り、レノは混乱から疑問を口にしていった。

「あれは魔物なのか? ……赤い皮膚はオーガに近いが」

「違う。あれは地底の奥底の生物……悪魔」

これまで冒険者として悪魔と何度か対人した事は有ったが、その時は【竜の顎】と共
にだった。

もしも上位悪魔の類ならユキナの物理攻撃は何一つ通用しない。ましてやレノの扱える魔法でも擦り傷を負わせる事も難しい。

二人が警戒を最大限に浮かべると悪魔は囁く。

「我は下位中の下位悪魔、病魔だ。我、驚くほど弱いぞお？」

悠長に語る病魔にユキナとレノは互いに顔を見合わせる。

彼は自らを病魔と名乗った。

そして村に風邪が流行し湖で発見された白馬の一角獣。森の中で発見されたオーク。

それが起こったのはたった一日の間。

つまり彼がファルス村に風邪を流行られた元凶であり、エデンの暗躍を裏付ける証拠

に他ならない。

「……討伐すりゃあ報酬増えるか？」

「悪魔一頭の討伐報酬金は金貨一枚相当だよ」

それを聞いたレノは両腕に魔力を込める。

ユキナも同様に剣を構え、一瞬視界が揺らいだ事に違和感を覚えた。

だが、ユキナは気の所為と判断して駆け出そうと足に力を入れると。

「待て！ その小娘を我に差し出さなければファルス村が滅びるぞ」

病魔が脅しの言葉を吐き捨てた。

その言葉にユキナは足を止め、構えた剣を下げた。

自分が原因で無関係な村が巻き込まれるのは容認できない。

その考えから病魔に一步踏み出す。

しかしユキナが病魔の下に向かうよりも速く、レノの拳が病魔の顔を殴っていた。

放物線を描いて宙を舞う病魔にユキナのアホ毛が驚いた様に立つ。

「バカじゃなのか!?! 誰がユキナを渡すかバーカ!!」

病魔は木製の床に転がり、歪んだ顔を抑えながら立ち上がる。

「村よりも小娘を取ると?」

「ユキナは渡さないし村も犠牲にしねえよ。だってよ、お前を倒せば問題無いだろ?」

レノの指摘に病魔は啞う。

「死を持って禍いを振り撒く撒く呪法が有る。病魔というのはそういう存在だ。かつてデス

コロット風邪によって何千と死に追いやったあの病気も病魔の仕業よ」

「……じゃあ私が行けば村は無事?」

「悪魔は嘘を吐かない。契約者の下へ貴様を届けるのが……はあ?」

それはあまりにも突然だった。

背後から光の刃が病魔を貫き、最上階に声が響き渡る。

「薄汚い悪魔風情が……穢れしその身を光を持ってして浄化せよ」

詠唱と共に光の刃が輝きを増し、病魔が絶叫をあげると彼の身体はあっさりと光と共に消滅して行った。

そしてその場に残った人物にユキナは剣を構え直す。

「……アダム」

剣を向けられながら名を呼ばれた彼は微笑みながら軽く手を振り、

「やあ、あの晩以来だね」

「ユキナ、アイツはエデンなのか？」

「うん。エデンで間違いないけど……エデンの残党が差し向けた病魔じゃないの？」

「薄汚い悪魔が僕の通り道に居たのが悪い。それに浄化魔法による討伐だから村の心配は無いよ」

我が物顔で語るアダムにユキナは小首を傾げた。

彼が立っている場所は最上階の窓辺だ。どう見ても人が通る道は無い。

「道は無いよ？」

「空も僕にとつては道と同義さ」

「訳が分からねえ。……ってかいい加減ユキナに執着するのは辞めろよな！」

レノの啖呵にアダムはどこ吹く風で笑って返す。

「僕の存在意義にも関わるから無理な話しだね」

「存在意義？」

ユキナの疑問にアダムは彼女に対して優しげな眼差しを向けた。

「そう。僕はアダムとして名を与えられ産み出された。偶然連中が発見した『アダムの種子』を植え付けてね」

種子という単語に、暗い地下牢で何かの種子を身体に植え付けられた記憶が蘇り、ユキナの顔が青く染まり次第に呼吸が荒くなる。

胸の奥底に溶け込んだ誰かの想いが脈動するような感覚にユキナは困惑しながら、アダムに警戒を向ける。

「連中つてのはアダム教団と敵対しながらアダムとイヴの再誕を試みた。その結果、僕は産まれ沢山の子供たちを犠牲にイヴを産み出した」

アダムの話しにレノは訳が分からないと言いたげに頭を左右に振る。

しかしユキナには決して無視できない話だった。

「ユキナはあまり覚えて無いだろうけど、あの地下牢で君と兄以外に生きてる者は居なかったよね？」

「……あの光景は夢で見る」

忌々しい悪夢の一つだとユキナが答える。するとレノの腕が肩を掴んだ。

「大丈夫か？ 辛いなら下がっていいんだぞ」

「それは困るなあ。僕は彼女と話す為にわざわざ騎士を誘導してまで姿を見せたんだ」
「誘導だつて？」

「うんざりする連中だからね、今頃騎士に捕縛なり殺害なりされてる頃合かな」
かつての仲間を平然と切り捨てる言動にユキナのアホ毛がはてなを形作る。

「……仲間じゃないの？」

「あんな連中が居なければ僕も産まれなかったし、君も感情を失わずあんな目に遭うことも無かつたよ。ましてやあの子達まで死ぬことは無かつたんだ」

「……先から聴いてればアンタは、償いたいのか？」

「そうかもね。……業腹だけど僕がこの先生きるには【イヴの種子】を持つユキナが必要なんだ」

アダムの発言にレノは一瞬呆け、そして拳を強く握る。

「結局はアンタもユキナが狙いなのかよ！」

「怒鳴るなよ。僕が連中に生み出され今日までやって来た贖罪が果たせないとなつては意味が無い」

「私を利用するつもりじゃ？」

「確かに利用かもね。何せ僕は君と居なければ恐らくは一週間以内に身体が朽ち果て死ぬ。それじゃあ何の意味も無い」

アダムが真つ直ぐ見詰める瞳に嘘が感じられない。

同じくエデンによる被害者としてユキナは、少なからずアダムに同情心を感じていた。

同時に、もしもあの時植え付けられた種子が「イヴの種子」だとすれば自分も長くは無いのかもしれない。

「……お兄ちゃんも死んじやうの?」

「アスベルは死なない。何せ彼に『アダムの種子』を植え付ける事は叶わなかったそう
だ」

それを聞いたユキナは安堵の息を吐く。

そしてレノに視線を向けてからアダムに視線を移す。

「……アダムは冒険者になるつもりは無いの?」

「おい何を? いや、よくよく考えればそれが最善だよなあ。結局アンタもユキナと同じく人生歪められちまったようだし」

「甘いなあ。世間はそれほど優しくは無いよ。現にユキナと違って僕は自分の意志で行動した、これは大きな違いだ。もしも君達とアスガルに向かえば僕は騎士に捕縛、あとは牢獄で処遇を決められる。その間に僕が死ぬ可能性が高いし何よりも先の事を考えるといま死ぬ訳にはいかない」

確かに彼の言う通りかもしれない。騎士が罪人の処遇一つ決めるのに一、二週間程の時間がかかる。

同時になぜ彼が今はまだ死ねないのか。贖罪の意味も有るのだろうか、ユキナにはそれだけじゃないように思えて仕方なかった。

「先に何か有るの？」

「空に浮かぶ【楽園】が崩壊した時、地上を身を挺して救ったのがアダムとイヴの二柱だった。その記憶と言えば良いのか、いずれ残りの破片が地上に墮ちる」

アダムの言葉にユキナは空を見上げた。

月と共に浮かぶ砕けた【楽園】が相変わらず映り込む。

ただ、ユキナが空を見上げていたのは単に好きだからではなかった。

あの【楽園】がいつの頃から酷く気になり、ふとした時には空を眺めていた。

「……あれが空から？ それって大崩壊の再来ってことか」

「そうなるかな。まあ、自分でも随分勝手な事を言つてると思うよ。……けどあの晩ユキナを連れて行こうしたのも事実だけだ」

「……そういえば」

あのパーティーの日にアダムはユキナを何処かに連れて行こうしていた。

彼なりの事情を理解したいま、ユキナは頭を悩ませる。

一週間後に死ぬかもしれないアダムと一党に誘ってくれた恩人のレノ。

何方と共に有る事は叶わない。

それでもアダムは死なせてはならない。そんな直感のような感覚が胸の奥底から語りかけて来る。

「……アダムを匿いながら冒険者を続ける？」

「……ユキナ、流石にそれは無理だろ。そんな事をすればアンタだけじゃなく、きつと両親だつて咎められるだろ」

「君の言うことも一理ある。ユキナにとって愛すべき家族に危害が及ぶのは許せないだろ？」

妙案だと思い提案したが、二人に咎められユキナのアホ毛が力無く垂れる。

「……ごめんなさい」

謝ると複数の足音が背後の扉から響き渡った。

最終話 ユキナが選んだ答え

背後を振り向くと、そこにはアスガル伯爵が率いた騎士団の姿だった。

なぜ彼らが此処に？ 疑問を浮かべるユキナに騎士団が剣を引き抜く。

アスガル伯爵は鋭い眼差しをユキナに向け、

「エデンの暗躍を聞き付け、駆け付けてみれば。これは……何故そのような者と話して
いるか。」

疑問にレノが庇うようにユキナの前に出る。

そしてアダムはいつでも魔法を放てるように魔力を込めていた。

そんな彼にユキナは静止の手を向け、

「待つて。アダムもエデンの被害者」

ユキナの訴えにアスガル伯爵は何かに納得したように瞳を伏せ、彼女との約束を口に
する。

「……なるほど。しかしわたしは貴女との密約を果たさなければならぬそうだ」
アスガル伯爵の言葉にユキナはアダムの隣まで退がる。

あの日、パーティー終了間際に彼と交わした密約。

『もしもエデンが領民に多大な犠牲を出す……ううん、そうなる前に私を追放して』

エデンの残党が自分を狙っている事は重々理解していた。

このままアスガルに留まれば、いずれ彼らは取り返しの付かない事態に及ぶ。

冒険者としての立場で各地を放浪する形でエデンの残党をユキナに集中させる考えも有ったが、それではレノが犠牲になってしまう。

アスガル領もレノも護りたい。二つを満たす条件は自分が居なくなれば済むことだった。

だからこそユキナは誰にも相談せず一人で悩み、考え抜いた末にアスガル伯爵に追放して欲しいと申し込んだ。

その時、彼は悩み葛藤しながら領民と個人を選んで密約を承諾した。

ユキナは願いを聞き入れてくれたアスガル伯爵に涼やかな瞳を向け頷く。

「ラウム・アスガルの名においてユキナ・テュリアアをアスガル領から追放処分とする！」

「ちよつと待てよ！ 何でユキナを追放するんだよ！」

「ファルス村に突如流行した病。捕縛したエデンの残党が全て自供したよ。彼女一人を手中に収める為に悪魔と契約し、病を拵めたとね」

「ごめんねレノ。こんな形でお別れになって」

アダムは魔力を引つ込め静観すると騎士も剣を納めた。

「……まさかユキナの意志だつて言うのかよ?」

納得いかず眼に涙を浮かべたレノに、ユキナは小さく頷く。

そしてアスガル伯爵はそんな彼の肩に手を置き、

「いづれ領地を得る腹積りなら選択に迫られる時が来る。彼女一人を犠牲にするか領民を護るかだろうかの」

「エデンの残党は全員捕縛したのか?」

「したとも。そちらの若者が残党の居場所まで騎士団を誘導してくれたおかげでね。

……わたしとしても温情として見逃してやりたい所だが、エデンはあまりにも多くの者を奪った」

「うん。ある意味で私も残党だから」

ユキナはずつと悩んでいた。テュラリア家に保護された自分はもうエデンとは関係ないのかと。

それでも時折り突き付けられるのだ。エデンの道具として白い死神として暗殺して来た事実を。

無関心では居られない、目を背けられない事実を前にユキナは先日答えを出した。

正に答えを出したきつかけは、【竜の顎】からの追放だった。

もう自分は不要な存在。なら責めて誰にも迷惑をかけずに残された罪を贖罪しなければならぬ。

それは目的でも夢でも無い。義務だからだ。

義務で動く自分と夢の為に動くレノとの大きな違い。

彼にとって自分はいずれ不要になる足枷になり得る存在だ。

ならいつそのこと全てを片付ける為にも、もう大好きな人々から追放され無いように。

もう自分が原因で誰も犠牲にしないために導き出した結論を彼女は実行に移す。

そしてユキナは、これまでの冒険の事を思い返して。

「レノ、楽しかったよ」

レノに微笑んだ。

「ダメだ！ 行くな！ 行かないでくれ！」

ユキナはレノの伸ばした手が腕を掴む前に……。

「さよなら」

それだけ言い残したユキナは窓辺から飛び降り、白髪が風を受け舞う中、暗い森に姿を消して行った。

▽
▽
▽

あれから数週間。

エデンの残党が壊滅したことが大々的に喧伝され、アスガル領の領民は領主の活躍振りに大手を奮って喜ぶ中。

レノはギルドの酒場でそんな彼らを静かに見つめていた。

町の住民はユキナが居なくなつた事を気に掛けても居なかつた。

少なくとも彼女の行方を気に掛けていたのは鍛冶工房の親方、ルイとゴリス支部長をはじめとしたギルド職員とアスガル伯爵のメイドぐらいだった。

やるせない気持ち溢れ、同時に心の消失感にレノは小さく。

「フラれちまつたなあ」

あの後レノは暗い森の中を懸命に搜索した。

ユキナが落下したと思われる地点を中心に何日も掛けて。

けれど戦闘の痕跡は発見されたが彼女は見付からず、本当に追放を受け入れ自分の下を去ってしまったのだと理解した時には、森の中で大声を張り上げて泣いていた。

「……アダムの奴もいつの間にか居なくなつてたな」

少なくともユキナが飛び降りた時にはもうアダムの姿は無かつた。

二人は一緒に居るのだろうか？ それとも共に死んでしまったのかは今となってはもう確かめようも無い。

「新米くん、いつまでも落ち込んでいたらダメですよ」

ルイの呼び掛けにレノは顔を向けず、不貞腐れ気味に返す。

「別にいいだろ。少しは失恋で落ち込んでよ」

「まあ、気持ちは分かりますとも。でもあの子が選んだ答えですから、それを受け容れるのもリーダーの務めですよ」

「理不尽だな。どいつもコイツも、ユキナに何の罪が有るってんだよ」

「……罪とは何か？ 暗示と洗脳によって暗殺者にされたあの子を罪人だと咎める者は実はそう多くは有りません。有るのは同情と哀れみ。ですがあの子自身が自らを罪人と位置付けた」

「アイツが罪と認めるから罪人だって？」

「ええ。ユキナちゃんはテュラリア家に引き取られた当初、殺して欲しいと懇願する程までに罪の意識に苛まれていたそうですよ」

「知らなかったよ。ユキナがそんなに思い詰めてたなんて」

「普段無表情で無関心ですからね。けど、だからこそ他者はあの子に対して感心も感謝も無い。寧ろ軽蔑感を強め責め立てる」

吐き捨てるように言うルイに、レノはため息を吐く。

「……俺がやれる事は、やっぱ領主になってユキナのような魔力操作不全症が差別無く

暮らせる環境造りだな。そしたら……ユキナも来るかもしれない」

「そうですね。あの子はアスガル領を追放処分にされたので、イーリス本土にも帰れない状況です。だから誰かが彼女の居場所を作ってあげないと、あの子はふらりと何処で倒れちゃうでしょう」

「そういえば、出会った時は行倒れてたな」

「偶に有るんですよ。食事を忘れちゃうことが」

ルイの言葉にレノは確かに、と小さく笑った。

そして彼は立ち上がり、

「とにかく今は行動するにも新しい仲間を探さなきゃな！」

「立ち直ると思って弄り……新人が明日到着予定ですよ」

ルイが何食わぬ顔で訂正した言葉をレノは敢えて聞かなかったことにした。

それが賢明な判断で、新人共々いつまでも彼女に弄り倒されるのは面白くないからだ。

「……そういえば、ユキナの兄貴は？」

「ああ、アスベルなら今頃あちこち駆け回ってると思いますよ。彼のアホ毛はユキナちゃんセンサーなので」

「……なあ、テュラリア兄妹のアホ毛ってなんなの？ 魔法じゃないんだよね？」

「魔法では有りませんね。まああの馬鹿は妹想いの力と宣ってますが……はあく、いい加減結婚式も挙げたいところですが、今年中には無理そうですね」

「なに？ アンタ結婚すんのか」

「そういえば言ってますね。実は私にとってユキナちゃんは将来の義妹なんですよ」
あつさりと告げられた事実には倒れそうになった。

まさかルイが正式な方法でユキナと家族になる日が遠からず有るといのが、なんとも言えない現実だった。

「……もう十分不貞腐れた。明日からのクエストに向けてちよつくら鍛錬に行つて来るわ」

「それが良いでしょう。なんなら騎士団の訓練に参加する事をおすすめしますよ。気付いて無いとは思いますが、ユキナちゃんの剣術も騎士剣術の応用ですから」

ルイの助言に礼を告げ、心機一転。新しい気持ちでレノは騎士団の訓練に参加した。そして彼は想像を絶する厳しい訓練に血反吐を吐きながら臨むのだった。

ユキナと再会を夢見ながら。

▽
▽
▽

何処の山小屋。その裏手に広がる花畑にユキナは倒れていた。
流れる雲を見上げ、夏の日照りを手で遮りながら眩く。

「あの雲みたいに流れたい」

「君はまたそんな事を。それよりも朝食ができたよ」

花を踏まないように注意を払いながら近付く人物の名を、ユキナが呼ぶ。

「……アダム」

あの日、アダムと会話しアスガル伯爵に追放を告げられた日。

森に飛び降りたユキナの前にアダムが現れ、しばし刃を交え現在に至る。

「傷の具合はもういいの？」

「おかげさまでね。……というか君だよ？ 僕を半殺しに追い込んだのは」

「……まだアダムのこと、全部信用できなかつたから」

義母に言われた剣を交えれば通じる。

それを実行し、アダムの魔法に全力で警戒しながらユキナは彼と戦った。

そしてアダムは真実しか語っていなかったと理解した頃には、放った拳が彼の鳩尾を撃ち深い崖に落としていた。

申し訳なく感じたユキナは、アダムに肩を貸しながら一眼を避けながら東へ東へと進み、アスガル領から遙東に離れたこの山脈に山小屋を建て彼と生活するに至る。

「そう思われても仕方ないか。何せいきなり言われても理解も追いつかないだろうし……本当はもう少し時間をかけたいところだったけど」

ユキナも未だアダムの話の話を全て理解した訳ではない。

「……【アダムの種子】と【イヴの種子】。私が私じゃ無くなるの?」

「君は君だよ。何せ君は【ユキナ】という個を確立させた状態で種子を植え付けられたからね。実際には影響は殆ど無い、強いてあげるなら空の【楽園】が無意識に見上げちゃうことかな。あと恐らく後遺症だとは思うけど、感情が抑制されてることくらいか」

「……ちよつと安心」

ユキナは身体を起こすと、アダムは眠そうに欠伸を搔く。

彼は夜遅くまで魔法の研究に明け暮れていた。

人の為になる魔法の開発。その一つとしてより効率的な魔障壁の研究をしていた。

そして朝食まで作った。ユキナは正座しては膝を叩く。

「良いのかい?」

「ん」

たった一言だけ返すとアダムが膝に頭を乗せ、

「……君のお友達に殴られそうだなあ」

「レノはそんなことしないとと思う」

「そうかな? 君はもう少し他者の感情を理解すべきだよ」

それだけ言うくとアダムは静かな寝息を立て眠りに付いた。

ユキナはそつと彼の金髪に手を置き、

「おやすみ」

風に花弁が舞う中、耳元で囁くのだった。

それから数年後。

【楽園】の破片が落下するという事件が起きたが、それは誰かの手によつて止められ人類と魔物が再び絶滅の危機に晒される最悪の事態は阻止された。

誰も世界を救つた英雄の正体も知らずに平和を謳歌する中、レノ・リーシュが【竜の顎】に次ぐ冒険者として名を轟かせ、彼は貴族に成り上がるという夢を果たす。

そして差別の無い領地がレノの手に作られた頃。新たな町リーシュには白い髪にアホ毛を揺らす少女と金髪碧眼の少年の姿も有つたという。